社会教育課 1

富田遺跡群
西大室遺跡群

土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報

昭和56年度

前橋市教育委員会

目　　次

序
例　言
富田遺跡群
Ⅰ　概　説……1
Ⅱ　発掘調査の概要……3
1.　遺構及び遺物……3
2.　発掘調査の経過……3
3.　住 居 跡……4
4.　古　墳……6
5.　その他の遺構……11
(1)　女　堀……11
(2)　ピ ッ ト……11
(3)　井 戸 跡……11
(4)　溝状遺構……12
(5)　道　跡……12
6.　ま と め……12

西 大 室 遺 跡 群
Ⅰ　概　説……14
Ⅱ　発掘調査の概要……16
1.　遺構及び遺物……16
2.　発掘調査の経過……17
3.　住 居 跡……18
4.　古　墳……48
5.　周 溝 墓……50
6.　元 城 跡……52
7.　その他の遺構……54
(1)　墓　壙……54
(2)　ピ ッ ト……55
(3)　溝状遺構……55
(4)　掘立柱建物跡……55
(5)　小鍛治跡……56
(6)　井 戸 跡……56
8.　梅の木地区……57
9.　ま と め……67

序

近年農地の効率的利用を図るための土地改良事業が大きな規模で進められています。このような開発事業と埋蔵文化財の保存という事は常に難しい問題を含んでおり，前橋市教育委員会においても，文化財保護という立場から，この問題に取り組み，両者の調整に努力しております。

ここに報告する富田遺跡群発掘調査，西大室遺跡群発掘調査についても昭和54年度から実施され，今年度で3年目となる長期にわたる事業であります。なお富田は，今年度をもって土地改良が完結しましたので発掘調査も終了となります。

調査の結果，富田遺跡群では，古墳および古墳時代から平安時代の竪穴住居，中世女堀遺構，西大室遺跡群では，弥生時代から平安時代の各時代にわたる竪穴住居，周溝墓，古墳，中世の墓壙と城跡等，これらの地域の歴史を解明していくにあたって貴重な資料が数多く得られました。ここにその成果の一端を報告いたします。

この調査を実施するにあたり，終始御協力いただいた農政部土地改良課，富田南部土地改良区，西大室土地改良区の方々，また酷暑，酷寒の中で直接発掘作業に携わった調査担当者，作業員，の方々に対して厚くお礼申し上げます。

昭和57年3月31日

前橋市教育委員会

教育長　金　井　博　之

例　　言

1. 本書は，前橋市土地改良事業実施地区（富田南部，西大室）内の埋蔵文化財発掘調査についての概報である。
2. 調査主体は，前橋市教育委員会，前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。
3. 調査担当者および調査期間等

○富田遺跡群

所 在 地　前橋市富田町　東原775の1他

調査期間　昭和56年4月17日～昭和56年6月2日

担 当 者　前原　照子，松村　親樹，江部　和彦，入内島　裕美

調査面積　4.500㎡

○西大室遺跡群（土地改良事業第1工区内と第2工区内に分かれ，後者を以下梅の木地区とする）

所 在 地　前橋市西大室町北山1918の6他，西大室町梅の木2544他（梅の木地区）

調査期間　昭和56年6月15日～昭和56年1月9日

担 当 者　前原　照子，松村　親樹，江部　和彦，入内島　裕美

木部　日出雄，岸田　治男，鵜木　晋一（梅の木地区）

調査面積　77,500㎡（第1工区7.5ha，第2工区0.25ha）

4. 本書の執筆は担当者が分担し，遺物整理，図面整理，図版作製，遺物写真等は担当者および整理作業員が分担した。
5. 発掘調査にあたっては，地元を中心とした多勢の発掘作業員の方々の協力があった。
6. 本調査における出土遺物，実測図，写真等は一括して前橋市教育委員会で保管している。

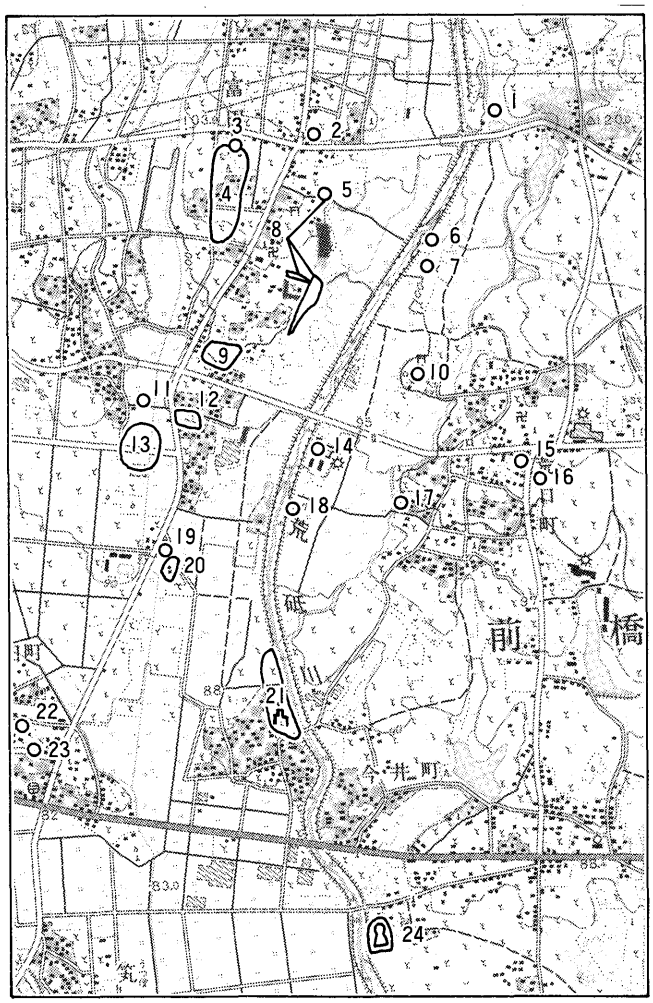
富　田　遺　跡　群

I　概　　説

赤城山南麓は，長くのびる裾野を開析して谷が入り込み，多くの舌状台地が発達している。荒砥川と桃の木川間の赤城山麓がほぼ平坦地に移行する先端も，標高100m前後で，周辺の水田と比高10m以内の低い舌状台地が3本形成されている。

前橋市富田町の集落は，その3本のうち，荒砥川に接する東側の台地上を南北に通る道路沿いに連なっている。

第1次調査では「上毛古墳綜覧」荒砥344号墳のおとうか山古墳が「渡り」を持つ幅3.5m程の堀のある径29mの円墳であることと同古墳から700m程南に，1基のみ河原石を使用した竪穴式で他は削平されて主体部の残らない径11m～28mの円墳7基の存在が確認された。その他縄文前期の土器を伴う竪穴住居跡1軒，奈良平安期の竪穴住居跡8軒が古墳に近接して検出された。さらに古墳



（挿図1の説明）

1　御殿山古墳
2　荒砥348号墳
3　大塚古墳
4　高石遺跡
5　おとうか山古墳
6　大道古墳
7　小塚古墳
8　第1次調査地
9　第2次調査地
10　諏訪西遺跡
11　少将塚古墳
12　女堀遺跡
13　大泉坊遺跡
14　権現山古墳
15　大道古墳B
16　大道古墳A
17　前原遺跡
18　前田遺跡
19　宮田遺跡
20　東原遺跡
21　今井城遺跡
22　木瀬6号墳
23　木瀬7号墳
24　今井神社古墳

挿図1　周辺の遺跡分布図（1：25,000）

を切って中世古墓群が検出され骨蔵器，板碑が多数出土した。第２次調査では，第１次調査地点より南西100m程離れ富田の丘陵南端に近い地点で，弥生時代から平安時代に及ぶ竪穴住居70軒が検出された。

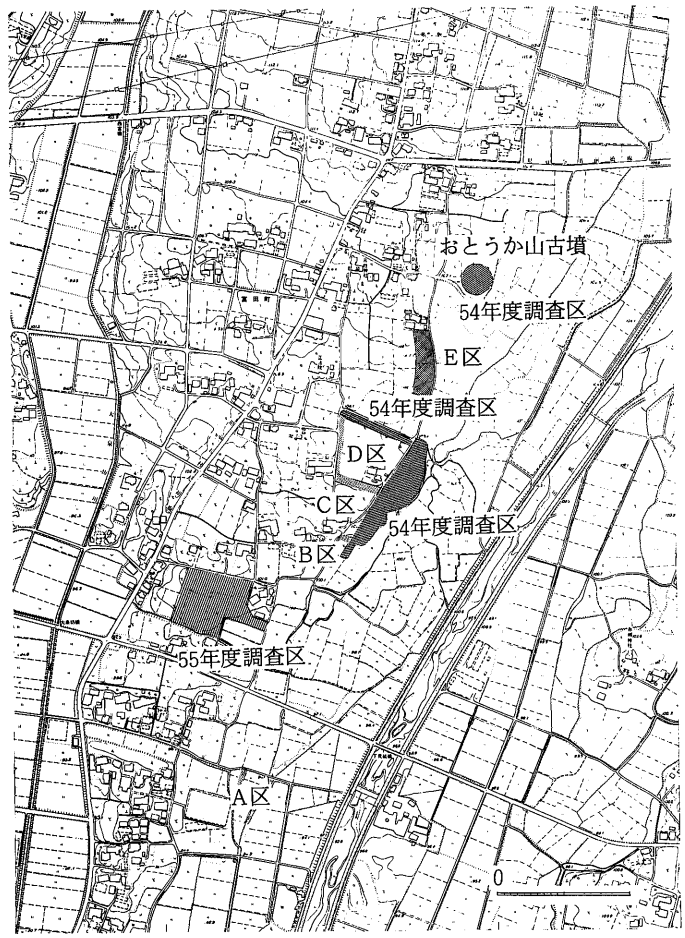
弥生時代に属する３軒の住居跡からは，樽式土器の範疇に入る甕・壺・高坏等が出土し，古墳時代の住居跡は６世紀後半から７世紀にかけて，８軒が検出された。奈良・平安時代の住居跡は57軒で時期は，奈良時代から平安時代まで連続して下限は10世紀代と考えられる。

今回第３次調査は，おとうか山古墳と７基の古墳群の中間地点と同古墳群の西側に隣接した部分と富田の丘陵南端のさらに南の水田部分であり，この調査をもって富田遺跡群の調査を終了する。

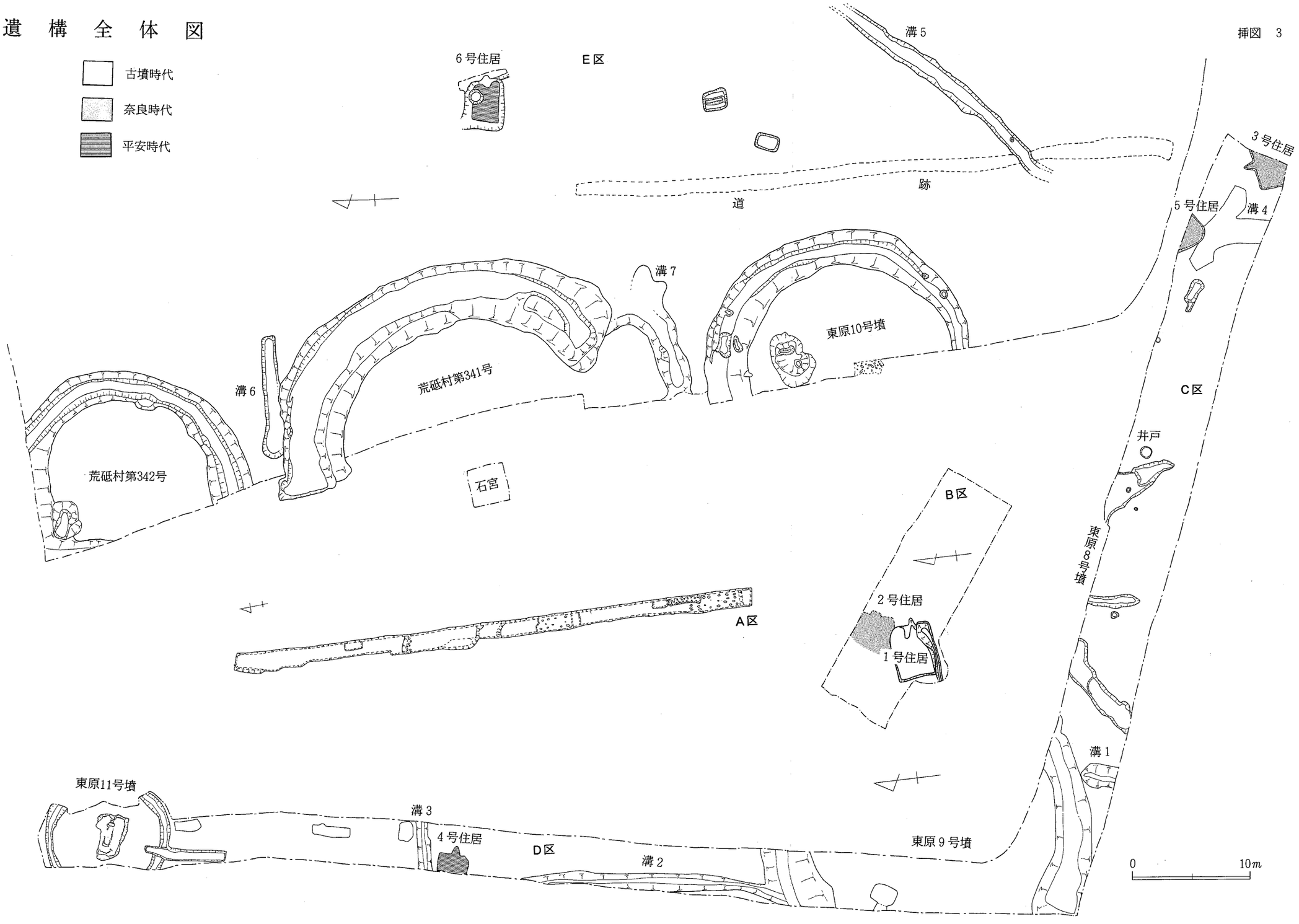
前橋市教育委員会の調査以外でこの富田の丘陵を見れば，縄文時代早・前・中・後期の土器片が多数散布している。また「上毛古墳綜覧」では21基の古墳が記録されている。（このうち３基は前出の７基の中に含まれる。）丘陵先端部の終った地点には中世女堀遺構が比較的よく残っている。鎌倉・戦国時代の遺跡，遺物としても正法院境内にある阿弥陀三尊のほか板碑・宝塔等仏教にかかわる遺物も多い。これらのことおよび第１次・２次の調査結果から，この富田の丘陵は，縄文時代から現代まで，ほぼ間断なく人々の生活の営みが続いていたと考えられる。

富田町の周辺では，縄文時代の遺跡として，後期前半に属すると思われる笂井遺跡が発掘調査された記録があり，弥生時代の遺跡としては，富田とは荒砥川の対岸南東方向で荒口前原遺跡が，発掘調査されており，３世紀初頭に比定される壺，甕等の良好な資料を持った竪穴住居跡が検出されている。古墳時代の遺跡としては，新屋遺跡で，石田川土器を伴う住居跡が，奈良・平安時代では，寺畑・諏訪西・前田・荒子小学校々庭・荒砥保育所の各遺跡で竪穴住居跡が調査されている。

挿図２　調　査　区　位　置　図



遺構全体図


古墳時代
奈良時代
平安時代
6号住居
E区
溝5
跡
道
3号住居
5号住居
溝4
溝7
東原10号墳
荒砥村第341号
溝6
荒砥村第342号
C区
井戸
石宮
B区
東原8号墳
2号住居
1号住居
A区
溝1
東原11号墳
溝3
4号住居
D区
溝2
東原9号墳
0
10m

Ⅱ　発掘調査の概要

調査面積4,500㎡は5地区に分散しており，南から北へ，A・B・C・D・E区とした。

A区は，道水路部分にトレンチを入れ女堀遺構を地層断面で確認した。B区は第2次調査区域に隣接しており，古墳時代後期1軒，奈良時代後半1軒の竪穴住居跡を検出した。C・D区は，道水路部分でC区は東西，D区は南北に長く，かぎの手に続いており，やはり第2次調査区域に隣接している。C・D区からは，周堀のみの円墳2基と，偏平な河原石で組まれた竪穴式の主体部を持つ円墳1基，奈良時代3軒，平安時代2軒の竪穴住居跡が検出された。E区は2,500㎡程の広さをもち，第2次調査のおとうか山古墳南50m程にあり，南北に並ぶように3基の円墳が周堀のみ残して検出された。その他この地区からは，平安時代の竪穴住居跡1軒，ピット，縄文ピット，溝，道などが検出された。

A区を除いて，いずれも耕作等により削平と攪乱が進んでいたり，調査区域の関係で，部分的な検出となり，完全な遺構像はつかめなかった。遺物は，C・D区の周堀のみの古墳の周堀内からは，土師器壺と坏，土師器壺と椀がそれぞれ出土し，竪穴式の主体部のある古墳からの出土はなかった。E区3基の古墳周堀からは，埴輪が，円筒，形象を問わず，比較的細かく割れた状態で出土した。竪穴住居跡からは，土師器甕，坏が主体であり，器種，数とも出土は少なかった。

1.　遺構及び遺物

イ　遺構数

古墳6基・竪穴住居6軒（古墳時代1，奈良時代3，平安時代2），女堀遺構1か所

その他　（溝7，道1，ピット12，縄文ピット2，井戸1）

ロ　遺物量

古墳にかかわるもの　埴輪（円筒，形象）土師壺　パン箱26箱

住居にかかわるもの　土器，石製品　パン箱4箱

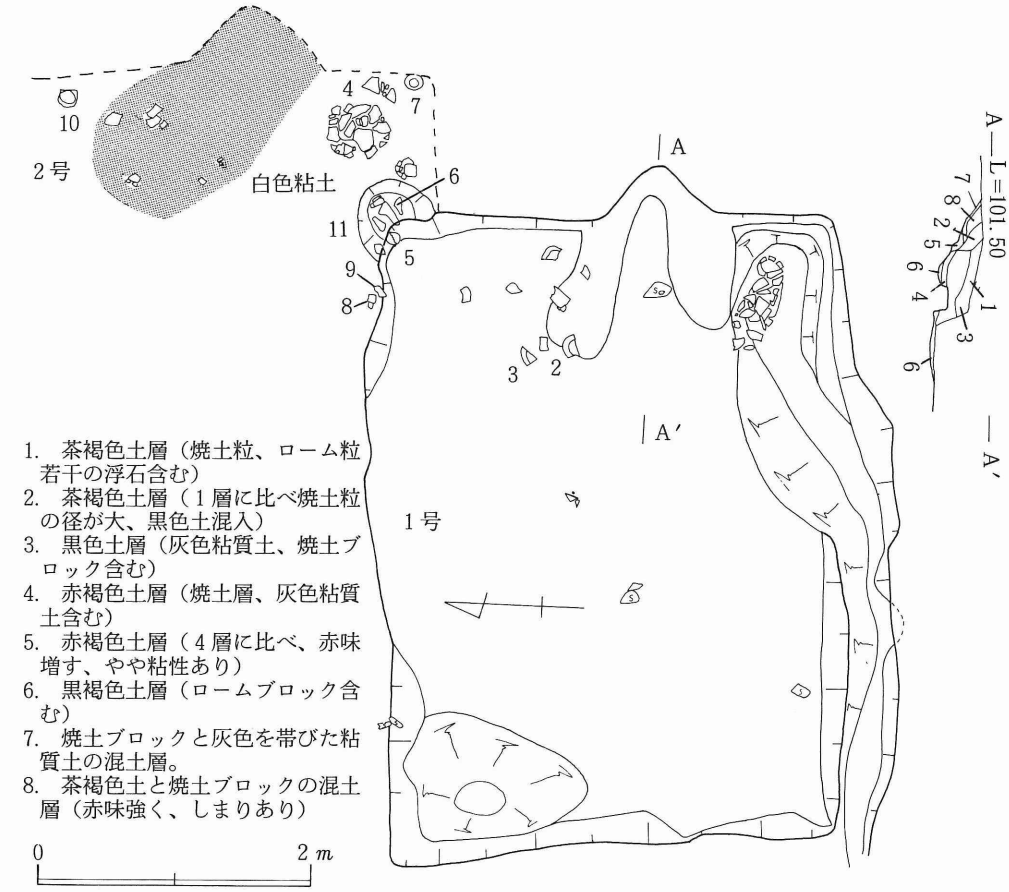
2.　発掘調査の経過

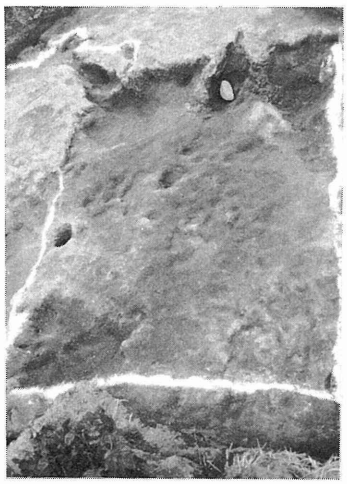
4.17　機械搬入，A・B区試掘区設定，表土はぎ	5.21　C・D区全体実測，E区荒砥村第342号実測
4.18　B区住居跡確認，1・2号住居排土	5.22　E区荒砥村第341号，東原10号墳実測
4.20　C・D区抜根，試掘区設定	5.26　C区完了，D区東原11号墳主体部写真
4.22　E区試掘区設定，排土開始	E区溝状遺構写真
古墳周堀確認，C区3号住居排土開始	5.27　C区全体写真―C区完了
4.24　D区遺構確認，排土開始	D区全体写真
4.25　D区東原11号墳範囲確認	5.28　C・D区Ｐｉｔ群全体写真
4.30　A区全体実測開始	B・E区全体写真
5.1　A区女堀完了，B区全体実測開始	5.29　遺物洗浄開始
5.6　B区完了	6.1　D・E区完了
5.8　D区東原11号墳主体部断面実測	6.2　遺物洗浄，残務整理
5.11　C区遺構実測	

3. 住 居 跡

挿図4

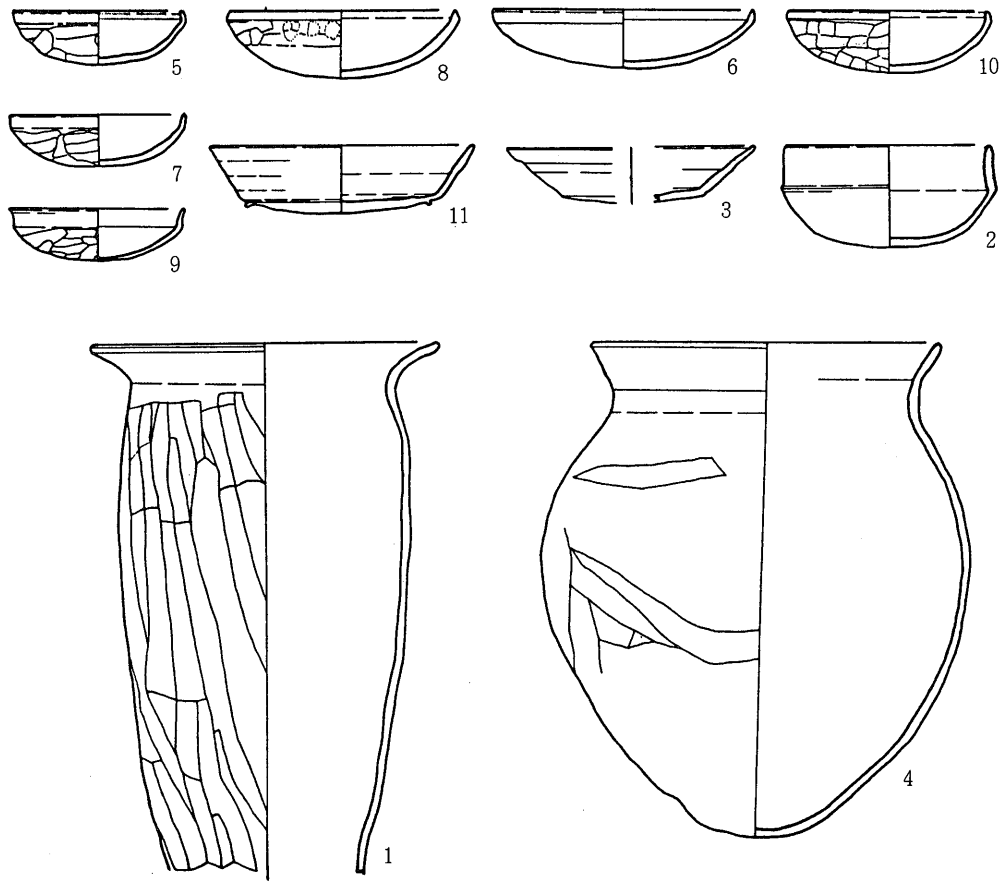
1・2号住居跡





図版1 遺 構 写 真

B区はこの二つの住居跡の他，遺構は検出されなかった。1号住居は東西が長い長方形で南壁が後世の溝によってわずかに切られている。耕作のため床面は凸凹が目だち，壁の立ち上がりも西壁が11㎝，東壁が20㎝と全体に浅い。竈は東壁中央部にあり，煙道がわずか壁外に出ている。袖は灰色粘質土で構築され，内部には支石がある。貯蔵穴は竈の東南に接して，深さ29㎝，幅35㎝程の隅丸方形であるが，長さは溝のため確認できない。中に長胴甕があった。北西隅に堀り込みがあり柱穴は認められない。2号住居は，床面が1号住居よりさらに20㎝前後高く，耕作のため，ほとんど攪乱を受けていて，貯蔵穴と白色粘土，焼土散乱範囲から推定される竈跡から住居南東隅が想定されるのみに留まる。



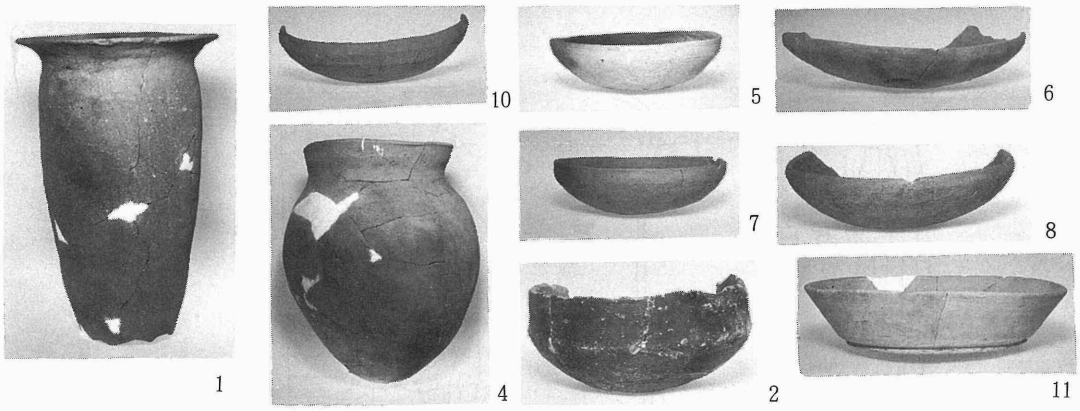
挿図5　1・2号住居跡出土遺物実測図

1・2号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量（cm）	技法等	胎土	備考
1	土師器 甕	口径 23.0	口縁部横ナデ，胴部縦もしくは斜方向ヘラ削り	石英，砂粒含有	色調茶赤褐色，焼成良好，80%残
2	土師器 埦	口径 13.6 器高 6.8	口縁部横ナデ，底部ヘラ削りと推定されるが，器面荒れて不明瞭	小粒子含有	色調黒褐色，一部淡褐色，焼成普通，80%残，雑な作り
3	土師器 坏，高坏？	口径 16.4	口縁部横ナデ，底部不定方向ヘラ削り，内部ナデ	石英含有	色調明褐色，焼成良好，60%残
4	土師器 甕	口径 22.6 底径 3.5 器高 32.7	口縁部横ナデ，胴部上半横方向ヘラ削り，中～下半斜もしくは縦方向ヘラ削り	砂粒含有	色調淡茶褐色，焼成良好，90%残，全体に薄手，歪み有り
5	土師器 坏	口径 11.0 器高 3.6	口縁部横ナデ，周辺部横ヘラ削り後中央部一定方向ヘラ削り	砂粒含有	色調淡褐色，口唇部一部火を受ける
6	土師器 坏	口径 17.1 器高 3.8	口縁部横ナデ，底部不定方向ヘラ削り，器面荒れており技法等不明瞭	砂粒含有	色調淡褐色，底部火を受ける，焼成良好，完形 歪みあり全体に雑な作り
7	土師器 坏	口径 11.5 器高 3.5	口縁部横ナデ，周辺部横ヘラ削り後，中央部一定方向ヘラ削り，内部にヘラ状工具でナデた痕跡有り	雲母含有	色調淡褐色，焼成良好，完形
8	土師器 坏	口径 14.8 器高 4.5	口縁部横ナデ，底部不定方向ヘラ削り，内部丁寧なナデ，胴部に指圧痕有り	若干の砂粒含有	色調暗褐色，焼成良好，80%残，全体に丁寧な作り

番号	器　種	法量（cm）	技　法　等	胎　土	備　考
9	土師器 坏	口径　11.8 器高　3.4	口縁部横ナデ，周辺部横ヘラ削り後，中央部一定方向ヘラ削り，内部やや雑なナデ	少量の砂粒含有	色調淡褐色，焼成良好，55％残
10	土師器 坏	口径　13.2 器高　4.1	口縁部横ナデ，周辺部横ヘラ削り後中央部一定方向ヘラ削り，内部にヘラ先で傷つけた痕跡有り	堅　緻	色調橙明褐色，焼成良好，90％残，器肉が部分的に薄い
11	須恵器 高台付坏	口　径17.6 高台径11.9 器　高 4.5	右回転ロクロ整形，底部切り離しはヘラ切り後，回転ヘラ調整，体部ロクロナデ	若干の砂粒含有	色調白灰色，焼成良好，完形，高台は形のみで実際的な役割を果たさず

No.1～3は1号住居跡出土遺物，No.4～11は2号住居跡出土遺物



図版2　1・2号住居跡出土遺物

竪穴住居跡遺構一覧表

住居番号	形状 壁走向	規模（m） （長壁×短壁） 壁高（cm）	床面積（㎡）	かまど 位置	かまど つくり幅（cm）	周溝	柱穴	貯蔵穴	備考	重複関係
1	長方形 N—4°—W(東)	4.4×3.25 ?	14.3	東壁南寄	粘土 60	×	○(1)?	?	本文参照	1→2
2	長方形 ?	? ?	?	東壁南寄? (痕)	粘土? ?	?	?	○(1)	本文参照	1→2
3	? N—2°—W(西)	? 30	?	北壁中央?	60	○ (一部)	?	?	北西コーナーのみ確認。周溝は西壁から北壁のかまど袖部まで続く。	
4	? N—32°—E(東)	2.3×? 19	?	東壁南寄	袖石 23	×	?	○(1)	東半分のみ確認。かまど付近から南東隅にかけて固い床面。貯蔵穴は浅い。	
5	? N—66°—E(南)	? 18	?	?	?	×	?	?	南西コーナーのみ確認。中央部東寄り付近に一部固い床面。	
6	長方形? N—11°—E(東)	4.2?×3.1? 12?	13?	東壁南寄 (痕)	袖石 ?	×	?	?	かく乱をうけており，掘り方は凸凹で規模等は推定。固くしまった床面と思われる部分が点在している。	

○住居の壁走向は南北線を基準とした。
○規模は壁の下端を計測した。
○壁高は遺構確認面からの最深値を計測した。
○かまどの幅は袖部の内径を計測した。

4. 古　　墳

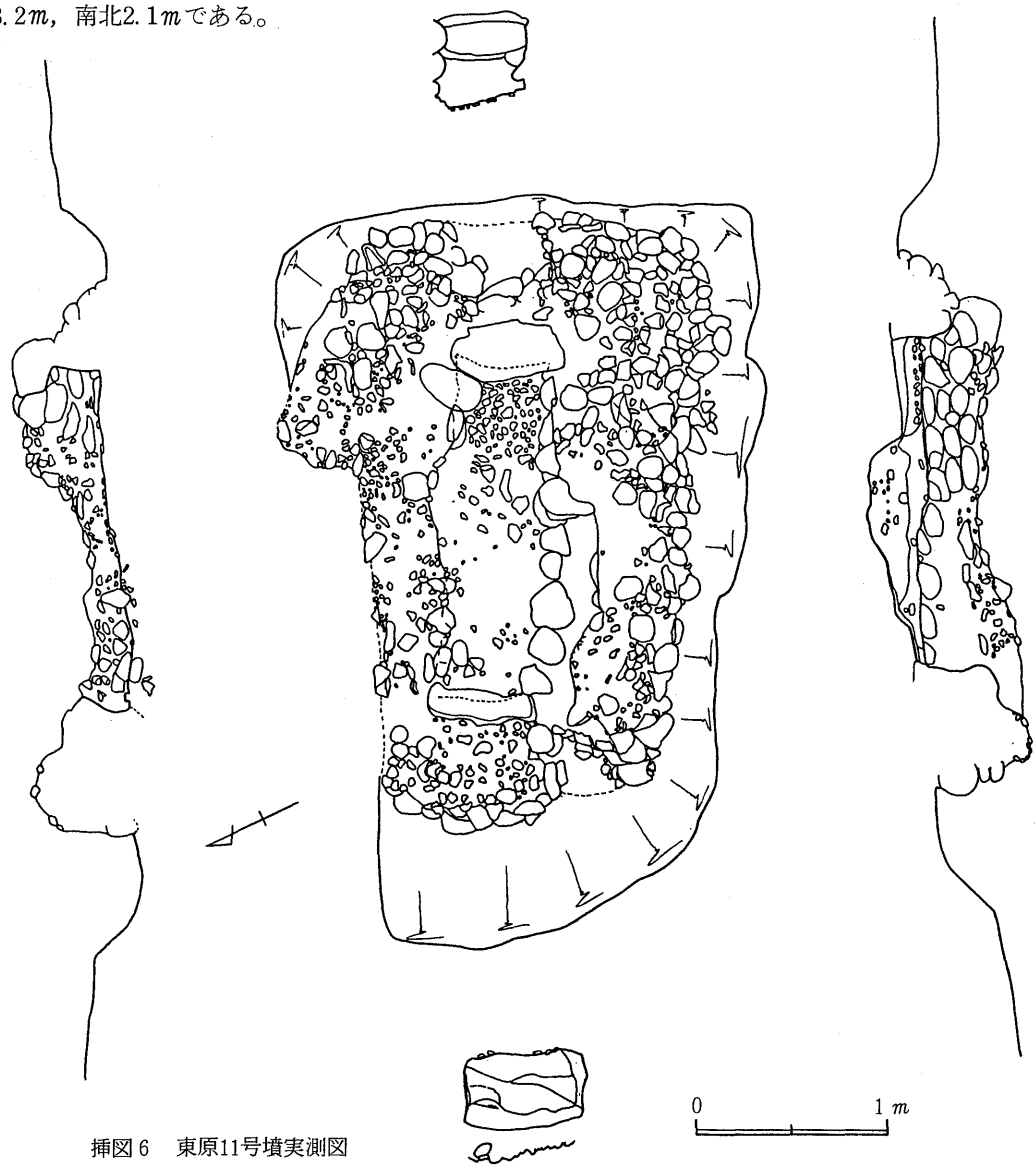
東原11号墳

D区北端に位置する小円墳。墳丘盛土はほとんど削平されていたが，主体部の石組と周堀が保存されていた。耕作により上部は削り取られているので古墳構築当時の地表面ははっきりしないが，

現状で耕作土層直下のほとんど浮石を含まない黒色土層をローム層まで約35cm～40cm掘り込んで「掘り方」としている。規模は東西3.9m，南北2.5m。主体部は周堀円周のほぼ中心にあり，主軸をN—117°—Eにとる。各部の寸法は上記のとおり。

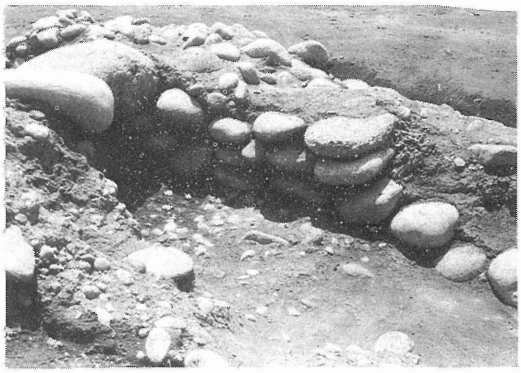
北長壁	南長壁	東短壁	西短壁	深　さ
175cm	170cm	45cm	40cm？	27cm(残)

石室は南北長壁を扁平な河原石を現状で3段に横積みにして構築しており，東短壁（縦36cm×横45cm×厚さ13cm）と西短壁（縦48cm×横63cm×厚さ20cm）は共に1石でひら面を用いて構築されている。床面は掘り込んだ地山面に粘土を厚さ6cm～7cmに敷きつめ，その上に小さいもので直径2cm～3cm，大きいもので直径5cm～7cm位の河原石を転石として厚さ10cm程に敷きつめている。裏込めは根石裏側に小石，砂利等を詰め，更に白色粘土で根石から15cm～20cmの範囲を補強している。そして外側をやや大振りの河原石で押えつけている。この主体部裏込めの石組の範囲は東西3.2m，南北2.1mである。



挿図6　東原11号墳実測図

東原11号墳　主体部全景

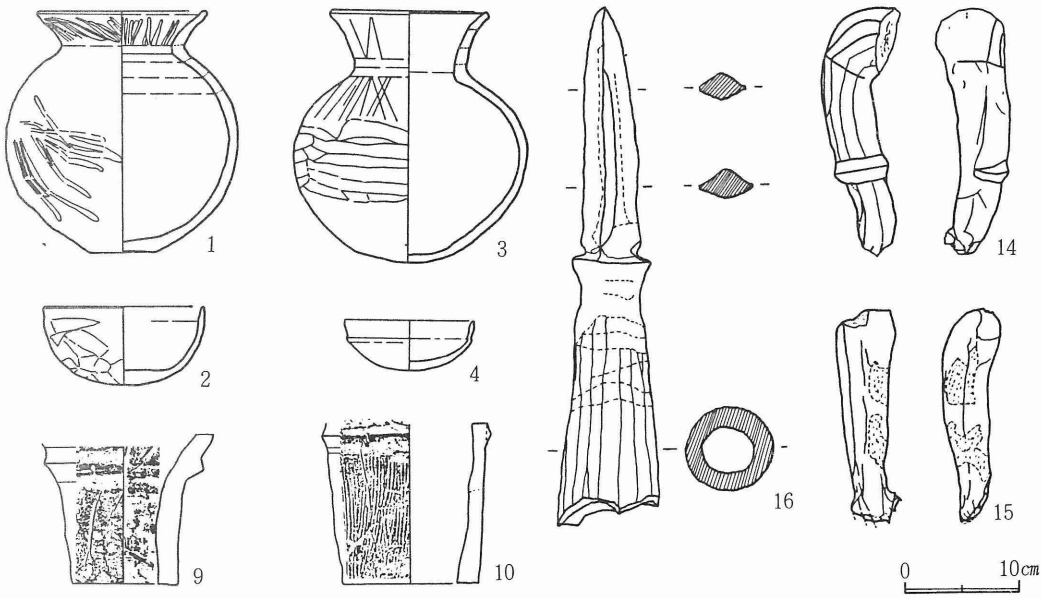


東原11号墳　主体部側壁

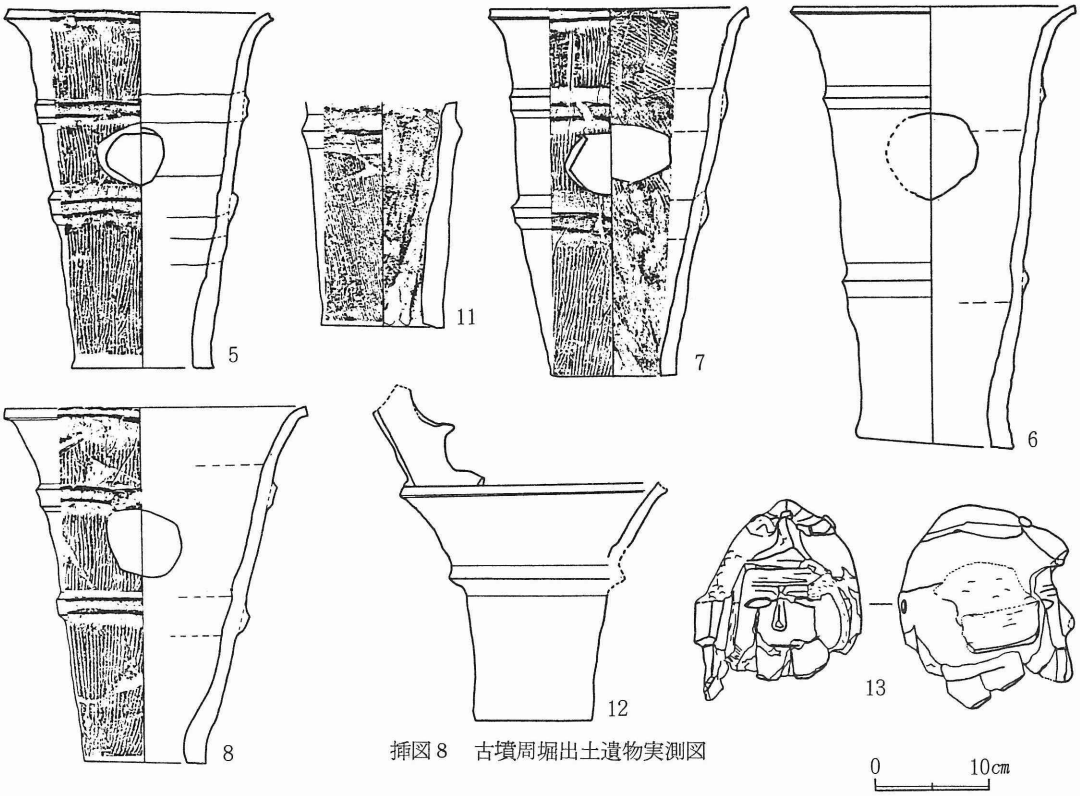
東原11号墳　遺構全景

東原11号墳　主体部側壁裏込め状態

図版３　遺　　構　　写　　真



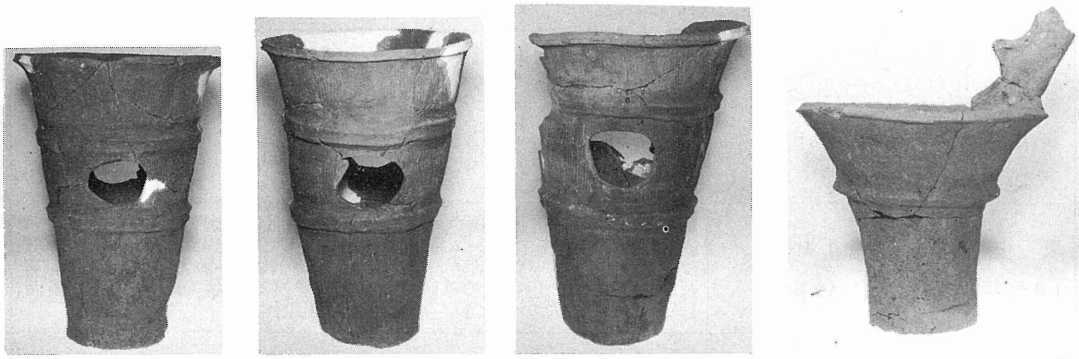
挿図７　古墳周堀出土遺物実測図



挿図８　古墳周堀出土遺物実測図

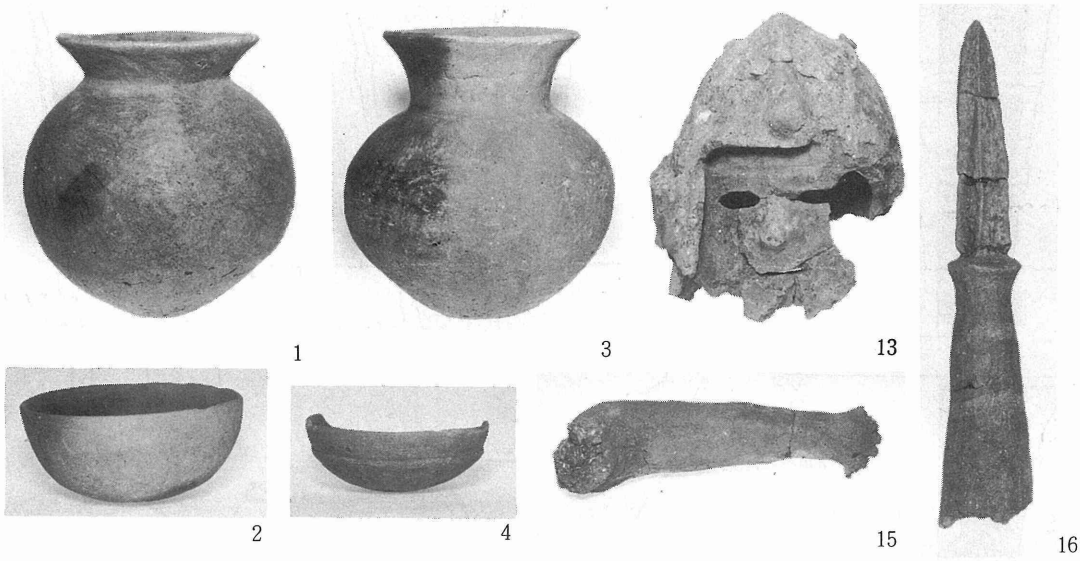
古墳周堀出土遺物一覧表（土器）

番号	器　種	法量（cm）	技　法　等	胎　土	備　考
1	土師器 壺	口径　14.6 底径　5.3 器高　21.0	口縁部放射状研磨，頸部ナデ後研磨，胴部上半ヘラ研磨，下半ヘラ削り後，粗い研磨，底部ヘラ削り，内面研磨	若干の砂粒含有	色調茶褐色，部分的に赤味帯びる。焼成良好，完形 東原８号墳周堀出土土
2	土師器 埦	口径　13.8 器高　6.9	口縁部横ナデ，体・底部ヘラ削り内面ナデ	小石・砂粒含有	色調茶褐色，焼成良好，完形 東原８号墳周堀出土
3	土師器 壺	口径　13.4 器高　22.1	口縁部横ナデ後放射状研磨，胴部上半研磨，中央部ヘラ削り後研磨，下半粗い研磨	小石，雲母砂粒含有	色調赤茶褐色，焼成良好 完形，東原９号墳周堀出土
4	土師器 坏	口径　11.4 器高　4.4	口縁部丁寧な横ナデ，底部不定方向ヘラ削り，内面ナデ	堅緻	色調赤褐色，焼成良好，完形 全体に丁寧な作り 荒砥村第341号墳周堀出土



5　7　8　12

図版４　古墳周堀出土遺物



図版５　古墳周堀出土遺物

古　　墳　　一　　覧　　表

古墳番号	規模 径(m)	規模 周堀幅(m)	
荒砥村第341号	約３１（推定）	５～６（1.9～2.7）	周堀東側半周を確認。周堀は南側にN—43°—Wの方向で推定幅５m程の渡りがあり玦状をしている。断面は平らな鍋底状を呈し，深さ約70～80cm。墳丘盛土は南北地層断面にわずかに残っており，二ツ岳系軽石純層直上に盛土がなされている事が判る。主体部については調査対象区域西側にある，石宮所在地の地層断面にやはり二ツ岳系軽石純層が認められ，その直上に大量の河原石と大振りの石（45cm×25cm）を含む層があることから，ここが本古墳の主体部と思われる。葺石はなかったが周堀から多量の埴輪が出土。（挿図７—９，16等８—５，13等）
荒砥村第342号	約２１（推定）	2.5～3.5（0.7～0.9）	周堀のうち東側から南側へかけての約⅓周程を確認。周堀は逆台形を呈し，底部付近の壁は直に掘り込まれ，底部は平らで，薬研堀り状になっている。深さは遺構確認面より約75～80cm。墳丘はローム面まで削平されているため詳細不明。主体部についても調査した範囲では確認できなかった。葺石はなかったが，埴輪が少量出土。
東原８号墳	23.5？	上幅1.5～2（下幅0.9～1.1）	周堀のうち南側と北東側の一部を確認。周堀は遺構確認面より深さ約25cm。墳丘はローム面まで削平されているため，また主体部については古墳中央部分が調査対象区域外になるため詳細不明。葺石，埴輪は確認されなかったが，渡り立ち上り付近から遺物出土。（挿図７—１，２）
東原９号墳	27.8	3（0.6～1）	周堀のうち北側と南東側の一部を確認。周堀は鍋底状を呈し，深さ約85～90cm。墳丘はローム面まで削平されていて詳細不明。主体部については北側周堀から南へ５m程の所に長方形の掘り込み（2.1m×1.5m深さ1.5m）が確認されているが，出土遺物はなく東壁下端に数個の石列を認めるのみで，本古墳との直接的な関連を示す積極的資料は得られなかった。葺石，埴輪は認められなかったが，北側周堀底近くから遺物出土。（挿図７—３）
東原１０号墳	約２２（推定）	1.4～3.7（0.5～1）	周堀東側半周を確認。周堀は南側で細くなり断面は鍋底状を呈し，深さ約60～80cm。墳丘はローム面まで削平されているため詳細不明。主体部は墳丘中央よりやや南寄りに在り，石室床面に敷かれたと思われる転石及びその下の白色粘土のみ確認。石室の規模は現状で南北2.5m，東西1.2m。葺石はなかったが，周堀から埴輪出土。
東原１１号墳	10.5	0.6～1（0.3～0.4）	本　文　参　照

5. その他の遺構

(1) 女 堀

A区は，土地改良事業の道路施工部分にあたり，富田地区に残る女堀遺構の東，およそ100mの地点にあたる水田の中にある。現地形では，西方の女堀遺構の北岸と連続しているように見える水田との比高1m程の段差を持ち東西にのびる馬入れの際から，それに直交するように，南北に，幅1.5m長さ43mのトレンチを入れ，東側の断面を観察することを中心とした調査を行った。深さは湧水が何か所もありトレンチ内の排水を行ないながら部分的に深く掘ったが遺構が完全に断面に出る程は掘れずボーリング調査で補った。なおこのトレンチにほぼ平行して150m東方に荒砥川が流れ，対岸南東方向に女堀遺構を見ることができる。

最初の予想に反し馬入れからの落ち込みはなく，トレンチ北端から14.2m，地表からの深さ65cm（標高94.5m）の地点（以上A点とする。）でほぼ30度の傾斜で南へ向く落ち込みが始まるまでは，不連続な部分や畦状遺構と見られる部分もあるが，大局的には平行に近い堆積である。特にトレンチ北端から2.5m地点までは，現在の水路まで自然堆積と見られる地層である。A点より2m南の深さ2mで落ち込みの底部と考えられる河原石の層に当たる。A点からさらに南へ24m，深さ2mの地点から，ほぼ40度の傾斜で立ち上がり，A点から25.3m，深さ65cm，標高94.5mの点（以下B点とする）で再び水平な地層となる。落ち込みの始まる（B点）層は，それより下の土が攪乱されブロック状になっていて掘削の際の排土と考えられる。その下一層おいて浅間B軽の純層が見られる。AB間の底の部分は，20cm×20cm×5cm前後の大きさの河原石でありA点から13.8m地点までは，A・B点（掘込みの上部）より1.5m前後の深さであるが，その地点から急に落ち込み，2m程の深さで4.5m進み，再びゆるい傾斜で浅くなった後，部分的に，ピット状に深さ2.4mの部分もあり凸凹をくり返しながら南側立ち上がり地点に続く。AB間の様相を見ると，掘削後，堀の深さが1m前後になるまで全面に水性の堆積があり，その後この堀が完全に埋まるまでの間，自然か人工かは不明であるが小さな水性の舟底状の堆積が3か所認められた。A点から5.6m，深さ1.1m地点で始まり上部幅3.7m，深さ0.7mの1か所，A点から12.3m，深さ1.2m地点で始まり，上部幅2.8m，深さ0.7mの1か所，およびB点から北に落ち込む斜面をAB間の堀と共有し，上部幅4.7m，深さ1.3mの1か所で，後者は前二者に比べ高い位置から深い掘込みを持つ。

(2) ピット

縄文時代のピット2基，それ以降の時代のピット12基を検出。JPNo.1は東原10号墳墳丘北側に在り，掘り方（JP）は凸凹で出土遺物もなかった。JPNo.2は荒砥村第342号墳墳丘北側の周堀立ち上がり付近に在り，掘り方はきちっとしており床面も平坦で平面プランはひょうたん型をしている。長軸2.65m，短軸1.4m，深さ1m。出土遺物はなかった。ピットの形態は長方形，方形，円形に分かれるが，出土遺物もなく，用途，時期等の詳細は不明。

(3) 井戸跡

C区の東原8号墳渡り東側50cmの所に1基検出された。平面形は円形で，円筒状を呈している。直径は遺構検出面で1m，1.5m下の所で90cmである。深さは1.8mの所で調査を断念しているため不明であるが，更に1m以上は掘れるものと思われる。埋土はロームブロック，白色粘土ブロック

が相当混じる黒色土で，一時に埋め戻された感がある。ローム層を掘り抜いた壁面はしっかりしていた。出土遺物はなかった。

(4) 溝状遺構

C区に2条，D区に2条，E区に3条，計7条の溝状遺構を検出したが，部分発掘のため遺構の全容をとらえることはできなかった。No.1，No.2は13m程離れて南北に平行して流れており，断面は共に逆台形を呈し，しっかりした掘り方をしていた。共に東原9号墳周堀埋土を切り込んでいる。No.5は上半部が耕作による攪乱を受けているが，中央部に川原砂の堆積があり，淵の部分は非常に細かい白灰色のシルト状の砂で，これが鉄分の茶色で鮮かに識別でき，水が流れていたことを示していた。いずれの溝からも出土遺物はなかった。

(5) 道　跡

E区荒砥村第341号墳渡り東側7mあたりから確認され，ほぼ南へ真直ぐ伸びる幅1～1.5m程の固くしまった床面を持つ道跡と推定される遺構。溝No.5の埋土も踏み固められていた。

6. ま と め

昭和56年度の調査では以下のことが確かめられた。

○荒砥村第341号，342号古墳を確認，調査しえた。特に第341号古墳は多数の埴輪を出土したとともに，わずかに残っていた墳丘盛土からこの古墳の築造時期が二ツ岳系軽石降下後，さほど時を経ていない時期であることが判明した。また，周堀より出土した坏からも6世紀後半から7世紀前半にかけてのものと思われる。

○東原8号，9号墳は周堀よりそれぞれ出土した土器により，9号墳がやや後出するものの共に古墳時代後期鬼高Ⅰの時期に比定され，荒砥村第341号，342号古墳に先行する6世紀前半の築造と思われる。

○東原11号墳は主体部が保存されており，昭和54年度調査された東原2号墳（11号墳より東方へ約80mの位置にある）と同規模（径約11m）で同じ様に河原石を小口積にした竪穴式石室であった。

○竪穴住居跡は古墳時代後半（1軒）から奈良（3軒），平安時代（2軒）にかけての6軒が検出された。

○女堀遺構は富田地内と荒砥川左岸の遺構残存地区を結ぶ地点としての存在が明らかになった。掘削時期は浅間B軽石降下後しばらくの時をおいていること，底部は荒砥川の流れにより堆積した河原石の層の上部をわずかに掘って造られていることが明らかになった。

○三年間の調査を概括すると，この富田の丘陵東側は古墳の密集地であり，しかも古墳が相互に切り合わずに接近していること，竪穴住居跡は縄文時代から平安時代まで検出され，中世遺構としては，古墓群，女堀遺構，近世では，正法院遺構が検出されて，富田の丘陵に住む人々の長い生活の跡を明らかにするうえでの貴重な資料を得ることができた。なお，今回をもって富田南部土地改良事業に伴う事前の発掘調査は終了した。

図版 6

C区　遺構全景

D区　遺構全景

E区　遺構全景

荒砥村第341号墳周堀遺物出土状態

東原 9 号墳周堀遺物出土状態

東原10号墳主体部（敷石部分）

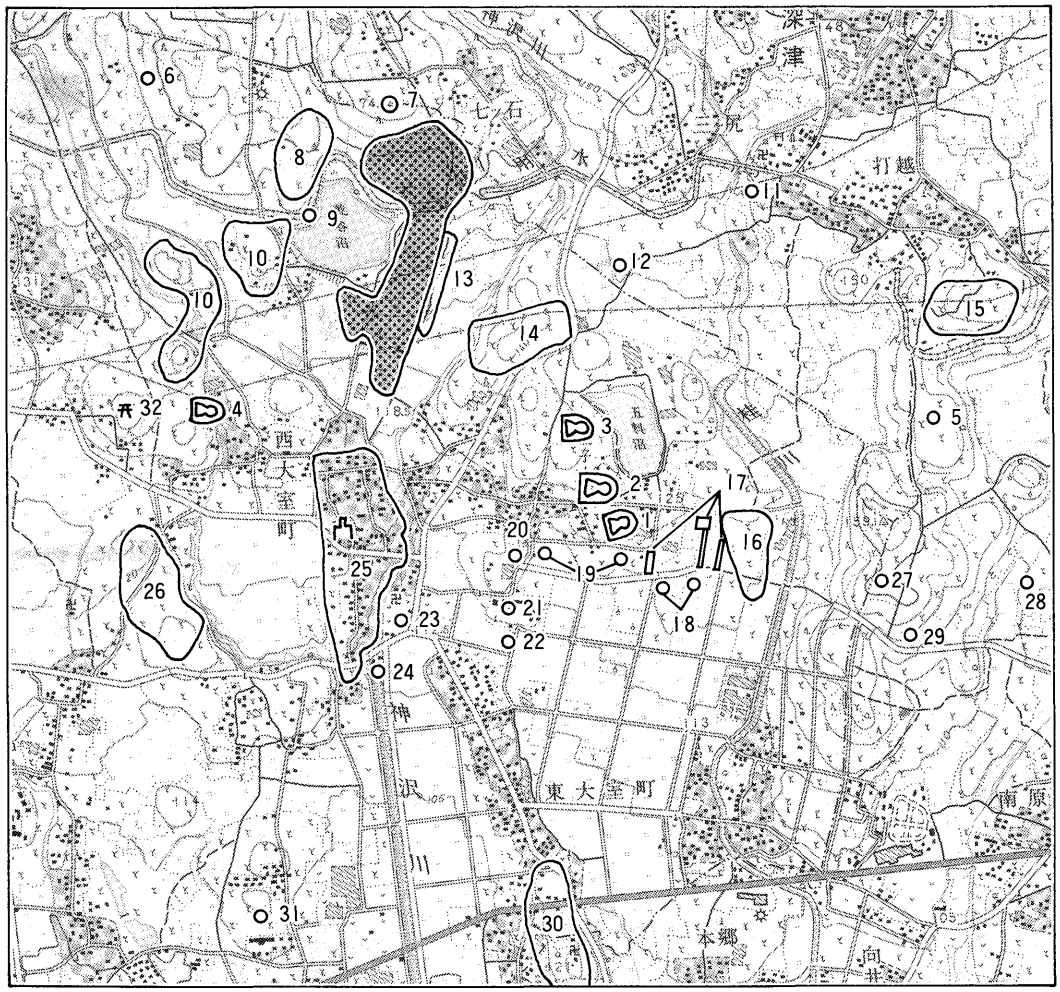
東原 9 号墳周堀遺物出土状態

西大室遺跡群

Ⅰ 概　　説

赤城南麓は，多くの河川によって開析された舌状台地が発達している。その一つである神沢川と東神沢川に狭まれた丘陵は，両川の合流点よりほぼ1.3㎞北の地点にある乾谷沼の谷によってさらに二つに分かれる。今回西大室遺跡群第4次調査は，乾谷沼北側のかなり傾斜の強い，標高145m～135mの南に向いた斜面と同沼東側の舌状台地のほぼ末端まで，標高160m～120mの広い地域，及び第2工区として，東神沢川とさらに東の桂川に狭まれた舌状台地東縁辺部の標高120m前後の地点である。

本遺跡付近の遺跡環境は，東神沢川を狭んで東の台地の一角にある国指定の前・中・後二子の3基の前方後円墳を初めとして，上毛古墳綜覧に大室分として178基記載されている古墳密集地であることを第一にあげなければならない。大室小学校々庭遺跡，大室小学校農場遺跡，大室石原遺跡では，古墳時代後期前半の土師器使用住居跡が主に調査検出されている。また3二子隣接地の上諏訪



挿図9　周辺の遺跡分布図（1：2500）

（挿図９の説明）

1　前二子古墳　2　中二子古墳　3　後二子古墳　4　伊勢山古墳　5　赤堀茶臼山古墳　6　熊ノ穴遺跡　7　巨石祭祀遺跡　8　第１次調査地　9　製鉄遺跡　10　大稲荷古墳群　11　丸山古墳　12　丸塚古墳　13　第２次調査地　14　第３次調査地　15　轟山古墳群　16　上川久保遺跡　17　昭和56年度調査（梅の木遺跡）　18　荒砥五反田遺跡　19　荒砥上諏訪遺跡　20　荒砥147号墳　21　大室小校庭遺跡　22　大室小校農場遺跡　23　大室石原遺跡　24　牛島古墳　25　大室城跡　26　阿久山古墳群　27　多田山火葬墓群　28　西原遺跡　29　中里古墳と骨壺群　30　下青竜古墳群　31　天神古墳　32　産泰神社

遺跡，荒砥五反田遺跡でも，同時期の住居跡，後者ではさらに古墳時代前期および平安期の住居跡も調査検出されている。

西大室遺跡群として第１次では，今次調査地西に隣接して５基の古墳が調査され，第２・３次調査では，今次調査東に隣接し古墳時代後期中葉の住居跡，および中・近世墓壙が検出され，３二子と同じ台地からは弥生式土器を伴う周溝墓，および６世紀前半から７世紀末にかけての古墳と埴輪棺が検出された。なお今次調査区には大室元城跡があり，その南方には大室城跡がある。

挿図10　調　査　区　位　置　図

Ⅱ　発掘調査の概要

調査区域約7.5*ha*は7地区に分かれ，調査順に従ってA・B・C・D・E・F・Gとした。A・B区は共に1基の古墳で，A区は調査区全体の最北，舌状台地のつけ根部にあたり，関東平野を一望することができる。調査は南側一か所のみのトレンチ調査で周堀の一部を検出した。B区はA区の南100*m*程にあり，墳丘が4分の1残り主体部も破壊された円墳で周堀を主とする調査であった。C区は，A・B区の西側で乾谷沼北側の平均約9度の傾きを持つ南向きの斜面で，弥生式土器を伴う竪穴住居跡13軒，住居跡を切って南北に通る溝1条，ピット2（1は住居と同じ時期の土器出土）が検出された。D区は，A・B区のさらに南の舌状台地のほぼ全面にわたりおよそ5*ha*の面積を持つ。地形は，中央よりやや南に鞍部があり，全体に南向きにゆるい傾斜ではあるが，一部北向きの斜面があり，2つの丘のようになっている。弥生式土器を伴う住居跡15軒は1軒を除き南側丘陵の東から南（一部G区にかかる）斜面のほぼ同じ高さから検出された。古墳時代の住居跡99軒はD区全体に分布するが東南部にやや少ない。奈良・平安時代の住居跡30軒は丘陵東斜面に集中して検出された。周溝墓は南側丘陵の頂上付近に3基，北東斜面に1基，中世墓壙4基は同丘陵南東斜面の比較的裾部に検出された。溝はD区中央部近くを南北に通る1条を主とし，それより丘陵東斜面にかけて縦横に17条検出された。E区は，D区の舌状台地の先端で現状では，周囲の水田より5*m*程高い丘陵で，大室元城跡と伝えられる地である。この丘を囲むような堀ないし落ち込みが断続して検出され，部分的にはさらに斜面部分に堀状のものが検出された。F区はD区の丘陵西斜面が乾谷沼の南側に大きく張り出した部分で，頂上部とやや北に傾斜した部分の他は，南西に向いた傾斜地であり，頂上付近に4基の周溝墓，周溝墓に近接して周辺に，古墳時代の住居跡7軒，奈良・平安時代の住居跡7軒が検出された。G区はD区に接続し，丘陵斜面を南にのびる道路施工部で，前出の弥生式土器を伴う住居跡3軒，古墳時代1軒，平安時代2軒の住居が検出された。なおG区の中央部からさらに南へD区の溝と同じような溝がかぎの手に検出された。

1.　遺構及び遺物

イ　遺構数　　古墳2基（1基は道路施工部分にかかる周堀の1部のみ）

竪穴住居跡　181軒

弥生式土器を伴う住居28軒，古墳後期108軒，奈良後期6軒，平安時代34軒，不明5軒

周溝墓8基，中世墓壙4基，城跡1，溝21条，ピット25個，炭焼き跡1か所

ロ　遺物量　　古墳にかかわるもの　埴輪片，パン箱1箱

竪穴住居跡にかかわるもの　土器・石製品・鉄滓・フイゴ・パン箱190箱

周溝墓にかかわるもの　土器（壺・小型甕・鉢・椀），滑石製勾玉，パン箱2箱

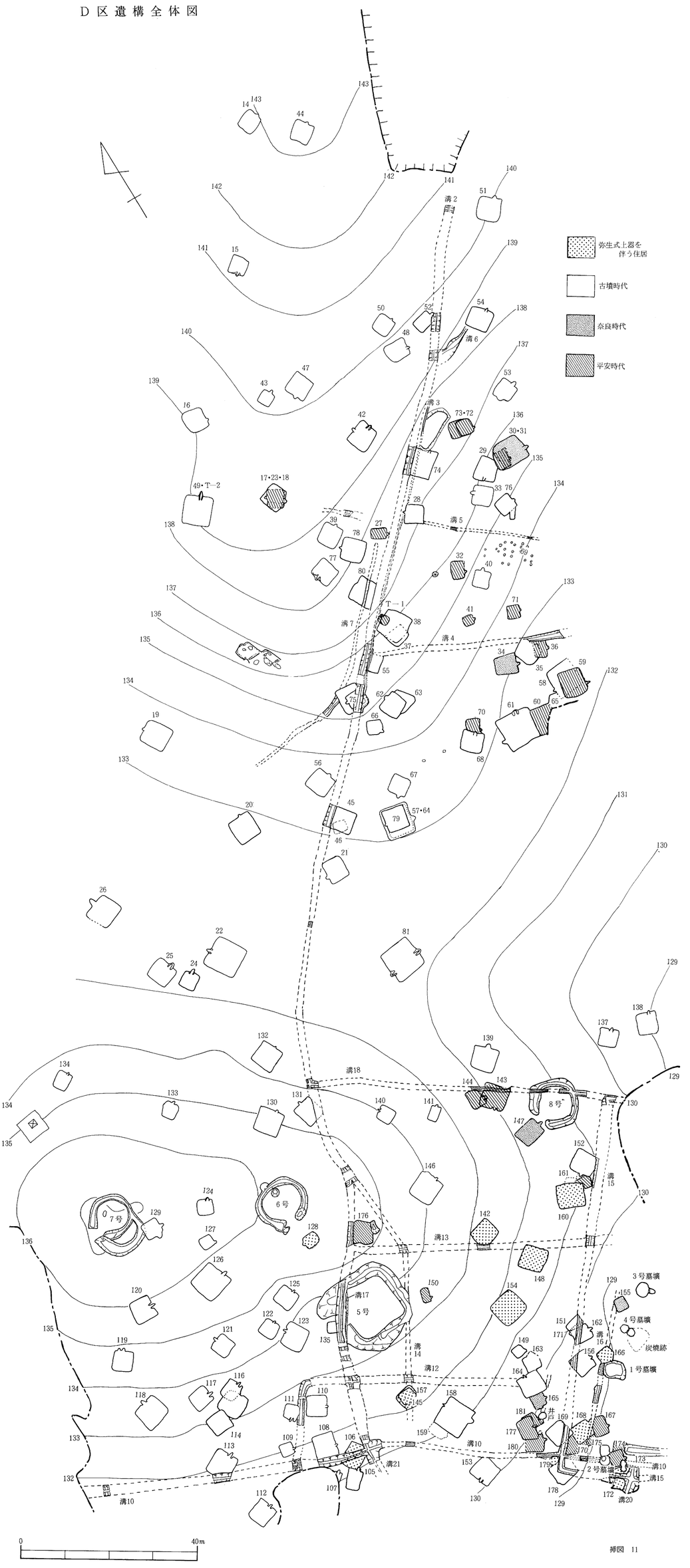
中世墓壙にかかわるもの　板碑断片1，五輪塔2基分，洪武通寶1枚，元豊通寶1枚

灰釉皿1枚，青磁破片

城跡にかかわるもの　内耳鍋断片，土師質皿13枚，洪武通寶1枚

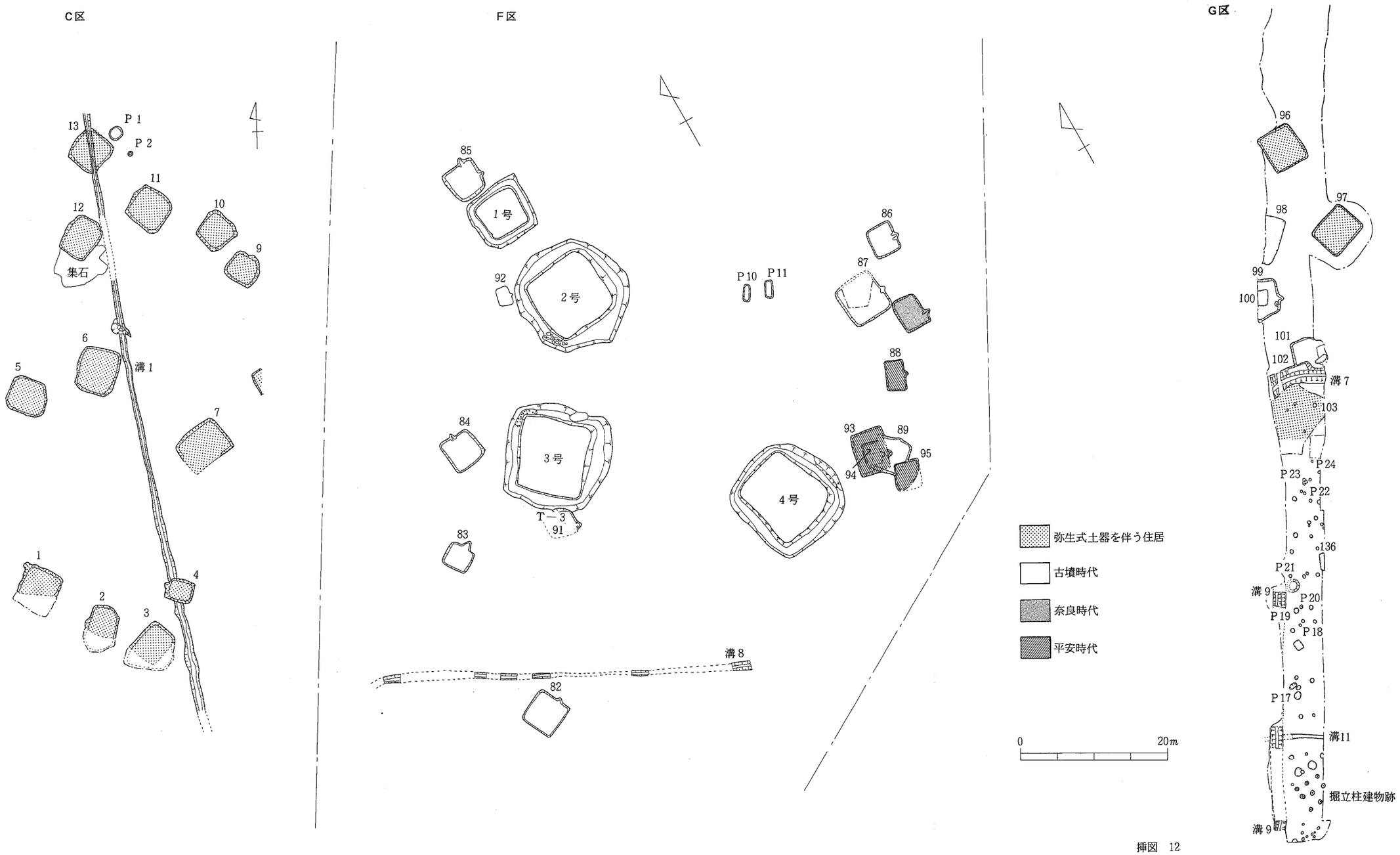
梅の木地区は，桂川右岸の舌状台地縁辺部に位置し，県道前橋今井線北側の南北道路施工部分と低い丘陵を削平する部分4か所にわたっている。西からA区・B区・C区・D区とし，AB間はお

D区遺構全体図



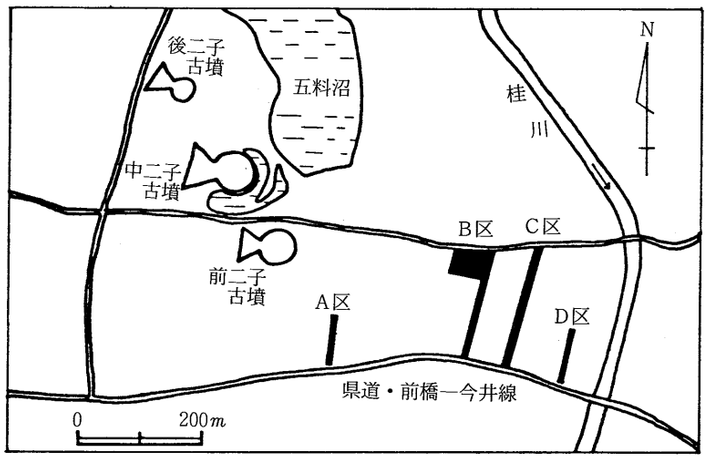
挿図 11

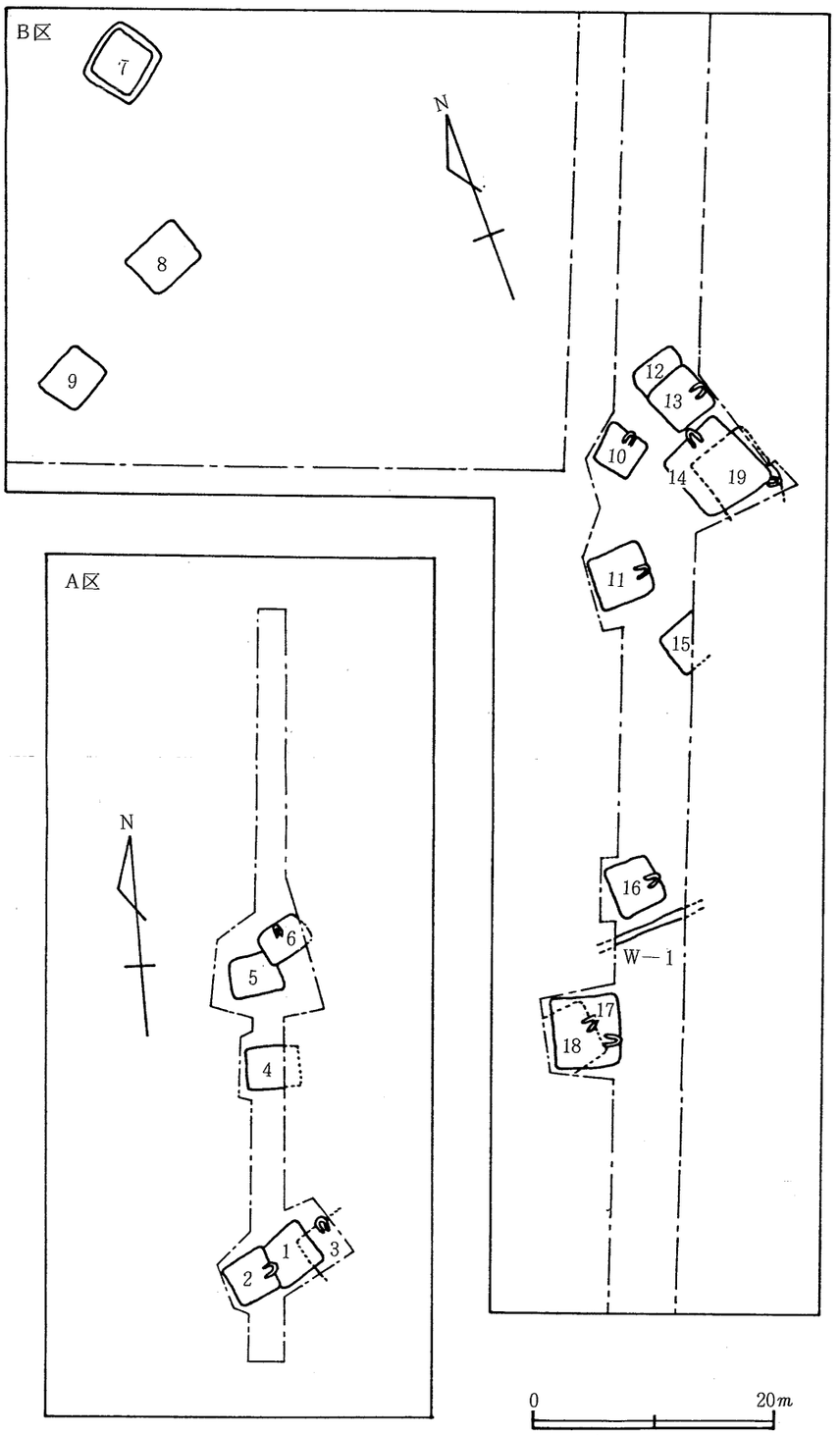
C・F・G区遺構全体図

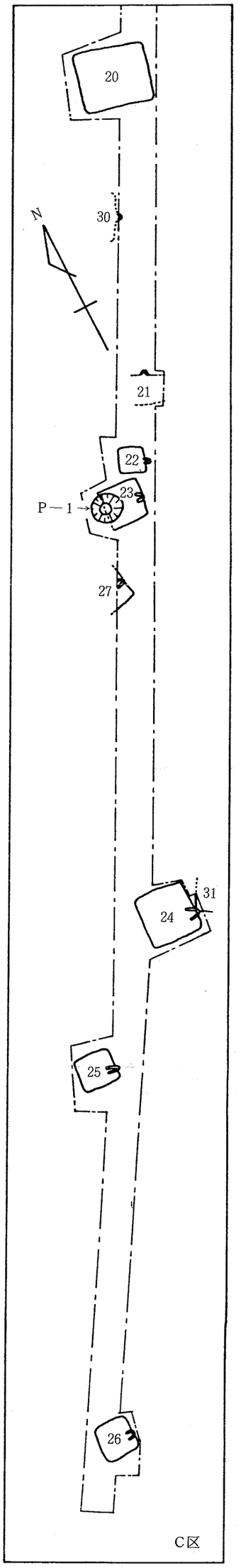


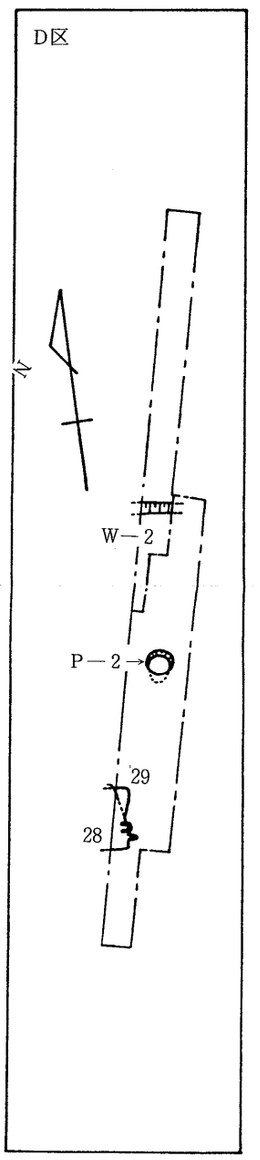
挿図　12

梅ノ木遺跡遺構位置図









挿図13

よそ230m，ＢＤ間は170mで標高は120m前後でほぼ平らである。Ａ区は古墳時代（以下同じ）中期の竪穴住居１軒，後期５軒，Ｂ区は，前期３軒，中期２軒，後期７軒，Ｃ区は前期１軒，後期５軒，平安時代の住居１軒，Ｄ区は平安時代２軒で全体で，時代の判明しないもの３軒である。

1. 遺構及び遺物

イ　遺構数　　竪穴住居跡　30軒（古墳時代前期４軒，中期２軒，後期18軒，平安時代３軒，不明３軒）

ピット２（平安時代井戸状ピット１，中世井戸状ピット）

ロ　遺物量　　竪穴住居にかかわるもの　土器，土製品，石製品，鉄製品等，パン箱41箱

中世ピットにかかわるもの　宗銭６枚

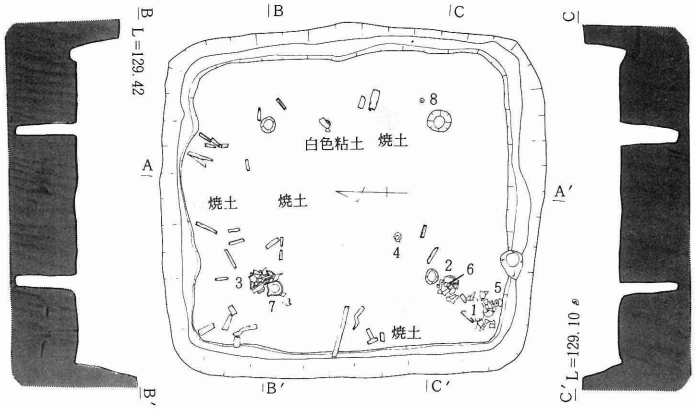
その他，縄文時代（表採）の土器片若干，石器２

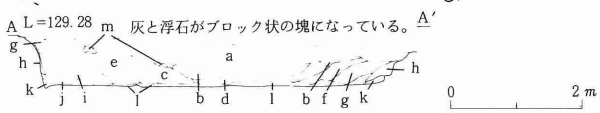
2. 発掘調査の経過

6. 15　発掘調査のための諸準備
17　機械搬入，Ａ区第64号墳周堀部分の抜根，排土開始，Ｂ区抜根開始
18　Ｂ区第62号墳周堀試掘区設定，排土開始，Ｃ区試掘区設定
25　Ｃ区１～３号住居排土開始
26　土地改良課，工事担当業者，文化財保護係による現場における協議
7. 11　Ａ・Ｂ区　全体実測開始
Ｂ区第62号墳周堀精査
13　Ｄ区試掘区設定
17　Ａ・Ｂ区全体写真，Ａ・Ｂ区完了
29　Ｃ区全体写真
8. 4　Ｆ区表土はぎ開始
5　Ｃ区完了　Ｅ区抜根開始
6　Ｅ区（大室元城跡）試掘区設定
12　大間々小学校児童教師見学
9. 8　Ｅ区周溝部分排土
24　梅の木地区，発掘区付近踏査，試掘
26　機械搬入，遺構確認作業（梅の木）
10. 2　Ｆ区　82～84号住居排土開始
5　梅の木Ａ区１，２号住居排土開始
10. 9　梅の木Ｂ区　７，８号住居排土開始
15　市政モニター見学　Ｇ区表土はぎ
梅の木Ａ区完了
21　二之宮小，大室小学校児童教師父兄見学
28　梅の木Ｃ区　20号住居排土開始
29　大胡小学校児童教師見学
Ｆ区86号住居写真，Ｆ区完了
11. 4　群馬大学教授　新井房夫氏　地質調査
7　荒子小学校児童，教師見学
11　梅の木Ｂ区完了
12　Ｅ・Ｇ区全体写真　Ｅ区完了
梅の木Ｄ区28号住居排土開始
21　梅の木Ｄ区完了
25　梅の木Ｃ区完了（梅の木地区終了）
26～27　雨天のため，遺物洗浄，復元，実測
12. 15　Ｄ区及びＧ区全体実測開始
25　Ｄ区及びＧ区遺構全体写真，Ｇ区完了
26　プレハブ撤去，Ｄ区１，４号墓壙実測写真
28　Ｄ区完了
1. 5　遺物洗浄，復元，及び残務整理等開始
9　遺物洗浄，残務整理等終了

3. 住 居 跡

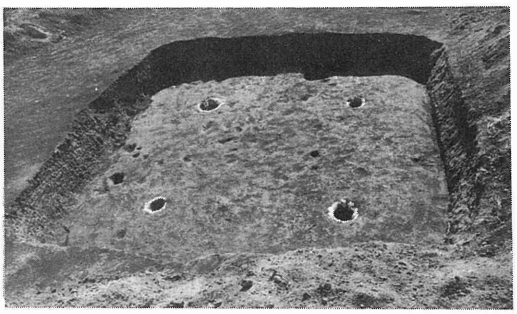
96号住居跡　　挿図14



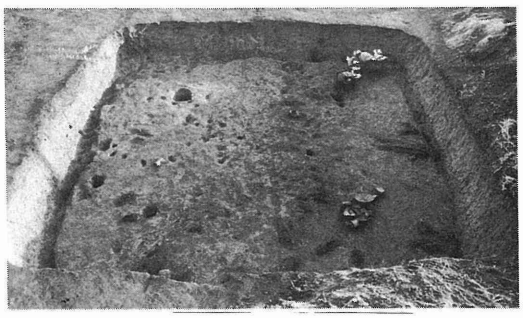


a．灰黒色土層（多量のＦＰ、少量の焼土炭化物、ローム粒含む）
b．灰黒色土層（ＦＰローム粒含む、ａ層に比べ灰褐色味が強い）
c．黒色土層（ＦＰ、ｃ、若干のロームブロック含む）
d．黒色土層（ＦＰ、ｃ、ローム粒、ロームブロック、炭化物含む）
e．黒色土層（ＦＰ、ｃ、少量のローム粒、ロームブロック含む、ｃ層に比べ褐色が強い）
f．黒褐色土層（ローム粒、ＦＰ、ｃ、炭化物含む）
g．暗褐色土層（ローム粒、ロームブロック、多量の炭化物含む）
h．褐色土層（ローム粒、ロームブロック含む）
i．暗褐色土層（ローム粒、ロームブロック、炭化物、焼土粒含む、褐色が強い）
j．黒色土層（（ローム粒、ロームブロック、炭化物含む）
k．暗褐色土層（黒色土混入、ローム粒含む）
l．黒色土とローム粒ロームブロックの混土層。
m．灰と浮石。

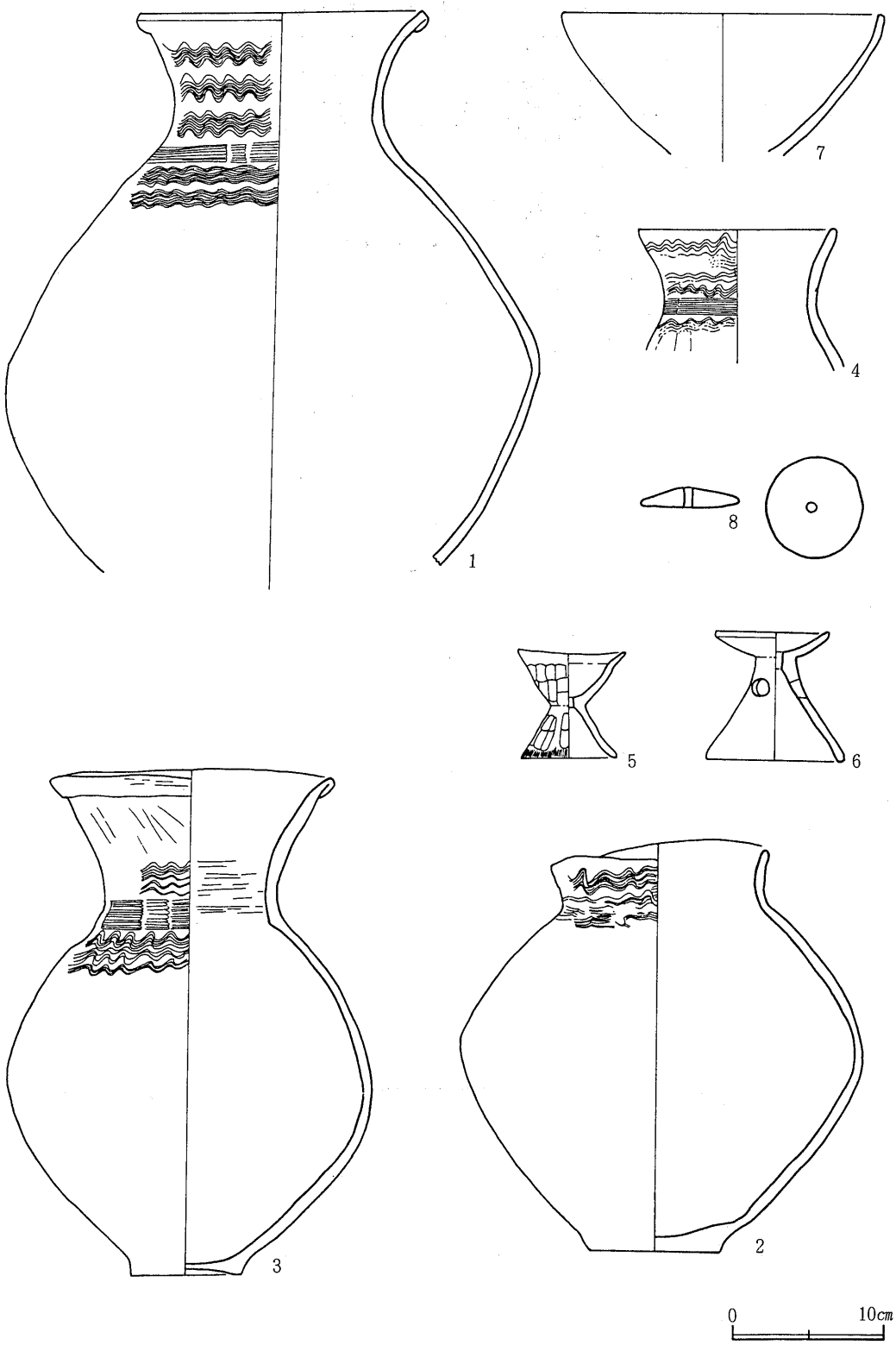
G区最北端に位置するが，地形的にはD区南丘陵の南側裾野部分にあたり，今回の調査区域外にも更に何軒かの同時期の住居の存在を推測できた。本遺構は火災住居跡であり炭化物の堆積が北壁と西壁寄りに多くみられた。壁，床ともしっかりしていて，幅約10～20cm，深さ約５～10cmの周溝が全周している。柱穴は４本，心心距離で2.55m×2.35mで南北にやや長く住居とほぼ相似形をえがいている。深さは85～90cm，下端直径15～20cmとよく揃っている。焼土の分布が南壁を除く３壁付近に認められたが，いづれも炉として認定するには至らなかった。東壁寄り柱穴中間に白色粘土が床面に堆積していたが，性格は不明。遺物は住居南西隅と北西隅の柱穴付近にまとまって検出され，床面着で土製紡錘車，小型器台が出土した。



図版７　96号住居跡遺構全景



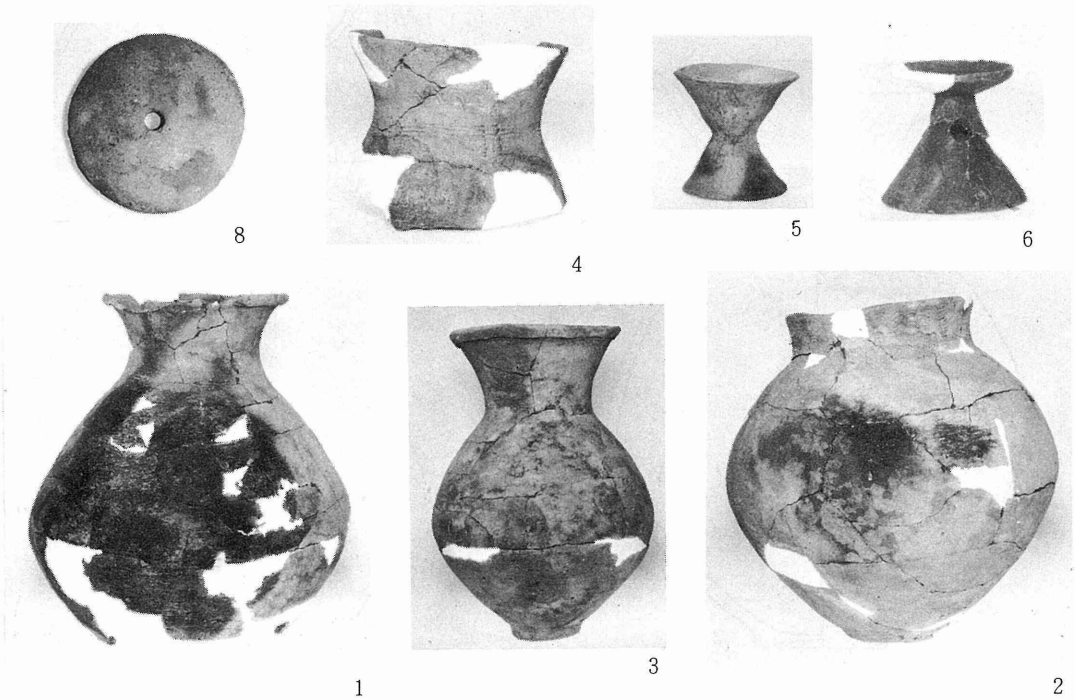
96号住居跡遺物出土状態



挿図15　96号住居跡出土遺物実測図

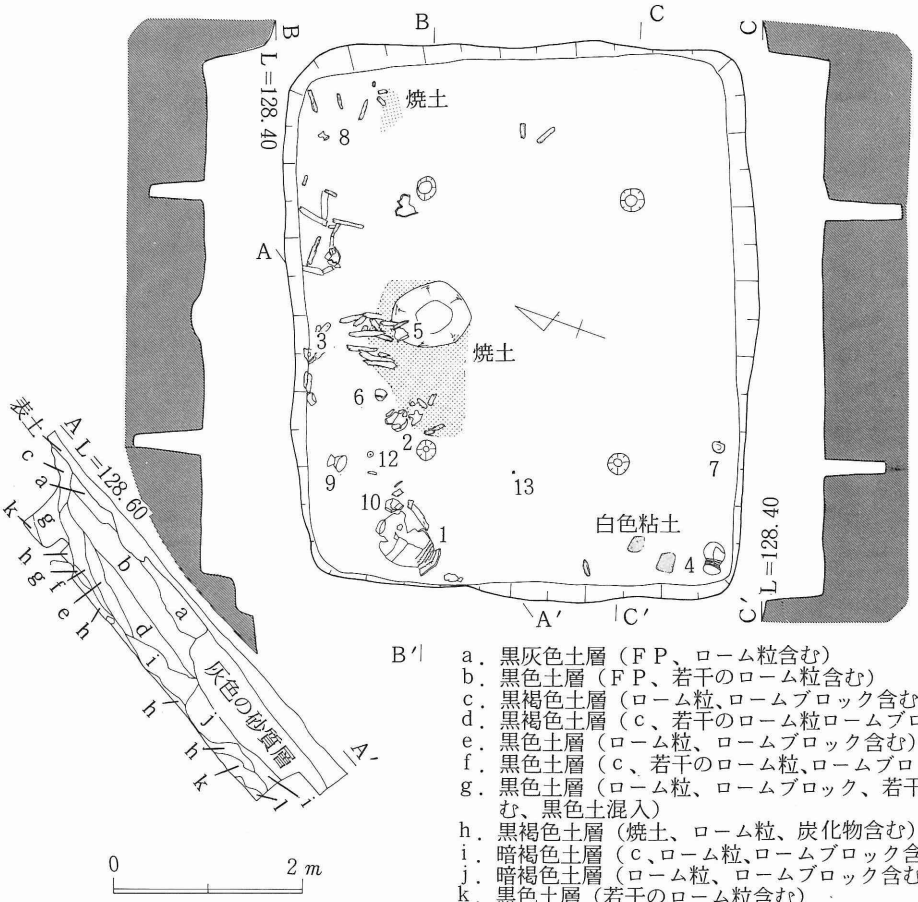
96号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量（cm）	技法等	胎土	備考
1	壺	口径 19.1	胴部上半にかけてうすいハケ目，後施文胴部下半ヘラ研磨，口唇部付近ヘラ研磨施文，櫛歯6～8本の波状文3段，2連止簾状文1段，波状文2段	多量の小石，砂粒石英含有	色調茶橙褐色，半分は黒色，焼成良好，80%残，内面の器面荒れる
2	壺	口径 14.1 底径 8.3 器高 25.9	口縁部ハケ目もしくは横ナデ後施文，頸部ハケ目の痕跡残る，胴部ヘラ研磨，内面ヘラ研磨，施文は口縁部から頸部にかけて波状文	砂粒，石英等含有	色調茶褐色，焼成良好90%残，内面の器面荒れる，全体に歪みあり
3	壺	口径 18.6 底径 7.3 器高 33.0	木口状工具による頸部及び胴部上半の削り（ハケ目），折り返し口縁部横ナデ，胴部ヘラ研磨，施文は頸部部分的に波状文，次に2連止簾状文，胴部上半波状文内面上半ヘラナデ（研磨），底部削り後粗い研磨	黒色微粒子，含有	色調淡茶褐色，底部付近黒ずむ，焼成良好，95%残，あげ底
4	甕	口径 12.4	口唇部横ナデ，口縁部～胴部上半ハケ目後施文，施文は口縁部6歯波状文，頸部2連止簾状文→波状文，内面ヘラナデ	多量の小石，砂粒含有	色調黒灰褐色，焼成やや不良，50%残
5	器台	口径 6.6 脚径 5.8 器高 6.9	受部木口状工具による削り後粗い研磨，内面ハケ目後上半分のみ横ナデ，脚部はやや丁寧なヘラ研磨，内部ハケ目後中央部除きヘラナデ	黒色微粒子，含有	色調橙褐色，黒斑有り焼成良好，完形，鼓形呈す，円窓なし
6	器台	口径 6.7 脚径 8.4 器高 8.4 円孔径 1.1	外面全体に丁寧なヘラ研磨，内面受部も丁寧なヘラ研磨，脚，裾部ハケ目後粗いヘラ研磨	若干の小石，砂粒含有	色調暗褐色，焼成良好ほぼ完形，全体に丁寧な作り，円窓は3個で等間隔
7	高坏？鉢	口径 20.5	外・内面ともに粗いヘラ研磨	小砂粒含有	色調赤褐色，黒斑有り外面の一部淡灰色
8	土製紡錘車	径6.5，孔径0.6，厚さ0.3～1.3cm，淡茶灰褐色呈す，全面丁寧なナデ 細かい砂粒含有，扁平な円錘形で孔は中央からややそれた位置に穿たれる			



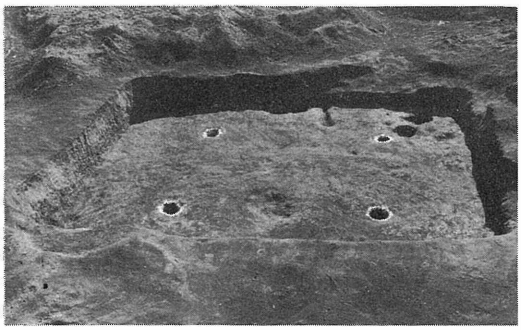
図版8　96号住居跡出土遺物

97号住居跡　　挿図16

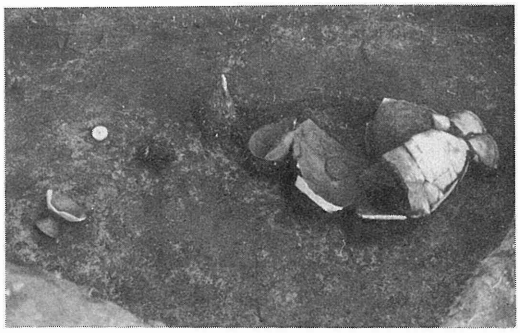


a．黒灰色土層（ＦＰ、ローム粒含む）
b．黒色土層（ＦＰ、若干のローム粒含む）
c．黒褐色土層（ローム粒、ロームブロック含む、黒色土混入）
d．黒褐色土層（ｃ、若干のローム粒ロームブロック含む）
e．黒色土層（ローム粒、ロームブロック含む）
f．黒色土層（ｃ、若干のローム粒、ロームブロック含む）
g．黒色土層（ローム粒、ロームブロック、若干の炭化物含む、黒色土混入）
h．黒褐色土層（焼土、ローム粒、炭化物含む）
i．暗褐色土層（ｃ、ローム粒、ロームブロック含む、黒色土混入）
j．暗褐色土層（ローム粒、ロームブロック含む、黒色土混入）
k．黒色土層（若干のローム粒含む）
l．暗黒色土層（ローム粒、ロームブロック含む）

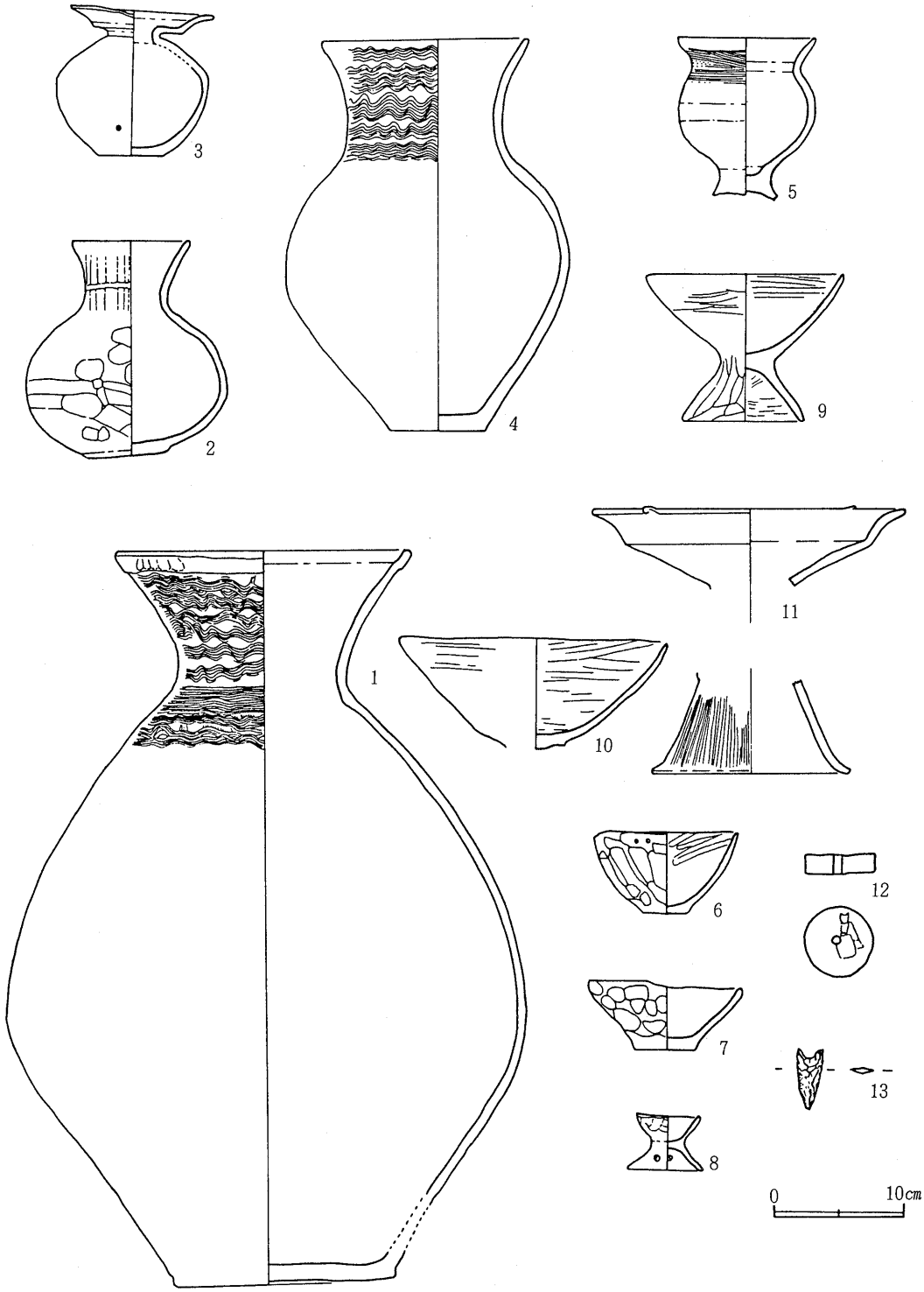
火災住居跡で住居北壁寄り⅓のあたりに多量の炭化物が検出された。遺物もほとんどがこの範囲から炭化物に覆われて出土した。壁，床ともしっかりしていて，柱穴は４本，心心距離で2.75m×2.05～2.15mの長方形を呈する。深さは56～82cm，下端直径10～15cmとほぼ整っている。炉（80cm×70cm×深さ10cm）は住居中央部北壁寄りの柱穴中間に在り，西側に焼土の散乱範囲が広がる。96号住居跡に比べてやや長方形のプランを持つが床面積はほぼ同じである。



図版９　97号住居跡遺構全景



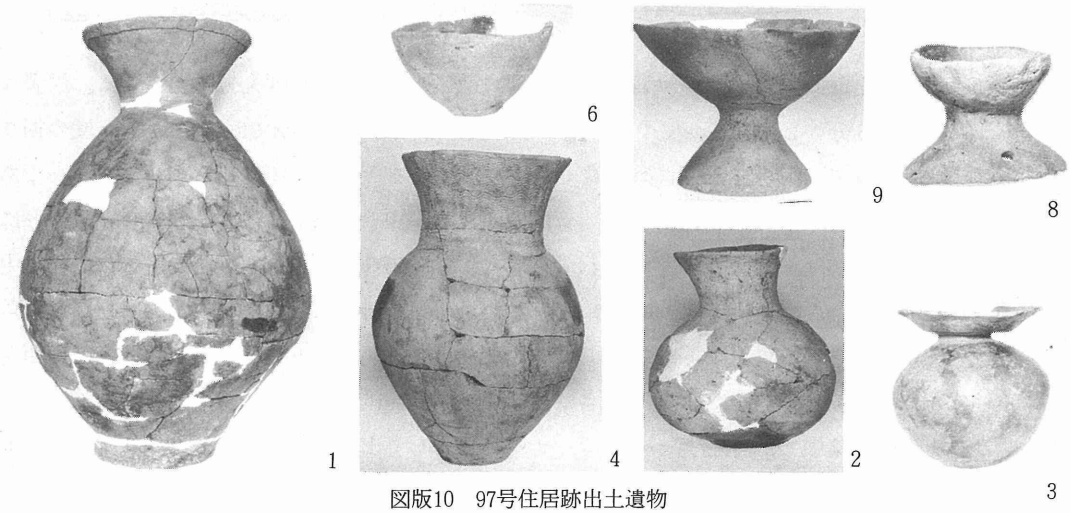
97号住居跡遺物出土状態



挿図17　97号住居跡出土遺物実測図

97号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量（cm）	技法等	胎土	備考
1	壺	口径 21.7 底径 16.4 器高 55.0	折り返し部貼付後指頭によるナデ，口縁部～頸部胴部上半ハケ目（木口状工具による調整）後施文，胴部中下半ハケ目後ヘラ研磨，底部ヘラ研磨，施文口縁部5～6本歯波状文6段，頸部6～7本直線文2段，5～7本波状文3段，内面ハケ目（木口状工具による整形）	黒色微粒子，砂粒含有	色調茶褐色，焼成良好70%残，内面が非常に荒れている，若干のあげ底，器肉は底部除き薄い
2	壺	口径 8.4 底径 6.1 器高 16.2	口縁部木口状工具による調整（ハケ目）後ヘラ研磨，胴底部ハケ目後ヘラ研磨，内面口唇付近横ナデ，他はハケ目部分的に残る	石英，砂粒含有	色調淡褐色，焼成良好，完形，胴部扁平の球状呈す，全体に若干の歪み有り
3	土師器壺	口径 10.2 底径 4.8 器高 10.4	外面全体に丁寧なヘラ研磨，光沢あり，内面は口縁部付近横ナデ，他の内面は研磨	若干の小粒子，石英含有	暗褐色，焼成良好，完形，水平近く開く複口縁，胴部下位に0.4cmの孔1つ穿たれる
4	甕	口径 15.0 底径 7.2 器高 29.4	口唇部横ナデ，頸部～胴部木口状工具による調整後口縁部施文，胴部ヘラ研磨，施文6～7本櫛歯波状文5段，内面ヘラナデ	石英，砂粒含有	淡褐色，焼成良好，完形，全体に若干の歪み有り
5	脚付甕	口径 10.1	口唇部付近横ナデ，頸部施文，胴部全体ヘラ研磨，施文10～11本櫛歯直線文	小砂粒含有，緻密	暗褐色，内面黒茶褐色焼成良好，70%残
6	小型鉢	口径 10.8 底径 3.2 器高 6.1	内外面とも丁寧なヘラ研磨，底部やや雑なヘラ削り	緻密	褐色，焼成良好，完形，口唇部に径0.2cmの孔2つ穿たれる
7	埦	口径 11.2 底径 4.4 器高 5.0	口唇部横ナデ，体部，底部木口状工具による調整（ハケ目）後，粗いナデ，内面ナデ	砂粒含有	淡褐色，一部黒斑あり，焼成良好，完形，全体に歪み有り
8	小型器台	口径 4.6 脚径 5.5 器高 5.0	外面全体に木口状工具による調整（ハケ目）後ヘラナデ，受部内面ナデ	砂粒含有	暗褐色，焼成良好，完形，円窓脚部に4つ（径0.4cm）
9	高坏	口径 15.0 脚径 9.2 器高 11.1	坏部内外面ともヘラ研磨，脚部外面木口状工具による削り，内面木口状工具による調整	粒子の大きい石英小石等含有	赤褐色，焼成良好，完形，坏部内面底部付近荒れている
10	高坏	口径 20.2	内，外面ともヘラ研磨，特に内面は丁寧なヘラ研磨	石英雲母含有	赤褐色，焼成良好，坏部としては完形
11	高坏	口径 23.6 脚径 15.0	坏部内外面とも丁寧なヘラ研磨後朱塗り（赤彩）脚部外面丁寧なヘラ研磨後赤彩，内面ハケ目残る	粒子の大きい石英等含有	赤彩，内面明赤褐色，中央部欠損，口縁部に推定4つの突出部有り（間隔20cmと18cm）
12	紡錘車	径5.2，厚1.4～1.5，孔径0.7，赤茶褐色，全面に丁寧なナデ，若干の砂粒含有，土製			
13	石鏃	4.55cm×1.8cm，材質ケツ岩，打製			



図版10　97号住居跡出土遺物

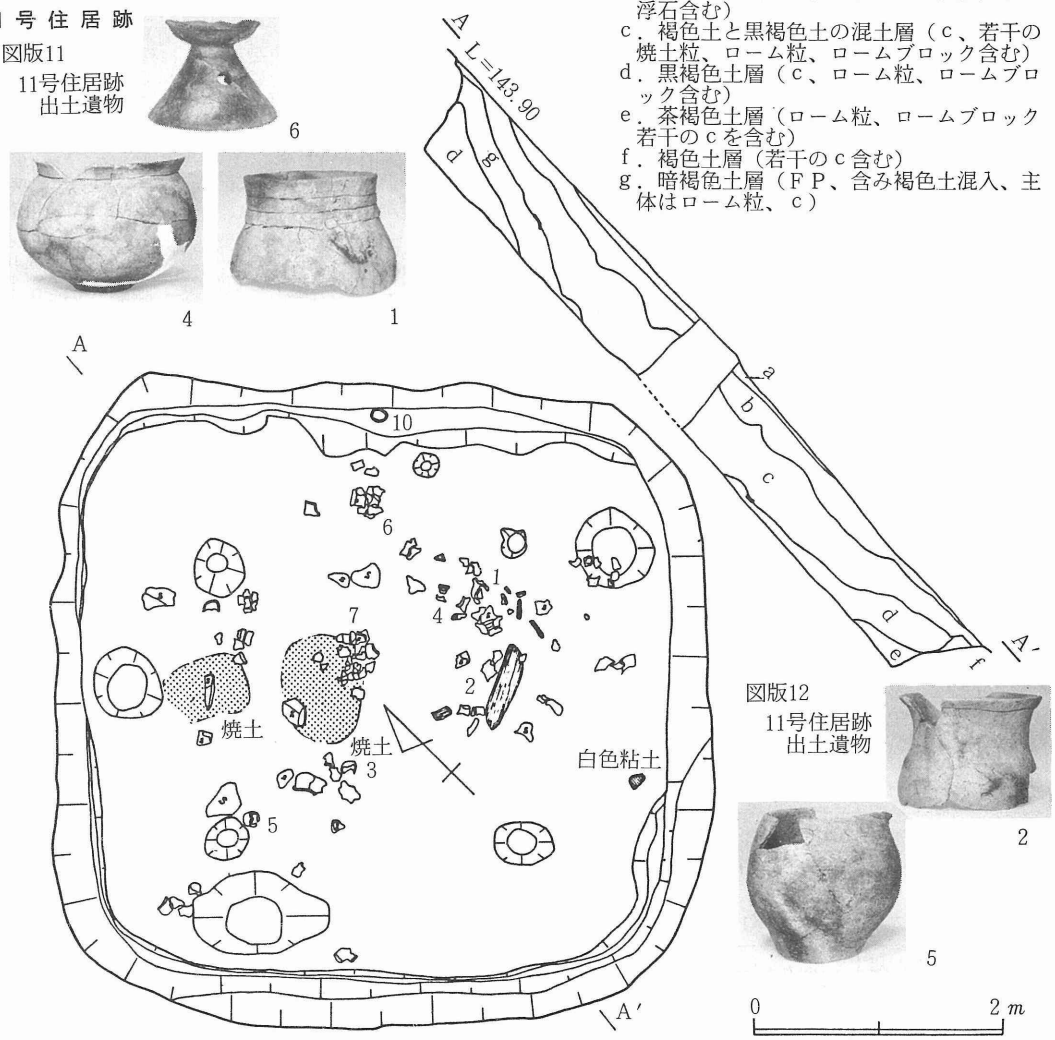
挿図18

a．黒色土層（B主体、若干のＦＰ、ｃ含む）
b．黒色土層（ＦＰ、ｃ、ローム粒、多量の浮石含む）
c．褐色土と黒褐色土の混土層（ｃ、若干の焼土粒、ローム粒、ロームブロック含む）
d．黒褐色土層（ｃ、ローム粒、ロームブロック含む）
e．茶褐色土層（ローム粒、ロームブロック若干のｃを含む）
f．褐色土層（若干のｃ含む）
g．暗褐色土層（ＦＰ、含み褐色土混入、主体はローム粒、ｃ）

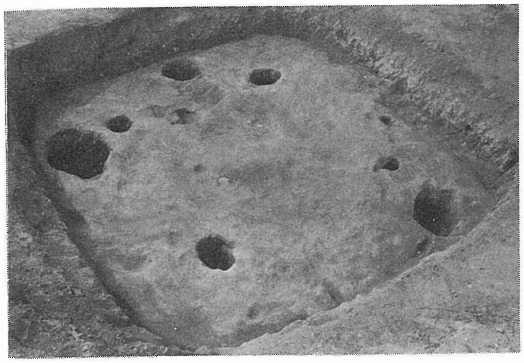
11号住居跡

図版11
11号住居跡
出土遺物

図版12
11号住居跡
出土遺物

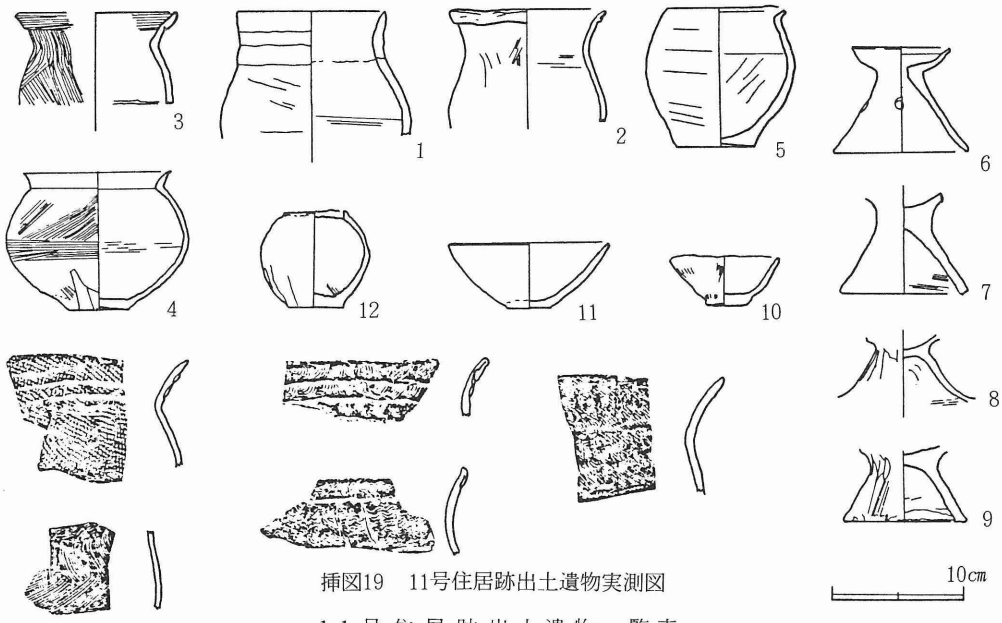


本遺跡はC区頂上部に位置し，対角線が南北方向に近い向きで整った隅丸方形を呈する。周溝は東すみから南東壁３分の２間と北西壁中央部がわずか欠けて深さ６～７㎝で回っている。壁の掘り込みは深く60～70㎝で，床上40㎝までは特にしっかりしている。床面も固くしっかりして平らである。柱穴は深さ60～80㎝，心心距離2.2～2.4ｍ，床面での径10～25㎝で，住居の形に合わせ方形に４個認められた。炉跡は，北と西の柱穴間わずか北寄りに径45～65㎝の範囲と同位置でやや住居中心部寄りに径65～85㎝の範囲に床面の焼けが検出されたが，前者には長さ30㎝幅７㎝で断面が三角形の焼けた安山岩があるので，これと認められる。ピットは，北西壁と炉跡の間，西柱穴と南西壁間，東柱穴と南東壁間の３か所にあり，深さは前２つが65㎝前後，後者は40㎝である。遺物は住居の中央から東寄りに集中し，炉付近から西コーナーに分布して出土した。なお遺物の集中した床面では炭化物も多く火災住居と想定できる。



図版13　　11号住居跡遺構全景

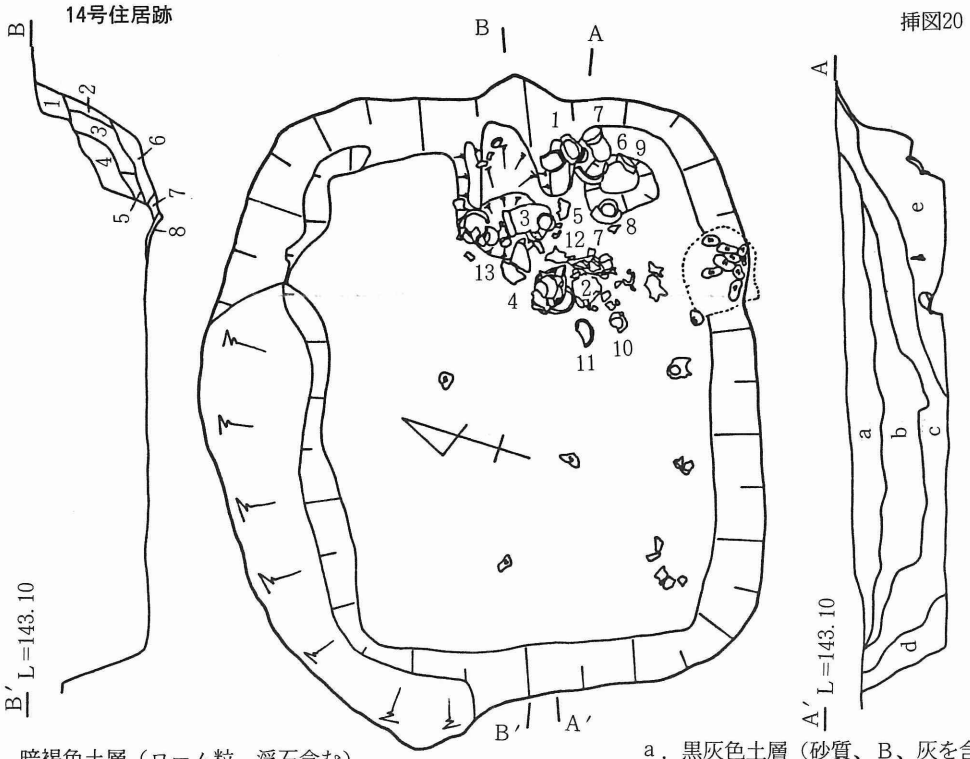
11号住居跡遺物出土状態



挿図19　11号住居跡出土遺物実測図

11号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量（cm）	技法等	胎土	備考
1	甕	口径　11.1	口縁部粘土紐マキアゲ部分横ナデ，胴部木口状工具による調整ナナメハケ目後ナデ，内面胴部ナナメハケ	黒色微粒子含有	色調白茶褐色，焼成良好，50%残，粘土紐のみで無文内部に輪積痕残る
2	甕	口径　11.5	口縁部横ナデ，折り返し部ヘラナデ，頸部～胴部上半ハケ目か，胴部上半は後ヘラナデ，内面ハケ目後ヘラナデ	石英等の微粒子含有	色調橙白褐色，焼成良好，50%残，折り返し口縁無文
3	甕	口径　11.9	折り返し口縁部，頸部，胴部上半ハケ目（櫛描直線文），部分的に体部ヘラ研磨，内面口唇部ハケ目	若干の石英含有，均質	色調外面黒褐色，内面白褐色，焼成良好，40%残
4	甕	口径　10.7 底径　4.4 器高　10.3	口縁部横ナデ，胴部上半浅いハケ目，下半ハケ目後ナデ，底部ヘラナデ，内面口唇付近横ナデ胴部中央ヘラハケ目	黒色微粒子含有	色調橙褐色，底部及び体部の一部黒斑，焼成普通，60%残，あげ底
5	片口	注口部径 8.9 口径　8.4 底径　6.0 器高　10.4	体部全面にヘラナデ（研磨）底部一部ヘラナデ，内面口唇付近横ナデ，他はヘラナデ	砂粒多量に含有	色調内面淡白褐色，外面黒茶褐色，焼成普通80%残，表面が荒れ技法等不明瞭
6	器台	口径　7.3 脚径　10.3 器高　7.9	受部ヘラナデか，脚部ハケ目後ヘラ研磨，内面ハケ目か	緻密	色調淡茶褐色，円窓4つ，焼成良好，80%残



1. 暗褐色土層（ローム粒、浮石含む）
2. 暗褐色土層（やや赤味帯びる）
3. 赤褐色土層（焼土ブロック、ロームブロック、灰含む）
4. 暗褐色土層（ローム粒、ロームブロック、焼土ブロック含む、1層より白い）
5. 灰白色土層（白色粘土ブロック含む）
6. 黒褐色土層（灰塊、焼土ブロック含む）
7. 赤色土層（焼土ブロック含む）
8. 暗褐色土層（ローム粒、焼土粒、白色粘土、炭化物含む）

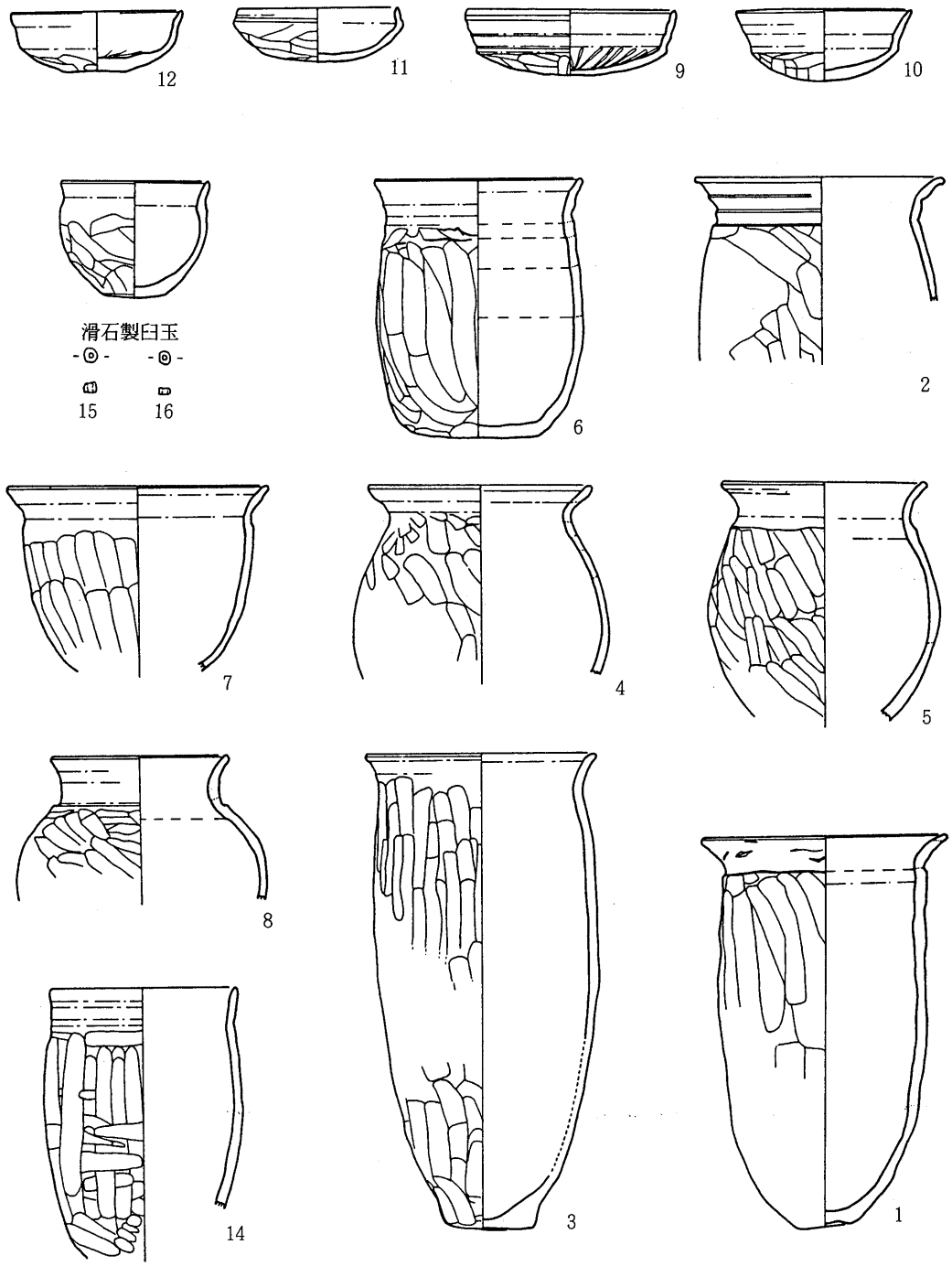
a．黒灰色土層（砂質、B、灰を含む）
b．黒色土層（FP、c含む、粘性あり）
c．黒褐色土層（FP、c、ローム粒含む）
d．暗褐色土層（黒色土混入、ローム粒、ロームブロック含む）
e．暗褐色土層（浮石、炭化物、焼土、白色粘土含む）

0　2 m

D区最北端に位置する。北西コーナー上部を掘られている他は壁，床ともしっかりしている。竈は白色粘土で構築されており，煙道部はほぼ直に掘られほとんど住居外に延びていない。竈右側に深さ約60cmの円形の貯蔵穴がある他に南壁東寄りの所に浅い方形ピットが掘られ，ここに手に握るのに丁度良い位の大きさの長形の河原石が9個まとめて置いてあった。竈前及び貯蔵穴付近に甕，坏などが集中して出土。又，石製臼玉も竈袖部あたりから多数出土した。

図版14　14号住居跡遺構全景

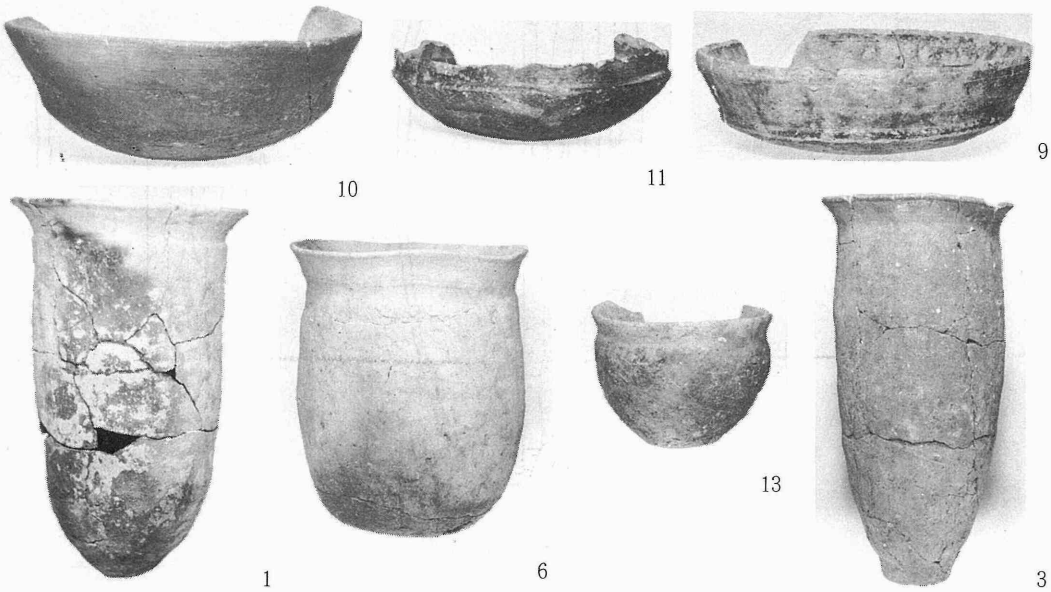
14号住居跡カマド付近遺物出土状態



挿図21　14号住居跡出土遺物実測図

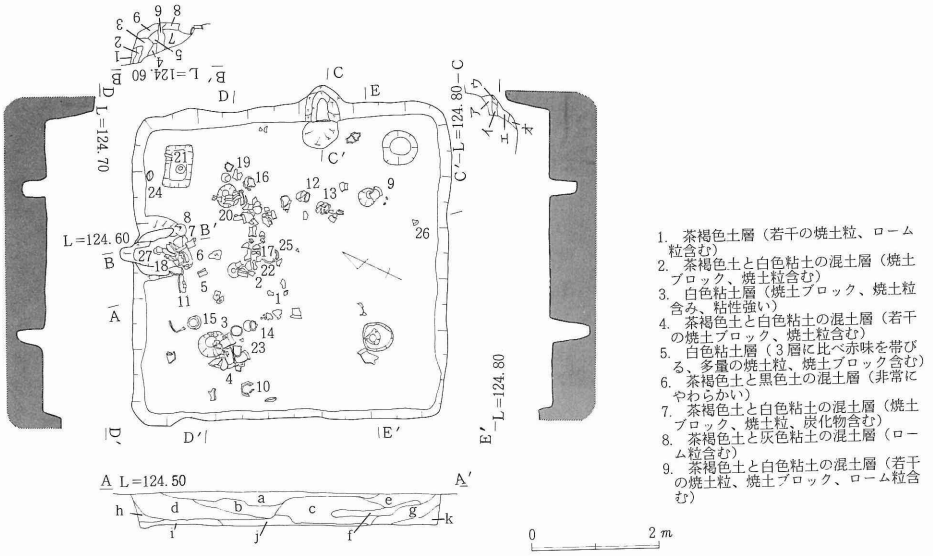
14号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量（cm）	技法等	胎土	備考
1	土師器 甕	口径 19.8 器高 32.2	口縁部横ナデ，胴部縦及び斜方向ヘラ削り，底部ヘラ削り	雲母，砂粒小石含有	色調褐色，焼成良好，完形表面に白色粘土付着，歪み有り
2	土師器 甕	口径 23.0	口縁部横ナデ，胴部上半斜方向ヘラ削り	石英，小石砂粒含有	色調淡茶褐色，焼成良好，50%残
3	土師器 甕	口径 18.5 底径 7.0 器高 38.8	口縁部横ナデ，胴部縦方向ヘラ削り，底部ヘラ削り	石英，雲母小石多量含有	色調茶褐色，胴部一部褐色，焼成良好，95%残，底部に葉脈痕残る
4	土師器 甕	口径 18.2	口縁部横ナデ，胴部斜方向ヘラ削り	石英，雲母小石多量含有	色調黒灰褐色，焼成良好，50%残
5	土師器 甕	口径 16.4	口縁部横ナデ，胴部斜方向ヘラ削り	石英，小石砂粒含有	色調茶褐色，焼成良好，70%残
6	土師器 小型甕	口径 16.8 底径 10.7 器高 21.1	口縁部横ナデ，胴部及び底部ヘラ削り，内面ナデ	石英，雲母砂粒含有	色調淡褐色，焼成良好，完形，底部に葉脈痕残る
7	土師器 鉢	口径 21.2	口縁部横ナデ，胴部縦方向ヘラ削り	石英，雲母砂粒含有	口縁～胴部上半黒褐色，胴部下半赤褐色，焼成良好，60%残
8	土師器 壺	口径 14.3	口縁部横ナデ，胴部斜方向ヘラ削り，内面ナデ	石英，雲母砂粒含有	色調灰褐色，焼成良好，30%残，表面荒れ混入物目立つ
9	土師器 坏	口径 17.0 器高 5.4	口縁部横ナデ，底部不定方向ヘラ削り，内面に暗文を施す	石英，砂粒小石，含有	色調淡褐色，焼成良好，90%残，全体に丁寧な作り
10	土師器 坏	口径 14.4 器高 6.0	口縁部横ナデ，底部丁寧なヘラ削り，内面ナデ，内面底部にヘラ先で傷つけた痕跡有り	若干の雲母小石含有	外面黒灰色，内面灰褐色，焼成良好，70%残，器肉厚く，重量感有り
11	土師器 坏	口径 13.1 器高 4.4	口縁部横ナデ，底部不定方向ヘラ削り，内面ナデ	石英，雲母含有	色調黒褐色，焼成良好，80%残，口唇部器面荒れる
12	土師器 坏	口径 14.0 器高 4.8	口縁部横ナデ，底部不定方向ヘラ削り，内面ナデ	石英，砂粒微粒子含有	色調白褐色，焼成良好，70%残，口縁部付近歪み
13	土師器 小型甕	口径 12.0 底径 5.2 器高 9.5	口縁部横ナデ，底部不定方向ヘラ削り，内面ナデ	多量の雲母石英含有	黒褐色，口縁一部褐色，焼成良好，80%残，不安定な平底



図版15 14号住居跡出土遺物

8 2 号 住 居 跡



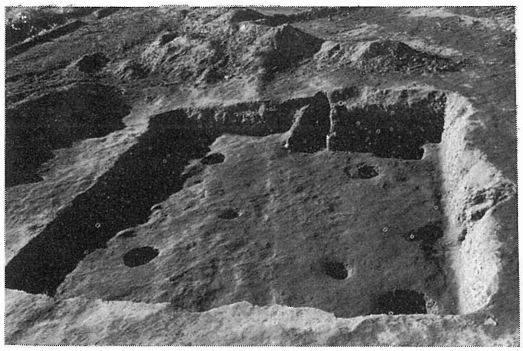
1. 茶褐色土層（若干の焼土粒、ローム粒含む）
2. 茶褐色土と白色粘土の混土層（焼土ブロック、焼土粒含む）
3. 白色粘土層（焼土ブロック、焼土粒含み、粘性強い）
4. 茶褐色土と白色粘土の混土層（若干の焼土ブロック、焼土粒含む）
5. 白色粘土層（3層に比べ赤味を帯びる、多量の焼土粒、焼土ブロック含む）
6. 茶褐色土と黒色土の混土層（非常にやわらかい）
7. 茶褐色土と白色粘土の混土層（焼土ブロック、焼土粒、炭化物含む）
8. 茶褐色土と灰色粘土の混土層（ローム粒含む）
9. 茶褐色土と白色粘土の混土層（若干の焼土粒、焼土ブロック、ローム粒含む）

a. 黒色土層（浮石、ＦＰ、ローム粒含む）
b. 茶褐色土層（浮石、ＦＰ、ローム粒含む）
c. 茶褐色土層（ローム粒、ロームブロック、焼土粒、炭化物含む）
d. 茶褐色土層（黒色土混入、ローム粒、ＦＰ含む）
e. 灰褐色土層（ＦＰ、炭化物含む、やや固い）
f. 褐色土層（ローム粒、ＰＰ、多量のロームブロック含む）
g. 黒色土層（ＦＰ、焼土粒、焼土ブロック含む）
h. 黄褐色土層（ローム粒、ロームブロック、ＦＰ、粘土ブロック含む）
i. 褐色土層（ローム粒、ロームブロック、ＦＰ、焼土粒、多量の白色粘土含む）
j. 茶褐色土層（ローム粒、ロームブロック、ＦＰ、焼土ブロック含む）
k. 黄褐色土層（黒色土混入、ローム粒、ロームブロック含む）

ア. 黒色土層（白色粘土、ローム粒、焼土粒、焼土ブロック含む）
イ. 黒色土と白色粘土の混土層（ア層に比べ白味帯びる、焼土粒、焼土ブロック含む）
ウ. 黒色土層（多量の焼土粒含む）
エ. 白色粘土層（焼土粒、ローム粒含む強い粘性、しまりあり）
オ. 茶褐色土層（ローム粒含む）

挿図22

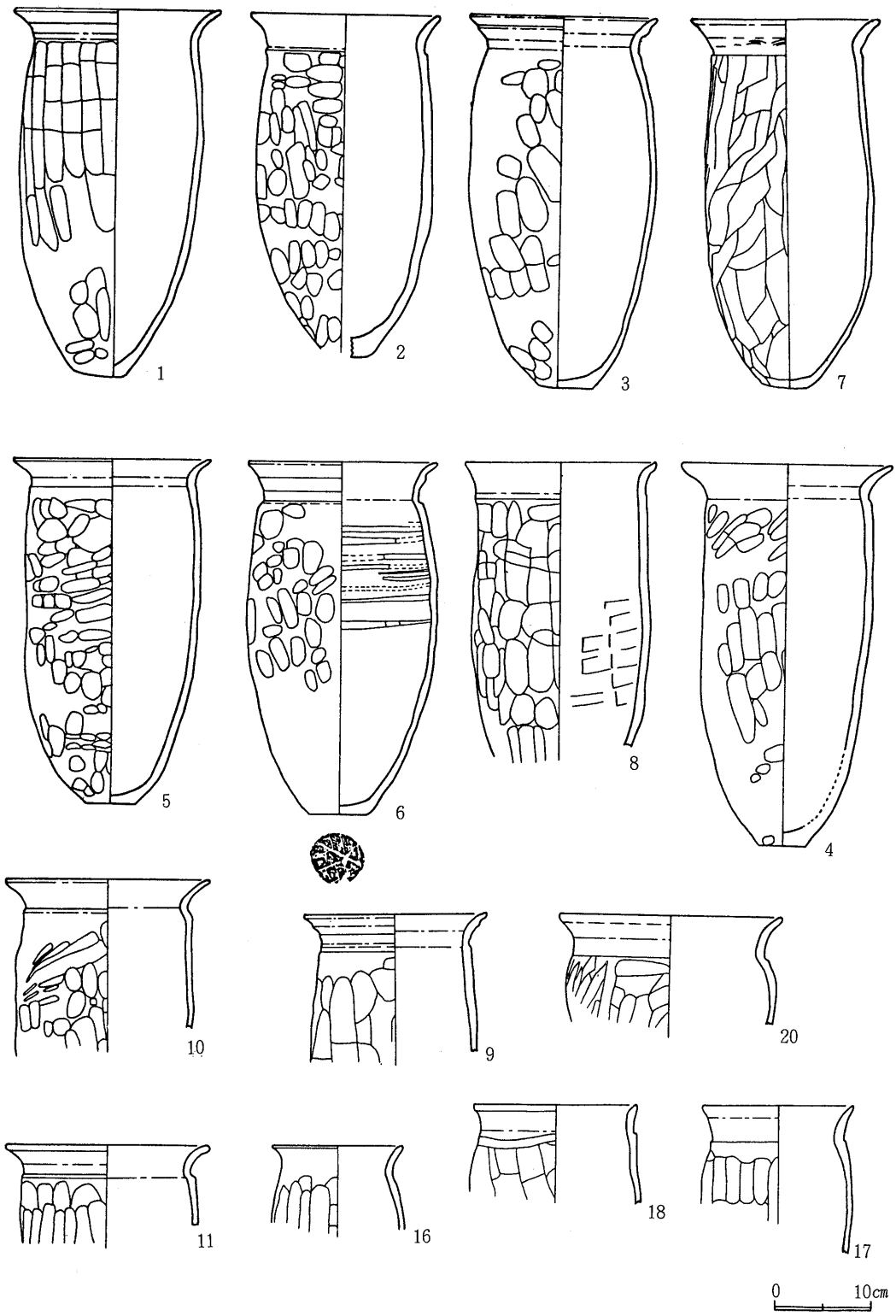
本住居跡はＦ区最南端に位置し，そのプランは方形を呈する。壁は80°の傾斜で掘り込まれ，床面はほぼ平坦である。竈は北壁中央部(①)と東壁南寄り(②)に２つ付設され，両竈とも多量の白色粘土が使用され，竈①では両袖部は芯として倒立状態で長甕を，支脚には高坏脚部を使用している。また両竈ともに煙道部は住居外にわずかに延び，燃焼部，煙道部はあまり焼けていない。貯蔵穴はそれぞれの竈の右側隅にあり，柱穴は４個ほぼ方形の配列で，各間隔は2.2m（P.2，３間は2.4m）である。遺物は竈①内，周辺，住居北側に集中して出土している。その多くは長甕で広範囲にわたり破片が散在している。他にも甑，坏等も出土し，貯蔵穴の底からは壺が出土している。



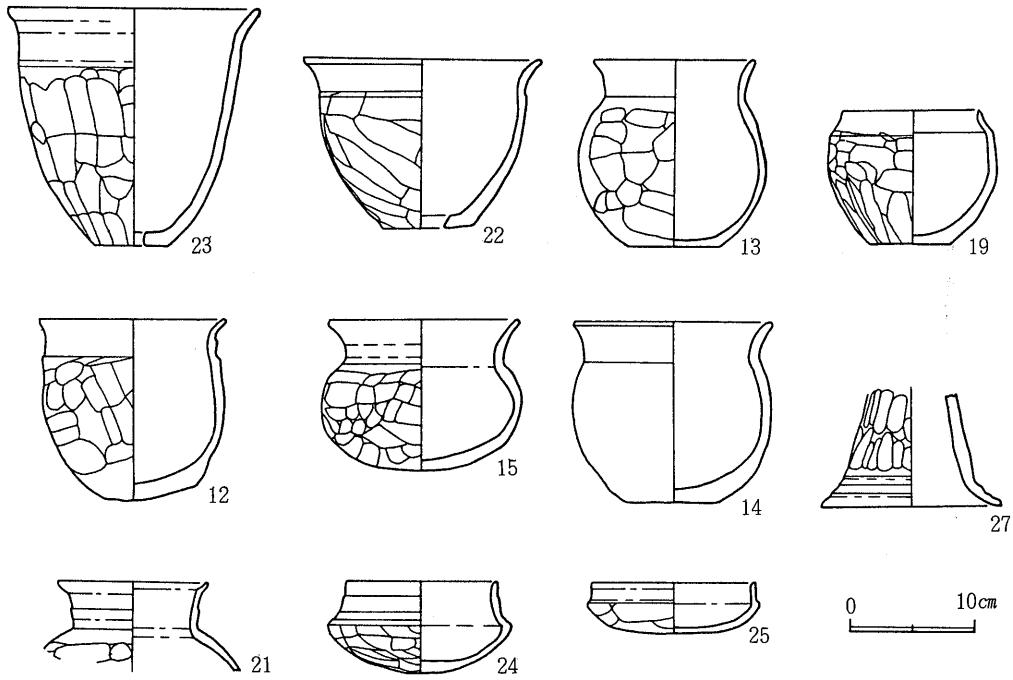
図版16　　82号住居跡遺構全景

82号住居跡カマド付近遺物出土状態

図版16　遺　構　写　真



挿図23　82号住居跡出土遺物実測図



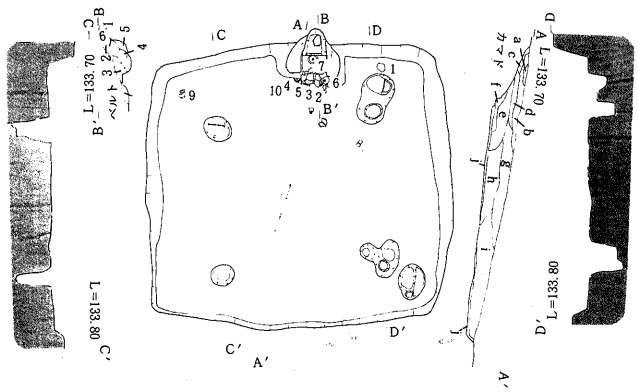
挿図24　82号住居跡出土遺物実測図

82号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量（cm）	技法等	胎土	備考
1	土師器 甕	口径 20.4 底径 5.0 器高 37.6	口縁部横ナデ，胴部上～中半縦方向ヘラ削り，胴部下半斜方向ヘラ削り，底部ヘラ削り	砂粒，小石含有	色調橙褐色，焼成やや不良，完形，器面は荒れている
2	土師器 甕	口径 18.8 底径約 3.0 器高 35.0	口縁部横ナデ，胴部縦方向ヘラ削り，底部ヘラ削り，内面ナデ	多量の砂粒小石含有	赤褐色，2次焼成受ける，焼成やや不良，90%残，全体的に肉厚
3	土師器 甕	口径 18.8 底径 5.6 器高 38.8	口縁部横ナデ，胴，底部ヘラ削り	石英，小石含有	淡赤褐色，底部付近2次焼成受ける，焼成良好，完形，全体的に薄手
4	土師器 甕	口径 21.2 底径 4.8 器高 39.0	口縁部横ナデ，胴部上半斜方向ヘラ削り，胴部中～下半縦方向ヘラ削り，底部ヘラ削り	石英，小石含有	色調淡褐色，焼成良好，90%残
5	土師器 甕	口径 19.8 底径 4.9 器高 35.2	口縁部横ナデ，胴部縦及び斜方向ヘラ削り，底部ヘラ削り，内面ナデ	砂粒，小石含有	色調淡褐色，焼成良好，完形
6	土師器 甕	口径 18.8 底径 6.0 器高 36.0	口縁部横ナデ，胴部斜め及び縦方向ヘラ削り，内面ヘラナデ	小石，砂粒含有	淡褐色，胴部2次焼成受ける，焼成良好，完形 底部に葉脈痕残る
7	土師器 甕	口径 18.9 底径 4.7 器高 37.9	口縁部丁寧な横ナデ，胴部縦及び斜方向ヘラ削り，底部ヘラ削り	小粒子含有	灰茶褐色，胴一部黒色，焼成良好，完形，底部歪み有り
8	土師器 甕	口径 19.2	口縁部横ナデ，胴部ヘラ削り，内面ヘラナデ	砂粒，小石含有	色調淡褐色，焼成良好，70%残
9	土師器 甕	口径 18.3	口縁部横ナデ，胴部縦方向ヘラ削り	石英，砂粒小石含有	外面淡赤褐色，内面黒色，焼成良好，50%残
10	土師器 甕	口径 20.1	口縁部横ナデ，胴部斜及び縦方向ヘラ削り，内面ナデ	砂粒，小石含有	色調赤褐色，焼成良好，50%残
11	土師器 甕	口径 21.0	口縁部横ナデ 胴部縦方向ヘラ削り	粗粒子含有	色調灰褐色，焼成良好，口縁部としては完形
12	土師器 小型甕	口径 14.6 底径 7.0 器高 14.4	口縁部横ナデ 胴部縦方向ヘラ削り	石英含有	色調淡褐色，焼成良好，完形，底部付近器肉厚い
13	土師器 小型甕	口径 12.4 底径 6.8 器高 15.0	口縁部横ナデ，胴部，斜方向ヘラ削り，底部ヘラ削り	砂粒，小石含有	色調黒褐色，焼成良好，完形，器面磨滅

番号	器種	法量（cm）	技法等	胎土	備考
14	土師器 小型甕	口径 15.5 底径 7.4 器高 14.3	口縁部横ナデ，胴部ヘラ削り，底部ヘラ削り，内面ナデ	小粒子含有	紫灰褐色，底部黒色，焼成良好，完形，底部葉脈痕
15	土師器 小型甕	口径 14.8 器高 12.1	口縁部横ナデ，胴，底部ヘラ削り	雲母，石英砂粒，含有	色調淡赤褐色，焼成良好，完形，内面磨滅
16	土師器 小型甕	口径 12.8	口縁部横ナデ，胴部，縦方向ヘラ削り	石英，雲母砂粒，含有	色調淡褐色，焼成良好，60%残
17	土師器 小型甕	口径 15.4	口縁部横ナデ，胴部，粗い縦方向ヘラ削り	砂粒含有	色調赤褐色，焼成良好，60%残
18	土師器 甕	口径 16.6	口縁部横ナデ，胴部上半斜方向ヘラ削り	石英，小石含有	色調淡褐色，焼成良好，口縁部としては完形
19	土師器 埦	口径 10.7 底径 6.5 器高 10.5	口縁部丁寧な横ナデ，胴部上半横方向ヘラ削り，下半縦方向ヘラ削り，底部粗いヘラ削り	小粒子含有	色調茶褐色，底部は黒色，焼成良好，完形
20	土師器 鉢	口径 22.4	口縁部横ナデ，胴部斜及び縦方向ヘラ削り，内面ナデ	若干の小粒子，緻密	色調淡茶褐色，焼成良好，70%残
21	土師器 壺	口径 11.6	口縁部横ナデ，胴部上半横方向ヘラ削り	若干の砂粒含有	色調赤褐色，焼成良好，口縁部としては完形
22	土師器 甑	口径 18.6 底径 7.0 孔径 2.0 器高 13.5	口縁部丁寧な横ナデ，胴部ヘラ削り，底部ヘラ削り，内面ナデ	若干の砂粒含有	淡褐色，焼成良好，完形
23	土師器 甑	口径 19.6 底径 5.3 孔径 1.9 器高 19.0	口縁部横ナデ，胴部縦方向ヘラ削り，底部ヘラ削り，内面ナデ	石英，砂粒含有	淡赤褐色，底部火を受ける，焼成良好，完形
24	土師器 坏	口径 11.7 器高 7.4	口縁部横ナデ，底部中央ヘラ削り後，周縁部のみ一定方向ヘラ削り，内面ナデ	石英含有	色調外面黒褐色，内面淡褐色，焼成良好，完形 全体に丁寧な作り
25	土師器 坏	口径 12.7 器高 4.1	口縁部横ナデ，底部中央ヘラ削り後，周縁部のみ一定方向ヘラ削り内面ナデ	石英，砂粒含有	色調底部灰褐色，口縁部淡茶褐色，焼成良好，50%残 平底に近い底部
26	土師器 坏	口径 12.2 器高 4.0	口縁部横ナデ，底部ヘラ削り，内面ナデ	小粒子含有	色調暗黒褐色，焼成良好，40%残
27	土師器 高坏	脚径 4.4	脚部，縦方向ヘラ削り 裾部，横ナデ	小石，砂粒含有	色調赤茶褐色，焼成良好，脚部としては完形

118号住居跡



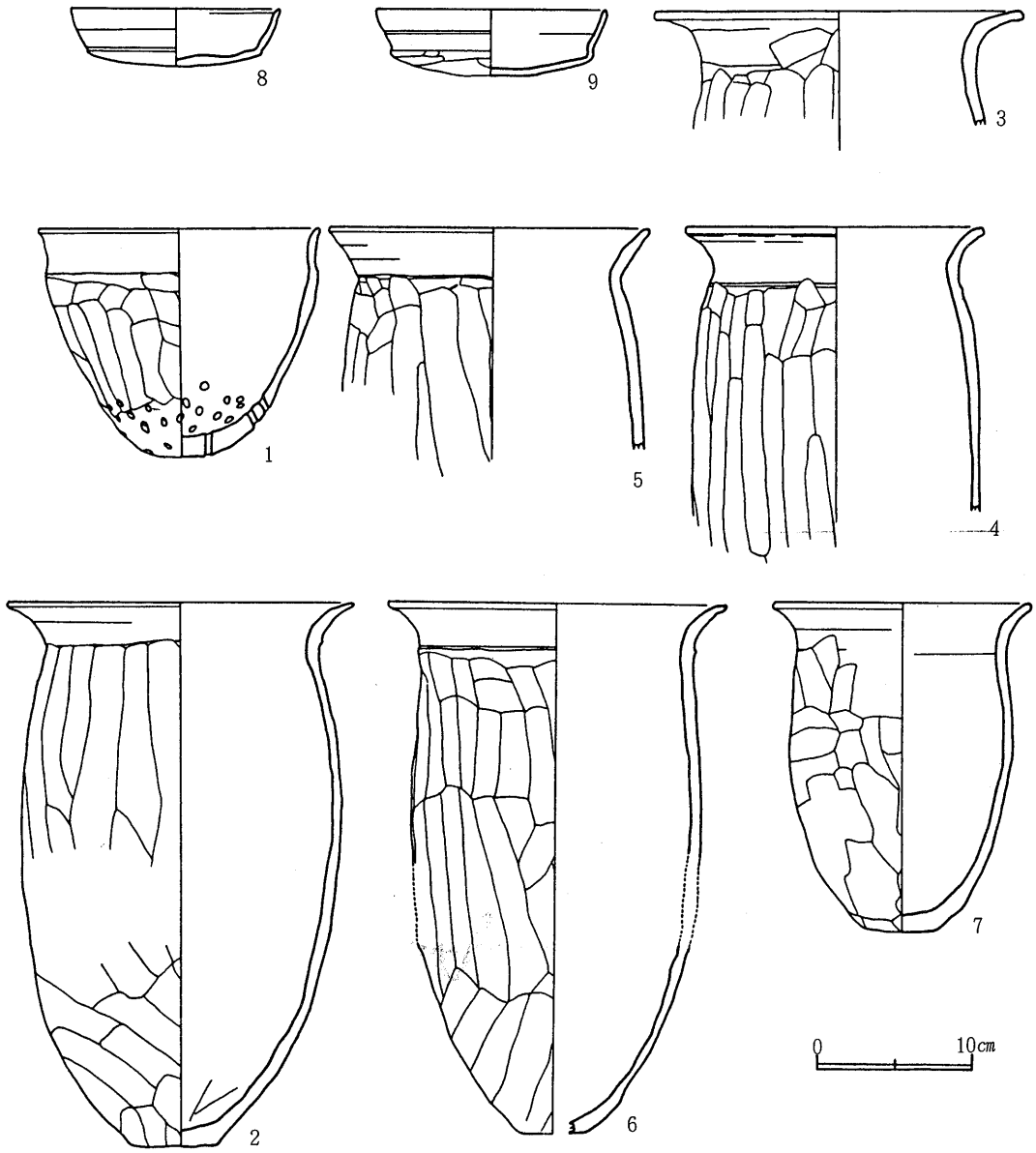
1. 茶褐色土層（焼土粒含む）
2. 灰白色粘土層（ローム粒、ロームブロック、多量の焼土粒、焼土ブロック含む）
3. 灰白色粘土層（焼土粒、焼土ブロック含む、粘性が強い）
4. 灰白色粘土層（ローム粒、多量の焼土粒含む）
5. 灰白色粘土と褐色土の混土層（ローム粒、ロームブロック、若干の焼土粒含む）
6. 灰白色粘土と茶褐色土の混土層（焼土ブロック、焼土粒含む）

a．黒色土層（焼土粒、焼土ブロック含む）
b．黒色土と茶褐色土の混土層（浮石、FP、炭化物、ロームブロック、ローム粒、焼土粒、焼土ブロック含む）
c．黒色土と赤褐色土の混土層（焼土粒、焼土ブロック、粘土ブロック含む）
d．黒色土層（ローム粒、焼土ブロック、多量の炭化物含む）
e．茶褐色土層（多量の焼土粒、焼土ブロック含む）
f．灰白色粘土と茶褐色土の混土層（焼土粒、焼土ブロック、ローム粒、ロームブロック含む、粘性が強い）
g．茶褐色土層（浮石、FP含む）
h．茶褐色土と褐色土の混土層（FP、焼土ブロック、ローム粒、ロームブロック含む）
i．褐色土層（FP、ローム粒、ロームブロック含む）
j．黄褐色土層（ロームブロック含む）

0 2m

挿図25

本住居跡はD区南丘陵南西端に位置し，そのプランは東西がやや長い方形を呈する。壁は70°の傾斜で掘り込まれ，床面はほぼ平坦である。竈は北壁中央部に付設され，天井部，袖部には多量の白色粘土が使用され，両袖，支脚には甕を倒立状態で使用している。煙道部は住居外に延び，燃焼部，煙道部はよく焼けている。柱穴は主柱穴と推定される4個のピットを検出し，それぞれの間隔は約3.5mで方形の配列を示す。遺物は竈内に横倒しの状態で土師器の長甕が2つ出土している。また竈左袖付近で土製丸玉が，貯蔵穴付近では多孔の甑（土師器）が倒立状態で出土している。

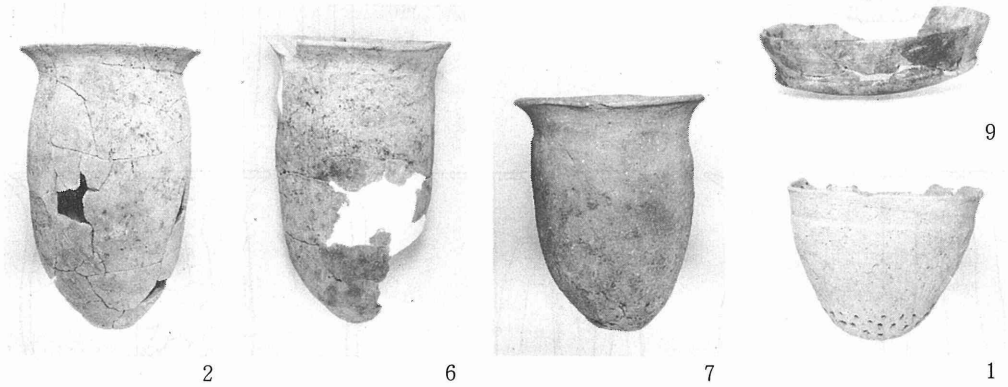


挿図26　118号住居跡出土遺物実測図

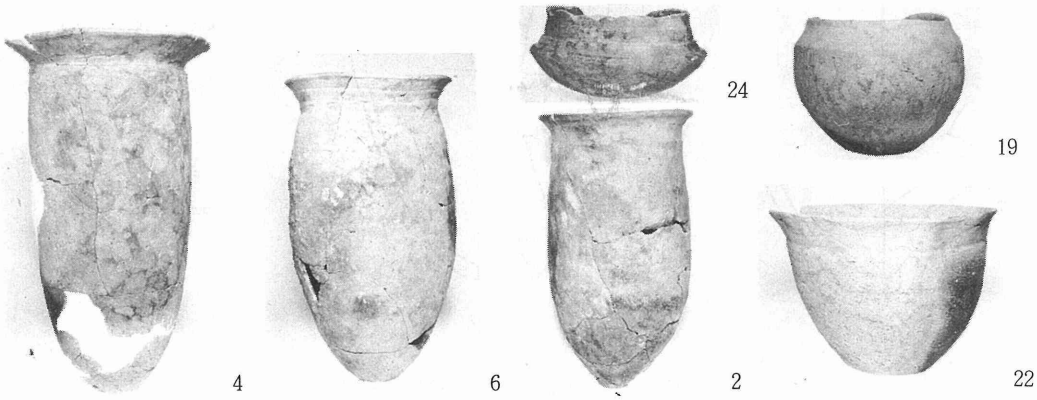
118号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量（cm）	技法等	胎土	備考
1	土師器甑	口径 17.8 底径 2.5 孔径0.3～0.7 器高 14.3	口縁部横ナデ，胴部ヘラ削り，孔はヘラ状工具で穿たれ，76個有り	石英，砂粒含有	色調黄褐色，焼成良好，完形，底部付近に火を受けた痕跡有り
2	土師器甕	口径 21.7 底径 5.1 器高 34.5	口縁部横ナデ，胴部上半縦方向ヘラ削り，中～下半斜方向ヘラ削り，底部ヘラ削り	石英，雲母砂粒含有	色調淡褐色，焼成良好，完形，器面が磨滅している
3	土師器甕	口径 23.5	口縁部横ナデ，胴部上半縦方向ヘラ削り	砂粒，小石等含有	色調茶褐色，焼成やや不良，口縁部は完形，全体に歪みあり雑な作り
4	土師器甕	口径 19.0	口縁部横ナデ，胴部上～中半縦方向ヘラ削り，内面ナデ	石英，小石砂粒含有	色調淡茶褐色，焼成良好，60%残
5	土師器甕	口径 20.6	口縁部横ナデ，胴部上半縦方向ヘラ削り	石英，雲母含有	色調淡褐色，焼成良好，50%残
6	土師器甕	口径 21.4 底径 4.2 器高 33.8	口縁部横ナデ，胴部，縦方向もしくは斜方向ヘラ削り 内面ナデ	多量の石英雲母砂粒含有	色調淡赤褐色，焼成良好，85%残 全体が磨滅している
7	土師器小型甕	口径 16.2 底径 4.6 器高 20.9	口縁部横ナデ，胴部ヘラ削り，底部，粗いヘラ削り	石英，小石含有	色調淡茶褐色，焼成良好，完形，底部に葉脈痕残る
8	土師器坏	口径 13.1 器高 3.8	口縁部横ナデ，周縁部一定方向ヘラ削り後中央部ヘラ削り	多量の砂粒含有	色調明褐色，焼成普通，器面荒れている，80%残
9	土師器坏	口径 14.4 器高 4.7	口縁部横ナデ，底部ヘラ削り後，周縁部のみ一定方向ヘラ削り	若干の小石砂粒含有	色調黒褐色，焼成良好，95%残
10	土製丸玉	1.25×1.2，径0.2cmの孔が穿たれる，黒色で焼きは甘い			

図版17　118号住居跡出土遺物

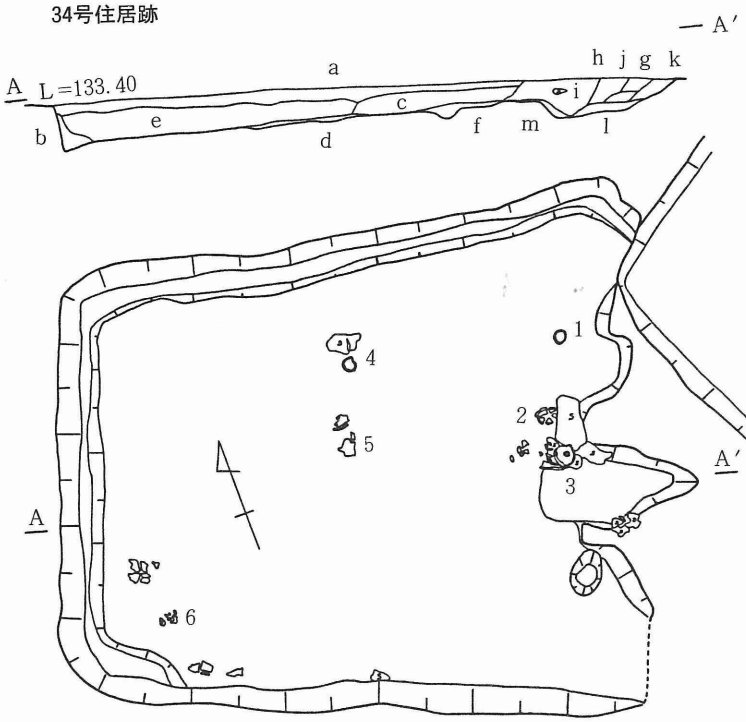


図版18　82号住居跡出土遺物



34号住居跡

挿図27



a．黒褐色土層（若干のＦＰ、ｃローム粒含む、褐色土ブロック混入）
b．暗褐色土と褐色土の混土層（若干の浮石含む）
c．暗褐色土層（焼土ブロック、炭化物、ロームブロック、少量のＦＰ、Ｃ含む）
d．褐色土層（ロームブロック含む）
e．暗褐色土と褐色土の混土層（ＦＰ、若干のｃ、焼土粒、ローム粒含む）
f．褐色土層（浮石まじりの黒色土混入、非常に固い）
g．赤褐色土層（褐色土混入）
h．暗褐色土層（焼土ブロック含む、やや赤味がかる）
i．黒褐色土層（浮石、ローム粒焼土粒含む）
j．赤褐色土層（焼土粒含む、やや黒味がかる）
k．暗褐色土層（焼土粒、ローム粒含む）
l．褐色土層（灰、焼土ブロック含む、やや赤味がかる）
m．暗褐色土層（ｋ層に比べ赤味帯びる、焼土ブロック、若干のローム粒含む）

0　2 m

本住居はＤ区北側南東斜面に位置し東西が長軸となる不整長方形である。周溝は床面から９㎝の深さで西壁から北壁に回っている。壁の立上がりは北側で50㎝前後，南側で20㎝前後で傾斜のある地形であることがわかる。柱穴は認められない。竈は，東壁わずか南寄りに位置し，壁をわずか作り出して角安及び疑灰岩の袖と接続させている。燃焼部は床面より20㎝程窪み，煙道部にゆるやかに登る。竈の南袖わきに深さ20㎝径30㎝程のピットがある。遺物は，竈北袖に着いて須恵器蓋が集中して出土したほか床面中央北壁寄りと南西隅にまとまって出土した。

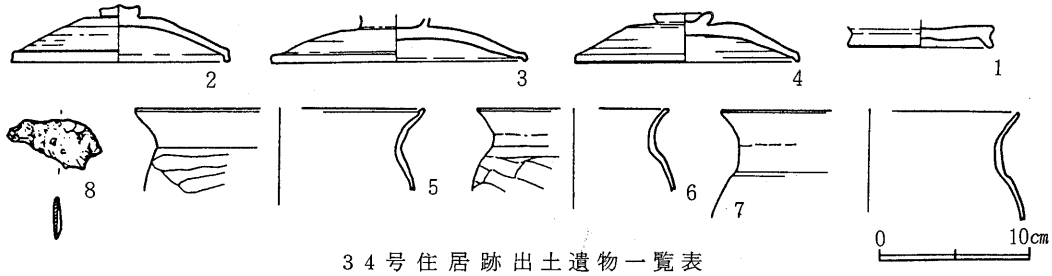
2

3

4

図版19　34号住居跡遺物出土状態及び出土遺物

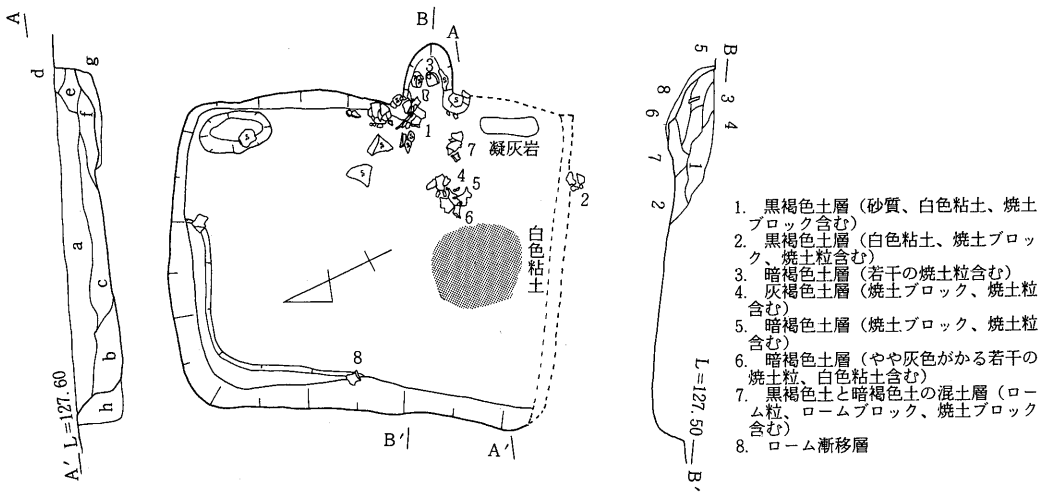
挿図28　34号住居跡出土遺物実測図



34号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量（cm）	技法等	胎土	備考
1	須恵器 高台付埦	高台径 9.2	底部回転ヘラ切り後，手持ヘラ調整，付け高台	白色粒子含有	色調青灰色，焼成良好，高台部としては完形
2	須恵器 蓋	口径 14.2 器高 3.9	天井部回転ヘラ削り後ツマミ貼付，裾部ロクロナデ	若干の小石含有	色調灰色，焼成良好，完形
3	須恵器 蓋	口径 16.5 器高 3.2	天井部回転ヘラ削り後ツマミ貼付しロクロナデ，裾部ヘラナデ	砂粒含有	色調茶灰色，焼成良好，90%残
4	須恵器 蓋	口径 15.5 器高 3.7	天井部回転ヘラ削り後ツマミ貼付，裾部ロクロナデ	砂粒，小石等含有	色調白灰色，口唇一部茶褐色，焼成良好，90%残
5	土師器 甕	口径 19.0	口縁部横ナデ，胴部上半横ヘラ削り	砂粒含有	色調赤褐色，焼成良好，口縁部50%残，薄手
6	土師器 小型甕	口径 12.4	口縁部横ナデ，胴部上半横ヘラ削り	多量の砂粒含有	色調暗褐色，焼成良好，口縁部50%残，薄手
7	土師器 甕	口径 18.5	口縁部横ナデ，胴部上半横ヘラ削り	砂粒含有	色調内面橙褐色，外面黄味帯びる，焼成普通，口縁60%残
8	鉄製 刀子	6.0×2.6	柄の木質部が一部残存		

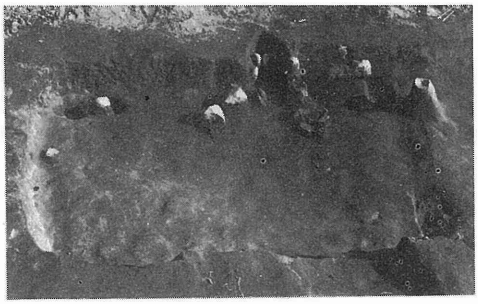
88号住居跡



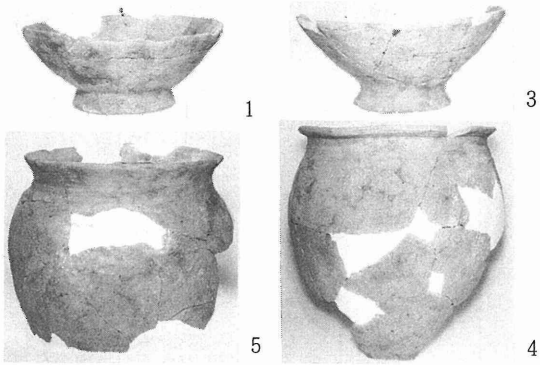
1. 黒褐色土層（砂質、白色粘土、焼土ブロック含む）
2. 黒褐色土層（白色粘土、焼土ブロック、焼土粒含む）
3. 暗褐色土層（若干の焼土粒含む）
4. 灰褐色土層（焼土ブロック、焼土粒含む）
5. 暗褐色土層（焼土ブロック、焼土粒含む）
6. 暗褐色土層（やや灰色がかる若干の焼土粒、白色粘土含む）
7. 黒褐色土と暗褐色土の混土層（ローム粒、ロームブロック、焼土ブロック含む）
8. ローム漸移層

挿図29　a．暗褐色土層（FP、c、若干のB含む砂質）
b．黒褐色土層（ローム粒、ロームブロック、焼土粒含む）
c．暗褐色土層（若干のFP、c含む）
d．黒褐色土層（焼土ブロック含む）
e．暗褐色土層（白色粘土、焼土粒、焼土ブロック含む）
f．黒色土層（暗褐色土混入、白色粘土、焼土ブロック含む）
g．褐色土層（しまりあり）
h．ローム漸移層

本住居跡はF区南東部に位置し，そのプランは南北に長い方形を呈する，壁は不明瞭な南壁を除き約80°の傾斜で掘り込まれ，床面南側には白色粘土が散布している。ピットは住居北東隅に検出されたが用途は不明である，周溝は北壁及び西壁下の一部で検出されているが，床面下1～2㎝と浅い。竈は両袖部に石を使い，あまり焼けていない。遺物は竈内及び竈周辺に多く，土師器の甕や高台付埦が出土している。また西壁下中央から灰釉陶器（高台付埦）が出土している。



図版20　88号住居跡遺物出土状態及び出土遺物



挿図30　88号住居跡出土遺物実測図

88号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量（㎝）	技法等	胎土	備考
1	土師器 高台埦	口径 13.5 高台径 6.5 器高 5.6	ロクロ整形か，口縁部横ナデ体部ヘラ削り，底部高台貼付け後ロクロナデ，内面は底部除きロクロナデ	雲母 砂粒含有	色調灰暗褐色，黒斑がつく焼成やや不良，完形，全体に雑な作り
2	土師器 高台埦	口径 13.9 高台径 7.4 器高 6.2	ロクロ整形か，口縁部横ナデ体部ヘラ削り，底部高台貼付け後ロクロナデ，内面ロクロナデ	若干の小石含有	色調淡茶褐色，焼度やや不良，60%残
3	土師器 高台埦	口径 14.4 高台径 7.0 器高 6.7	ロクロ整形か，口縁部横ナデ体部ヘラ削り，底部高台貼付け後ロクロナデ，内面ロクロナデ	小石，砂粒含有	色調暗褐色，焼成良好，80%残，内部に火をうけた痕跡残る
4	土師器 甕	口径 20.3	口縁部横ナデ，胴部上半横方向ヘラ削り，下半縦方向ヘラ削り，内面ヘラナデ	雲母，小石等含有	色調淡黄褐色，焼成良好，60%残，口縁部に歪みあり全体に器肉が厚い
5	土師器 甕	口径 18.2	口縁部横ナデ，胴部上半横及び斜め方向ヘラ削り，下半縦方向ヘラ削り，内面ヘラナデ	石英，雲母小石，含有	色調赤味帯びた茶褐色，焼成良好，50%残，口縁部歪み有り
8	灰釉陶器 高台埦	口径 13.0 高台径 7.7 器高 4.75	ロクロ整形，底部切り離し，ヘラ調整後高台貼付，ツケガケ内面底部と高台部に重ね焼きの痕跡残る	若干の小石含有	色調施釉部分は淡緑色，その他は灰白色，焼成良好，60%残

竪穴住居跡遺構一覧表

住居番号	形状 壁走向	規模（m） （長壁×短壁） 壁高（cm）	床面積（㎡）	かまど 位置	かまど つくり幅（cm）	周溝	柱穴	貯蔵穴	備考 （数字の単位はcm）	重複関係
1	不整方形 N—28°—E（西）	5？×4 40	20？			×	×	×	南壁立ち上がり不明。規模，床面積は推定。樽系土器及び赤井戸系土器出土	
2	不整方形 N—20°—E（西）	3.6？×3.2 55	11.5？			×	×	×	南壁立ち上がり不明。規模，床面積は推定。焼土範囲（70×50）が住居中央南壁寄りに在り	
3	不整方形 N—44°—E（西）	4.5？×3.2？ 60	14.4？			×	？	？	東，南壁立ち上がり不明。規模，床面積は推定。ピット多数検出。H—2同様の位置に焼土範囲在り。	
4	長方形 N—15°—E（東）	2.7×2.2 95	5.9			×	○ (1)	×	小型の住居だが深い。住居中央西壁寄りに焼土範囲（33×26）在り。石田川系土器及び樽系土器出土。	4→W—1
5	不整方形 N—25°—E（西）	4×3.8 80	15.2			×	×	○ (1)	南壁立ち上がり不明。住居中央西壁寄りに炉在り。北東隅近くに浅い貯蔵穴在り。床面堅牢。	
6	不整方形 N—20°—E（東）	4.9×4.3 105	21			○ （一部）	○ (2)？	○ (1)	火災住居。住居中央西壁寄りに焼土範囲在り。	6→W—1
7	長方形 N—53°—E（東南）	5.7×4 26	22.8			×	×	×	火災住居。東，南壁立ち上がり不明。焼土範囲は住居中央南壁寄りと西壁寄りの2カ所に在り。	
8	長方形？ N—45°—E（北）	3.1×？ 36	？	？	？	？	○ (1)？	？	北西コーナーのみ確認。柱穴は床面からの深さ35cm。	
9	不整方形 N—38°—E（西）	3.6×3.1 35	11.2			×	×	×	焼土範囲（40×35）が住居中央から北西隅にすこし寄った位置に在り。	
10	不整方形 N—53°—E（東）	4×3.5 34	14			×	×	×	焼土範囲が住居中央部と北隅寄りの2カ所に在り。住居北隅に白色粘土がかたまって検出。	
11	方形 N—35°—E（東）	4×4 70	16			○ （一部欠）	○ (4)	○ (3)？	本文参照	
12	長方形 N—40°—E（東）	4.8×3.4 58	16.3			×	×	×	自然石堆積層を掘り込んで構築。南東，南西壁及び床面は自然石をそのまま利用している。器台ミニチュア出土。	
13	方形 N—40°—E（東）	4×4 29	16			×	×	×	焼土範囲が住居中央西側に3カ所検出。南流するW—1に北隅から南隅にかけて切られている。	13→W—1
14	長方形 N—17°—W（西）	3.5×2.5 85	8.8	東壁南寄	粘土・50	×	×	○ (2)？	本文参照	
15	長方形 N—36°—W（東）	3.9×3.6 70	14	西壁南寄	粘土・35	×	○ (4)	○ (1)	柱穴は心心で2mの正方形。貯蔵穴はカマド左側，西壁南隅。カマドは白色粘土で構築。	
16	不整方形 N—4°—E（東）	4.3×3.9 58	16.8	東壁中央	粘土・ 25？	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，東壁南隅。カマド袖部は白色粘土を使用。	
17	方形 N—17°—W（西）	4.2×4.1 59	17.2	？	？	×	○ (3)？	？	H—18.23に掘り込まれていてカマドの有無は不明。	17→18→23
18	長方形 N—34°—E（東）	3.7×3.3 55	12.2	東壁南寄	支石・ 40？	×	？	○ (1)	H—23に大半を掘り込まれていて南コーナーとカマドのみ現存。西壁はH—23と共有。南北壁は床面段差により確認。	17→18→23
19	方形 N—31°—W（東）	5.2×5.2 85	27	東壁南寄 北壁中央	粘土・30 粘土・30	×	×	○ (2)	東，北壁にカマド2基有り。それぞれ右側へ1mの所に円形貯蔵穴在り。東壁カマドの支脚に土器を転用。	
20	方形 N—4°—W（西）	5×4.9 50	24.5	北壁東寄	粘土 土器・35	○ （一部）	○ (4)	○ (1)	柱穴は3.2m×2.7mで深さ75～95。貯蔵穴はカマド右側北東隅。	

住居番号	形状 壁走向	規模（m） （長壁×短壁） 壁高（cm）	床面積（㎡）	かまど 位置	かまど つくり幅（cm）	周溝	柱穴	貯蔵穴	備考 （数字の単位はcm）	重複関係
21	方形 N—3°—W(西)	4.2×4.1 70	17.2	(痕) 東壁南寄 西壁南寄	？・？ 粘土・ 55？	×	×	○ (2)	東壁カマド右側，南東隅に貯蔵穴。西壁カマドの貯蔵穴は左側に在り。北西コーナーをW—2が切る。	21→W—2
22	方形 N—37°—W(西)	6.7×6.5 58	43.5	北壁中央	粘土 土器・45	○ (一部)	×	○ (2)？	貯蔵穴はカマド左側，西隅に1つ，東隅に1つ在り土器多数出土。支脚に高坏脚部を転用。	
23	方形 N—34°—E(西)	3.1×2.9 76？	9	東壁南寄	袖石 支石・40 ？	×	×	×	カマドはH—17の埋土を掘り込んで造ったもので補強するために石組で構築されている。	17→18→23
24	方形 N—39°—W(西)	3.3×3.2 35	9.9	東壁中央	粘土・30 ？	○ (一部)	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，東隅に在り。周溝は南壁と西壁の一部のみ。	
25	方形 N—28°—W(東)	4.4×4.2 50	18.5	東壁南寄	粘土・45	×	○ (4)	○ (1)	カマド袖部はロームを厚さ20程掘り残して白色粘土を使用して構築。柱穴は2.3m×2m。貯蔵穴はカマド右側。	
26	方形 N—33°—W(西)	5.3×5 60	26.5	北壁東寄	・25	○ (一部)	○ (4)	○ (1)	カマド袖部はロームを厚さ25程掘り残して構築。柱穴は2.5mの正方形。貯蔵穴はカマド右側，北東隅。	
27	長方形 N—28°—E(西)	2.75×2 46	5.5	東壁中央	架構石 支石・50	○ (一部)	○ (2)？	○ (1)？	貯蔵穴はカマド右側，南東隅に在り。柱穴は住居中央部西壁寄りと北東隅に検出。	27→W—2
28	方形 N—30°—E(西)	3.8×3.5 30	13.3	西壁北寄	粘土・30	×	○ (4)	○ (1)	柱穴は2.2m×1.7mで深さはまちまちで18～52。貯蔵穴はカマド右側，北隅に在り。	28→W—3 →W—5
29	方形 N—38°—W(西)	4.3×4.2 55	18.1	西壁南寄	土器・30	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド左側，南隅。遺物は貯蔵穴カマドに集中して出土。カマド右側50程の所に多孔甑出土。	31？(前後関係不明)
30	長方形 N—13°—W(東)	5.5×5 70	27.5	東壁南寄	・55	○ (一部)	○ (4)	○ (1)	柱穴は心心で約2.4mの正方形。貯蔵穴はカマド右側南東隅。カマド左側に古いカマド跡在り。	30→31
31	長方形 N—9°—W(西)	3.3×2.7(？) 60	8.9？	東壁南寄	粘土 袖石？・40	○ (一部)	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側で東壁からやや離れた所に在る。粘土と石材とでカマドを築いている。	30→31
32	長方形 N—21°—E(西)	3.3×2.6(？) 55	8.6？	東壁南寄	・30	×	×	○ (2)？	貯蔵穴はカマド右側，南隅に在り，他に北隅に径60，深さ20のピットを検出。	
33	方形 N—40°—E(西)	4×3.8 65	15.2	西壁北寄	・20	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，北隅。遺物はカマド前と貯蔵穴に集中して出土。	
34	不整方形 N—18°—W(西)	4.6×3.3 40	17.3	東壁南寄	袖石・45	○ (一部)	×	○ (1)	本文参照	35→34
35	方形 N—26°—W(西)	4.4×4.2 50	18.5	(痕) 東壁南寄	？・30？	○ (一部)	○ (5)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。柱穴は心心で約2.6mの正方形。手に握れる程の長形の河原石が西隅から集中出土。	35→34→36
36	長方形？ N—22°—E(西)	4？×3 40	12？	東壁南寄 ？	粘土 袖石・35	× (？)	×	○ (1)	北側をW—4に切られており，規模は推定。貯蔵穴はカマド右側。鉄製遺物（鎌）を出土。	35→36→W—4
37	方形 N—12°—W(西)	3.9×3.7(？) 23	14.4？	東壁南寄 ？	？	○ (一部)	×	×	南東，南西コーナーのみ確認。カマドもH—38に切られて，焼土の残る窪み跡のみ確認。	37→38→T—1
38	方形 N—34°—W(東)	5.5×5.4 65	29.7	北壁東寄	・30？	○ (一部)	○ (4)	○ (1)	貯蔵穴は隅丸方形で，カマド右側，北隅。柱穴は心心で3.3mの正方形。カマドはT—1によりかなり破壊。	37→38→T—1
39	方形 N—38°—W(西)	3.9×3.9 65	15.2	東壁南寄	粘土・40	○ (一部)	×	○ (2)？	貯蔵穴はカマド右側，東隅。他に北隅に1つピットがあるが性格不明。	
40	方形 N—41°—E(南)	3.45×3.25 65	11.2	東壁中央	粘土 支石・40	×	×	○ (1)	住居南隅に踏み台状のロームの掘り残しが在る。貯蔵穴はカマド右側。	
41	方形 N—6°—W(西)	1.7×1.6 85	2.7	東壁南寄	・35	×	×	×	非常に小さくて深い住居。	

住居番号	形状 壁走向	規模（m） （長壁×短壁） 壁高（cm）	床面積（㎡）	かまど 位置	かまど つくり幅（cm）	周溝	柱穴	貯蔵穴	備考 （数字の単位はcm）	重複関係
42	方形 N—28°—W(西)	4.8×4.6 90	22.1	北壁中央 東壁中央	・25？ 粘土・40	○ (一部)	○ (4)	○ (1)	柱穴は西側にやや開き気味の不整方形。貯蔵穴は東壁カマドの右側，東隅に在る。北隅に白色粘土。	
43	方形 N—37°—E(北)	2.35×2.3 90	5.4	東壁南寄	土器 支石・30	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマド袖部は土器をシンにして構築。袖部左側に甑と甕が組んだ状態で出土。	
44	方形 N—41°—W(西)	4×3.8 80	15.2	東壁南寄	土器・30	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマド袖部は土器をシンにして構築。カマドの支脚に高坏脚部を転用。	
45	方形 N—49°—E(北)	4.4×4.3 85	18.9	東壁南寄	袖石 粘土・45 土器	×	○ (4)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマドは石材で構築。カマド支脚に高坏脚部を転用。柱穴は東側にやや開き気味の台形状。	45→46→W—2
46	長方形？ N—6°—W？(西)	3.5？×2.8？ 35	9.8？	(痕) 南壁中央？	？・？	？	？	？	カマドの跡と地層断面掘り込みから規模は推定。	45→46→W—2
47	方形 N—24°—W(東)	4.4×4.2 65	18.5	西壁南寄	粘土・40	○ (一部欠)	○ (4)	○ (1)	貯蔵穴はカマド左側，南西隅。柱穴は心心2.3m～2.4mのほぼ正方形を呈する。深さ35～40。	
48	長方形 N—8°—W(東)	3.8×3.45 90	13.1	東壁南寄	土器・40	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。カマド袖部はロームを掘り残して焚き口の所に長胴甕を据えて構築。	
49	長方形 N—35°—E(西)	5.8×5.5 80	31.9	北壁中央	土器・40	×	×	×	カマド袖部はロームを厚さ30～40掘り残して焚き口に長胴甕を据え横にも長胴甕を渡して構築。	49→T—2
50	長方形 N—28°—W(東)	3.6×3.2 70	11.5	東壁南寄	・40	×	×	○ (1)	カマド袖部はロームを厚さ30程掘り残して構築。貯蔵穴はカマド右側。住居中央に遺物集中出土。	
51	方形 N—35°—E(北)	4.55×4.45 80	2.0	東壁南寄	粘土 土器・35	×	○ (5)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマド袖部は土器をシンにして構築。カマドの支脚に高坏脚部転用。柱穴は心心で2.3m～2.4m。	
52	長方形 N—14°—W(西)	4×2.8 85	11.2	東壁中央	土器・30	×	○ (2)？	○ (1)	W—2に南東コーナーを切られる。貯蔵穴はカマド右側。カマド袖部は長胴甕を利用して構築している。	52→W—2
53	長方形 N—33°—W(東)	3.45×3.1 35	10.7	東壁南寄	・55	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，東隅。	
54	方形 N—38°—W(西)	4.1×4.1 85	16.8	東壁南寄	土器・30	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，東隅。カマド袖部は土器を据えて構築。北壁側下から長形の河原石7つまとまって出土。	54→W—6
55	方形 N—43°—W(西)	4.1？×3.9？ 20	16？	？	？	？	○ (2)？	？	溝に切られていたが，西コーナーが確認でき，規模が推定できた。	55→W—2→W—3 →W—4
56	方形 N—26°—W(西)	4.25×4.1 100	17.4	東壁南寄	・50	×	○ (4)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側カマド袖部はローム掘り残し。支脚に高坏脚部転用。柱穴は心心で2.7m～2.8mの正方形。	
57	長方形 N—2°—W(西)	6.25×5.7 50	35.6	東壁南寄	粘土・50	×	○ (4)	○ (1)	カマド右側に長方形の貯蔵穴。柱穴は心心で3.5m～3.6mの正方形。白色粘土を多量に出土。固い床面を持つ。	79→64→57
58	長方形 N—1°—E(西)	6.2×5.8 35	36	西壁南寄	粘土・45	○ (一部)	○ (2)？	○ (1)	貯蔵穴はカマド左側，南西隅。貯蔵穴付近の床面が貼り床されていたことからH—65より新しいと判断した。	65→58→59
59	長方形 N—3°—E(西)	5.35×4.5 35	24.1	東壁南寄	・50？	○ (一部)	○ (3)？	？	住居南東4半分はかく乱を受けていて内部施設等の詳細不明。	58→59
60	長方形？ N—6°—E(西)	6以上×5以上 30	？	？	？	○	○ (2)？	？	北西コーナーを確認したのみ。柱穴は心心で3.4m。	65？(前後関係不明)
61	方形 N—2°—E(西)	7.3×7.3 50	53.3	北壁東寄 西壁南寄	・30 粘土・？	○ (一部)	○ (3)？	○ (1)	火災住居，床面からわら状の炭化物を検出。北壁カマドの右側に方形の貯蔵穴在り。柱穴は心心4.5m×4.5m。	

住居番号	形状 壁走向	規模（m） （長壁×短壁） 壁高（cm）	床面積（㎡）	かまど 位置	かまど つくり幅（cm）	周溝	柱穴	貯蔵穴	備考 （数字の単ははcm）	重複関係
62	方形 N—25°—W(東)	4.25×4.1 60	17.4	北壁東寄	土器・30	○	○ (2)?	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマド袖部は両側に長胴甕２個体ずつ伏せて横に土器を渡して構築。	63→62
63	長方形 N—30°—W(東)	4.4×3.5? 42	15.4?	?	?	?	○ (2)?	?	北西コーナーをH—62に切り込まれている。床面から白色粘土を検出。	63→62
64	長方形 N—3°—W(西)	6×5.5 50	33	(痕) 西壁南寄	粘土? ・40?	○ (一部)	○ (4)	○ (1)?	周溝は増築部分についてのみ掘ってある。柱穴は心心で2.4m～2.7mの北にやや開き気味の不整方形。	79→64→57
65	?	?	?	?	?	?	?	?	H—58とH—60との間に位置するが，北壁と床面の一部を確認したのみ。	65→60? →58
66	不整方形? N—10°—W(東)	3.2?×2.8? 30	9?	南壁東寄	粘土・30	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマドの右側。かく乱を受けていて住居の輪郭がはっきりしない。	
67	方形 N—34°—W(東)	3.7×3.6 60	13.3	西壁南寄	土器・30	○ (一部)	×?	○ (1)	カマド袖部は両側に２個ずつ長胴甕を立てて，高坏の脚部を支脚に転用。焼成部底に段差有り。貯蔵穴はカマド左側。	
68	長方形 N—40°—E(西)	4.3×4 55	17.2	東壁南寄	粘土・40	○ (一部欠)	○ (9)?	○ (1)	カマド袖部はロームを掘り残し，固くしめて白色粘土で固めたもので，支脚に小型甕を転用。床面は貼り床。	68→70
69	方形 N—4°—E(西)	4.95×4.8 27	23.8	(痕) 東壁南寄	粘土・?	×	○ (4)	○ (1)	カマドはW—2.3に切られていたが貯蔵穴はカマド右側。柱穴は西に開き気味の台形状。床面は固くしまった貼り床。	→W—7 75→69→W—2→ W—3
70	長方形 N—34°—E(西)	3.3?×2.5? 30	8.3?	東壁中央 (痕) 東壁南寄	・? ・30?	?	?	?	H—68のカマド付近を壊して掘り込んで造っている。カマドは２基検出したが前後関係不明。	68→70
71	長方形 N—30°—E(東)	3.5×3 35	10.5	東壁南寄	・20	×	×	×		
72	方形 N—9°—E(西)	3×2.8 55	8.4	東壁南寄	袖石・30	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。床面は西側⅔程が固くしまっていてカマド前は柔らかい。	73→72
73	長方形 N—14°—E(西)	3.1×2.5 35	7.8	?	?	○ (一部)	?	?	東半分をH—72に切られてカマドは未確認。床面は北半分が固くしまっている。住居北西隅に焼土範囲を検出。	73→72
74	長方形 N—48°—E(南)	6.2×5? 50	31?	東壁南寄	袖石・25	×	○ (4)	○ (1)	北壁はW—2.3によって切られていて不明。貯蔵穴はカマド右側。柱穴は3m×2.8m。	74→W—2→W—3
75	長方形 N—3°—E(西)	3.6?×3.1 40	11.2?	西壁北寄	・25	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド左側，袖部側下に在り。床面は固くしまっている。	→W—7 75→69→W—2→ W—3
76	方形 N—23°—W(東)	3.55×3.45 70	12.2	東壁南寄	粘土・30	○ (一部)	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。カマドの袖部は粘土で，天井部はローム主体で構築。	
77	長方形 N—15°—W(東)	4.05×3.5 75	14.2	西壁北寄	粘土・20 ?	○ (一部)	○ (2)	○ (1)	地山に残る岩をそのままにして住居を造っている。貯蔵穴はカマド右側，北西隅。	
78	方形 N—46°—E(北)	4.6×4.6 60	21.2	北壁中央	粘土・40 ?	○ (一部欠)	○ (4)	×	柱穴は心心で2.5mの正方形。住居南隅に手に握れる程の長形の河原石が６個体出土。	
79	方形 N—3°—W(西)	4.7×4.7 60	22.1	(痕) 西壁南寄	粘土? 40?	×	×	○ (1)?	貯蔵穴はカマド左側，南西隅。カマドと共にH—79に付くのかH—64に付くのか，あるいは引き続き使用していたのか不明。	79→64→57
80	長方形 N—31°—W(西)	5×4.7以上 90	23.5? 以上	東壁北寄	・45	×	○ (3)	○ (1)	南壁はW—２に，カマド上部はW—７で切られている。貯蔵穴はカマド右側。柱穴は東隅が欠けているが心心で3.4m×2.8m。	→W—2 →W—7

住居番号	形状 壁走向	規模（m） （長壁×短壁） 壁高（cm）	床面積（㎡）	かまど 位置	かまど つくり幅（cm）	周溝	柱穴	貯蔵穴	備考 （数字の単位はcm）	重複関係
81	方形 N—9°—W(西)	6.65×6.5 40	43.2	東壁南寄 西壁南寄	粘土・30 粘土・30	×	○ (6)	○ (2)	柱穴は北西壁は2間（間隔は約2 m），南，東壁は1間（約4 m）。4隅の柱穴は大小2つの掘り方有り。（建て替えか？）	
82	方形 N—29°—W(東)	4.55×4.4 50	20	北壁中央 東壁南寄	粘土・40 土器・20 粘土・20 ？	×	○ (4)	○ (2)	本文参照	
83	方形 N—31°—W(西)	2.9×2.8 50	8.1	東壁南寄	・30 ？	○	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマドを壁から1 m以上も掘って造り出している。	
84	方形 N—8°—W(西)	4.1×4.05 65	16.6	北壁中央	土器・20	○ (一部欠)	○ (1)？	○ (1)	火災住居か？貯蔵穴はカマド右側，北東隅。カマド焚き口に土器を据えて構築している。	
85	方形 N—4°—W(東)	3.9×3.8 80	14.8	北壁東寄 東壁南寄	・20 粘土・30 ？	×	×	○ (2)	貯蔵穴は共にカマドの右側で長円形。東壁カマドが先に造られたものと思われる。	M—1→85
86	長方形 N—3°—E(西)	3.7×3 60	11.1	東壁南寄	粘土・35 ？	○ (一部)	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。扁平な支石に接して長胴甕がカマドにかかった状態で出土。床面は堅牢。	
87	方形 N—6°—W(西)	5.3×5.2 55	27.6	東壁南寄	・50 ？	○	○ (2)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。柱穴は未調査部分の北東北西両隅が欠けているが東西柱穴間は心心で2.9 m。	
88	長方形 N—27°—E(東)	3？×2.2 40	6.6？	東壁南寄	袖石・30	○ (一部)	×	×	本文参照	
89	方形 N—42°—W(東)	4.2×4.2 66	17.6	東壁南寄	粘土・30 ？	○ (一部)	○ (2)？	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。	89→93→94 →95
90	長方形 N—9°—W(西)	4×3 90	12	東壁南寄	・20	○ (一部)	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。H—87との間の耕作土中から鏡出土。	
91	長方形 N—10°—E(西)	3.4×3 35	10.2	東壁南寄	袖石 支石・30	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。	M—3→91→T—3
92	長方形 N—3°—W(東)	2.3？×1.4 7？	3.2？	東壁中央	袖石・25	×	×	○ (2)	カマド跡とピットのある東壁付近の遺物から住居と認定。	
93	長方形 N—14°—E(西)	5.1×4 50	20	東壁南寄	粘土 袖石 支石・40	○ (一部)	○ (3)？	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマドは石材で補強して構築。柱穴は南東隅を欠く。	89→93→94
94	長方形 N—16°—E(西)	2.9×2.2 80	6.4	東壁南寄	袖石・30	○ (一部欠)	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。カマドはH—93を掘って築いているために石材で補強して構築している。	89→93→94
95	長方形 N—10°—E(東)	3.5×3 43	10.5？	（痕） 東壁中央 ？	？・？	○ (一部)	？	？	南コーナー未調査。カマドの位置は焼土から推定。	89→95
96	長方形 N—4°—W(西)	4.95×4.65 68	23			○	○ (4)	×	本文参照	
97	長方形 N—17°—W(西)	5.3×4.3 75	22.8			×	○	×	本文参照	
98	？ N—38°—W(東)	？ 75	？	？	？	○ (一部)	○ (4)	？	東，南コーナーのみ確認。柱穴は内側と外側と2組できる。建て替えによるものか？	
99	？ N—13°—E(東)	4×？ 30	？	東壁南寄	袖石・40	○ (一部)	？	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。	99→100

住居番号	形状 壁走向	規模（m） （長壁×短壁） 壁高（cm）	床面積（㎡）	かまど 位置	かまど つくり幅（cm）	周溝	柱穴	貯蔵穴	備考 （数字の単位はcm）	重複関係
100	? N—15°—E（東）	1.7×? 60	?	?	?	?	?	?		99→100
101	長方形 ? N—16°—E（西）	4.2?×2.8 35	11.8?	東壁南寄	袖石・30 ?	×	×	×	W—9に南壁を削取られているが固い床面がH—102埋土上に伸びていたのである程度の規模は推定できた。	102→101→W—9
102	長方形 N—14°—E（西）	2.7×1.9 60	5.1	?	?	?	?	?	W—9に住居中央を東西に切られているが，南西コーナーが確認されて規模の推定ができた。	102→101→W—9
103	不整方形 ? N—43°—W（東）	? 35	?	?	?	?	?	?	遺構が調査区域外にかかるために形状は推定。焼土範囲（85×55）有り。	103→W—9
104	? N—25°—E（西）	? 30	?	?	?	?	○ (2)	○ (1)?	北コーナーのみ確認。	
105	長方形 N—41°—E（南）	4.7×3 40	14.1	東壁南寄	・45	○ （一部欠）	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマド袖部はロームを厚さ20程掘り残して構築。	106→105 →W—10
106	長方形 N—34°—E（東）	5.4×4.5 25	24.3			○ （一部）	○ (3)	○ (1)	東隅から西隅にかけて住居中央部をW—10に切られている。炉は中央部西寄りに在る。	106→105 →W—10
107	? N—47°—E（南）	? 22	?	東壁南寄	・30	?	?	?	東コーナー，カマドのみ確認。	
108	長方形 N—15°—E（西）	5.5?×4.45 45	24.5?	東壁南寄	土器・25	○ （一部）	○ (4)	○ (1)	南壁をW—10に切られている。カマドは焚き口に土器を据えて構築。柱穴は心心で3m×2.7mの長方形。	108→W—10
109	方形 N—4°—E（西）	2.65×2.55 40	6.8	東壁南寄	粘土 土器・20	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。	
110	方形 N—25°—E（西）	4.4×4.4 20	19.4	東壁南寄	粘土・35	○ （一部）	○ (4)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側で非常に浅い。柱穴は心心で2.4mの正方形を呈する。	
111	方形 N—47°—W（東）	3.1×2.9 36	9	西壁南寄	土器・20	○ （一部欠）	×	×	東コーナーをW—12に切られている。	111→W—12
112	方形 N—24°—W（東）	4.5×4.4 50	19.8	東壁南寄	粘土・45	×	○ (4)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマドはロームを掘り残し粘土をまいて構築。柱穴は心心で2.2mの正方形。	
113	長方形 N—28°—W（東）	5.4×5 35	27	東壁南寄	粘土 土器・40	○ （一部）	○ (4)	○ (1)	南コーナーをW—10に切られている。貯蔵穴はカマド右側。柱穴は心心で約3mの正方形。深さ65～70。	113→W—10
114	不整方形 N—12°—W（西）	4.3×4.2 55	18.1	東壁南寄	粘土・15 ?	○ （一部）	○ (4)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマド前に焼土の堆積有り。柱穴は東に開く台形状を呈する。	115→114
115	方形 N—30°—W（東）	5.1×5 30	25.5	東壁中央	土器・35 ?	×	○ (5)	○ (1)	北東コーナー，カマド左半分をH—116に切られる。カマド袖部は長胴甕をシンに使用。手に握れる程の河原石10個体出土。	115→114 →116
116	長方形 N—27°—W（東）	4×3 60	12	東壁南寄	粘土・20	○ （一部）	×	×		115→116
117	長方形 N—15°—W（東）	4.5×3.9 55	17.6	東壁南寄	土器・25	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。カマド袖部に土器を据えている。瑕を出土。	
118	方形 N—25°—W（東）	5.5×5.2 60	28.6	北壁中央	粘土 土器・40	×	○ (7)	○ (1)	本文参照	
119	方形 N—40°—E（北）	4.3×4.3 45	18.5	東壁北寄	土器・30	×	○ (5)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側で長円形。カマド袖部は長胴甕を2個ずつ立て横にも渡す。柱穴は心心で2.3m×2.2m。	

住居番号	形状 壁走向	規模（m） （長壁×短壁） 壁高（cm）	床面積 （㎡）	かまど 位置	かまど つくり幅（cm）	周溝	柱穴	貯蔵穴	備考 （数字の単位はcm）	重複関係
120	方形 N—3°—E（東）	4.8×4.7 67	22.6	東壁中央	粘土・40	×	○ (4)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，きれいな掘り方を持つ方形（70×60×深さ60）で坏３個出土。柱穴は心心で約2.4mの正方形。	
121	方形 N—27°—W（西）	4.1×3.8 55	15.6	北壁東寄	土器・30 粘土　？	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側で方形（45×30）。カマド袖部を土器と粘土とで構築している。	
122	方形 N—30°—W（東）	3.7×3.65 45	13.5	東壁南寄	粘土 土器・30	×	○ (4)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマドは長胴甕を焚き口に据えて底部には段差を設けている。柱穴は心心で1.6m×1.5mのほぼ正方形。	
123	方形 N—35°—W（東）	5.1×5.1 45	26	北壁東寄	土器・40	×	○ (4)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマドは長胴甕をシンとして粘質土で構築している。底部段差有り。柱穴は南にやや開く台形状。	
124	方形 N—19°—E（西）	3.25×3.2 53	10.4	北壁東寄	粘土・40	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマド底部には段差が有る。	
125	方形 N—24°—W（西）	4.1×4 65	16.4	東壁南寄	粘土・35	○ （一部欠）	○ (5)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマドは粘質土で構築。柱穴は心心で1.9mの正方形。	
126	方形 N—18°—W（西）	6.35×6.1 45	38.7	東壁南寄	粘土・35 ？	○ （一部）	○ (4)？	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。柱穴は心心で3.7mの正方形。南西隅の柱穴は南にテラス状のひろがりを持つ。	
127	方形 N—11°—W（西）	2.5×2.3 26	5.8	東壁南隅	粘土 土器・25	×	×	×	カマドが住居南東コーナーに設けられている。焚き口に長胴甕を使用している。	
128	長方形 N—9°—W（西）	2.9×2.2 42	6.4			×	×	×	赤井戸系土器破片が埋土中から少量出土した。	
129	長方形 N—2°—W（西）	3.7×3 45	11.1	東壁南寄	粘土・35 ？	×	○ (4)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。柱穴は心心で1.7m～1.8mのほぼ正方形で，深さは50～60。	M—7→129
130	方形 N—38°—W（西）	5.3×5.2 55	27.6	東壁南寄	袖石・40	○ （一部）	○ (4)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマド底部は段差が有り，袖部は石材を用いて粘土をまく。柱穴は心心で3.2mの正方形。	
131	長方形？ N—17°—W（西）	5.3×5？ 85	26.5？	北壁中央	粘土・45	○ （一部）	○ (3)	○ (2)？	東壁をW—２に切られる。貯蔵穴はカマド左側に検出されたものの他にもう１つ有り。柱穴は2.6mの方形。	131→W—２
132	方形 N—25°—W（東）	5.25×5.2 72	27.3	東壁南寄	・60	○ （一部欠）	○ (4)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。柱穴は心心で2.5mの正方形。北隅柱穴の深さが80の他は50前後の深さ。	
133	不整方形 N—42°—W（西）	3.4×2.8 80	9.5	東壁中央	粘土・45	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。	
134	長方形 N—36°—W（西）	4×2.7 45	10.8	東壁南寄	粘土・40	○	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマドの底部は段差が有り，煙道と思われる焼土範囲が壁から80の所に在る°	
135	方形 N—20°—E（西）	2.4×2.2 25	5.3			×	×	×		
136	？ N—23°—E（西）	？ 65	？	？	？	？	○ (1)？	？	北コーナーのみ確認	
137	方形 N—40°—E（北）	3.8×3.7 20	14.1	東壁南寄	・40	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。	
138	不整方形 N—16°—E（西）	4.5×4.2？ 40	18.9？	北壁東寄	粘土・30	○ （一部）	○ (4)	○ (1)	南コーナーが隅切りされたような形の五角形。貯蔵穴はカマド右側，北東隅。	
139	方形 N—45°—E（北）	4.7×4.6 25	21.6	（痕） 東壁中央	？・？	×	○ (4)	○ (1)	カマド設置壁以外の３壁が後退しており，柱穴の掘り方からも拡張住居と思われる。貯蔵穴はカマド右側。	

住居番号	形状 壁走向	規模（m） （長壁×短壁） 壁高（cm）	床面積（㎡）	かまど 位置	かまど つくり幅（cm）	周溝	柱穴	貯蔵穴	備考 （数字の単位はcm）	重複関係
140	方形 N—30°—W(東)	3.2×3.1 60	9.9	北壁東寄	・30	○ (一部欠)	○ (3)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。柱穴は東隅を欠くが1辺1.9mの正方形と推定できる。	
141	長方形 N—47°—E(北)	3.3×1.9 47	6.3	東壁中央	粘土・25 ?	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。	
142	方形 N—15°—W(東)	4.7×4.7 55	22.1			×	○ (4)?	?	南西コーナーをW—13に切られる。柱穴は心心で2.5m×2.2m。	142→W—13
143	方形 N—45°—W(南)	5.1×5.1 40	26	南壁東寄	・40	○ (一部欠)	○ (4)?	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマド袖部は厚さ約30掘り残し，底部は段差有り。柱穴は心心で3.1m～3.2mでほぼ正方形。	143→144→W—10
144	長方形 N—2°—W(西)	4×3.1? 40	12.4?	東壁南寄	・40	○ (一部欠)	×	×		143→144→W—10
145	方形 N—2°—W(西)	3×3? 45	9?	?	?	×	×	○ (1)?	焼土範囲（50×45）が北西隅付近に検出された。	145→157→W—14
146	方形 N—34°—W(西)	6×5.9 65	35.4	東壁南寄	土器・40 ?	○ (一部)	○ (3)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。柱穴は東隅を欠くが一辺3.1mの正方形と推定。焚き口に土器使用。	
147	長方形 N—20°—W(西)	4.7×4 55	18.8	東壁南寄	・50 ?	○ (一部欠)	?	×	床面は凸凹。住居中央西壁付近に炭化物の堆積がみられた。	
148	長方形 N—52°—E(南)	5.25×4.85 55	25.5			○	○ (4)	○ (1)	東壁上部をW—13に切られる。焼土範囲が西壁中央付近にみられた。柱穴は2.7m～2.8m×2.9m。	148→W—13
149	長方形 N—25°—W(東)	2.8×2.2 32	6.2	東壁南隅	?・?	○ (一部)	×	×	南西隅に白色粘土が厚さ7～8程床面に付着。カマドははっきりした形では検出されなかった。	
150	長方形 N—14°—E(西)	3×1.7 23	5.1	東壁南寄	・?	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。	
151	? N—26°—W(西)	? 37	?	?	?	?	?	?	北西コーナーのみ確認。	151→162→171→W—15
152	長方形 N—33°—W(東)	4.9×4.55 95	22.3	西壁南寄	粘土・45	○ (一部)	○ (2)	○ (1)	貯蔵穴はカマド左側。	152→161→W—15
153	長方形 N—14°—W(東)	5.1×4.65 25	23.7	西壁南寄	土器 粘土・35	○ (一部)	○ (3)?	○ (1)	貯蔵穴はカマド左側，南西隅。カマド袖部は焚き口に長胴甕を据え粘土をまいている。支脚に高坏坏部を伏せて使用。	153→W—10
154	長方形 N—17°—W(西)	6.1×5.6 55	34.2			○ (一部欠)	○ (5)?	○ (1)	炉跡（70×60）は住居中央北壁寄りの柱穴中間に検出。貯蔵穴は炉跡と反対側の南壁際東寄りに在り，方形（70×60×深さ44）。	
155	長方形 N—0°—E(西)	2.7×2.3 25	6.2	東壁南隅	?	○ (一部)	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南壁側下に在り。	155→W—16
156	方形 N—14°—W(西)	4.4×4.25 25	18.7	東壁中央	土器 粘土・35	○ (一部)	○ (3)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。柱穴は北西柱穴をW—15のために欠くが，柱間2.6mの正方形。焚き口に長胴甕。	156→W—15
157	長方形 N—10°—W(西)	4.1×3.4? 30	13.9?	?	?	×	×	×	H—145の拡張である可能性有り。	145→157→W—14
158	方形 N—26°—W(東)	6.6×6.5 45	42.9	北壁東寄	土器 粘土・30	○	○ (4)	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。カマド袖部に長胴甕を据えて白色粘土をまく。柱穴は心心で4mの正方形。カマド前から坏が多量に出土。	159→158
159	? N—18°—W(西)	? 15	?			?	?	?	炉跡と思われる焼土範囲（85×70）が北壁寄りに検出された。	159→158

住居番号	形状 壁走向	規模（m） （長壁×短壁） 壁高（cm）	床面積（㎡）	かまど 位置	かまど つくり幅（cm）	周溝	柱穴	貯蔵穴	備考 （数字の単位はcm）	重複関係
160	長方形 N—26°—E（西）	5.65×5.2 55	29.4			○ （一部欠）	○ (4)	○ (1)？	火災住居か？H—154同様，炉は住居中央北壁寄りの柱穴中間に在り。貯蔵穴は炉と反対側の南壁寄りに在り。	160→161
161	不整方形 N—72°—W（南）	3.5？×2.7？ 55	9.5？	（痕） 東壁中央	？・？	×	×	×		152→ 160→161—W—15
162	長方形 N—1°—E（西）	4×3.4 53	13.6	東壁南寄	・40	○ （一部）	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。	151→162→171→ W—15
163	方形 N—1°—E（西）	3.35×3.15 25	10.6	東壁中央	粘土？ ・45	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。	164→163 →165
164	方形 N—2°—W（東）	5.1×4.9 60	25	北壁西寄	粘土 土器・25	×	○ (5)	○ (1)	火災住居。貯蔵穴はカマド左側，北西隅。柱穴は心心で2.5mの正方形。カマド底部に段差有り。	164→163 →165
165	方形 N—1°—W（東）	3×2.9 30	8.7	東壁南寄	・30	×	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅。	164→163 →165
166	方形？ N—18°—W（西）	3.1×3？ 30	9.3？			○ （一部）	×	×	炉は住居中央東壁際。その付近から炭化物出土。	166→W—16
167	？ N—13°—E（東）	4.2？×？ 24	？	東壁南寄	・？	×	？	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側，南東隅で長円形を呈する。	168→167→175→ W—16
168	長方形 N—12°—W（東）	4.5？×3.4 40	15.3？			×	○ (4)	○ (1)	炉跡（径45）は住居中央北壁寄りの柱穴中間に在り。柱穴は心心で1.7m～1.8m×2.4m。貯蔵穴は南壁際。H—154，160と共通。	168→169→170 →167→175
169	方形 N—14°—W（西）	4.4×4.2 70	18.5	？	？	○ （一部欠）	○ (3)	？	W—15に南東隅⅓程を切られている。柱穴は心心で2.5mの正方形を呈する。	168→169→170→ W—15
170	？ N—6°—E（東）	3×？ 55	？	東壁南隅	・40	？	？	？	カマド設置壁を除いてはほとんどW—15に切られている。	169→170→W—15
171	？ N—26°—W（西）	？ 42	？	？	？	？	？	？	北西コーナーのみ確認。	151→162→171→ W—15
172	長方形？ N—19°—E（西）	4.7×3.6？ 55	16.9？			○ （一部）	？	？	北壁を確認。床面をC軽純層が埋める。焼土範囲が北壁寄りに検出された。	172→P 25→173 →W—15
173	長方形 N—20°—E（西）	3.4×2.5 40	8.5	東壁南寄	・50 ？	○ （一部）	×	？	貯蔵穴はカマド右側，南東隅と推定される。	172→P 25→ 173→174 →W—10
174	長方形？ N—29°—E（西）	？ 20	？	？	？	○ （一部）	？	？	北コーナーのみ確認。	173→174
175	？ ？	？ ？	？	（痕） 東壁南寄 ？	？	？	？	○ (1)	カマド跡と思われる焼土，堅牢な床面と貯蔵穴の存在（カマド右側）とによって住居として認定。	167→ 168→175→W—16
176	長方形？ N—28°—E（東）	4.7？×4.1 （以内） 65	19.3？	？	？	×	×	×	西壁をW—2に切られている。ピット12はH—176が半分程埋ってから掘られたもの。	176→W—2 →P 12
177	不整方形 N—8°—E（西）	4×3.7 55	14.8	東壁中央 ？	・？	○ （一部）	○ (3)？	？	南壁立ち上がり不明確。東に広がる台形状を呈する。	177→180 →181
178	方形 N—16°—W（西）	4.65×4.55？ 70	21.2？	（痕）北壁 西寄？	？	○ （一部）	○ (2)	○ (1)	カマドはW—15に切られているが，焼土範囲から推定。貯蔵穴はカマド左側。	179→178→W—15

住居番号	形状 壁走向	規模（m） （長壁×短壁） 壁高（cm）	床面積（㎡）	かまど 位置	かまど つくり幅（cm）	周溝	柱穴	貯蔵穴	備考 （数字の単位はcm）	重複関係
179	? N—15°—E（西）	3.9?×? 65	?	?	?	?	?	?	北西コーナーと東壁の一部を確認。	179→178→W—10 →W—15
180	? N—18°—E（東）	? 25	?	東壁中央 ?	・?	?	×	○ (1)	貯蔵穴はカマド右側。壁立ち上がりほとんどなし。形状規模等は不明。	177→180 →181
181	長方形 ? N—25°—W（東）	2.7×? 35	?	東壁中央 ?	・?	?	?	?	カマドを井戸に切られている。	177→180 →181→井戸

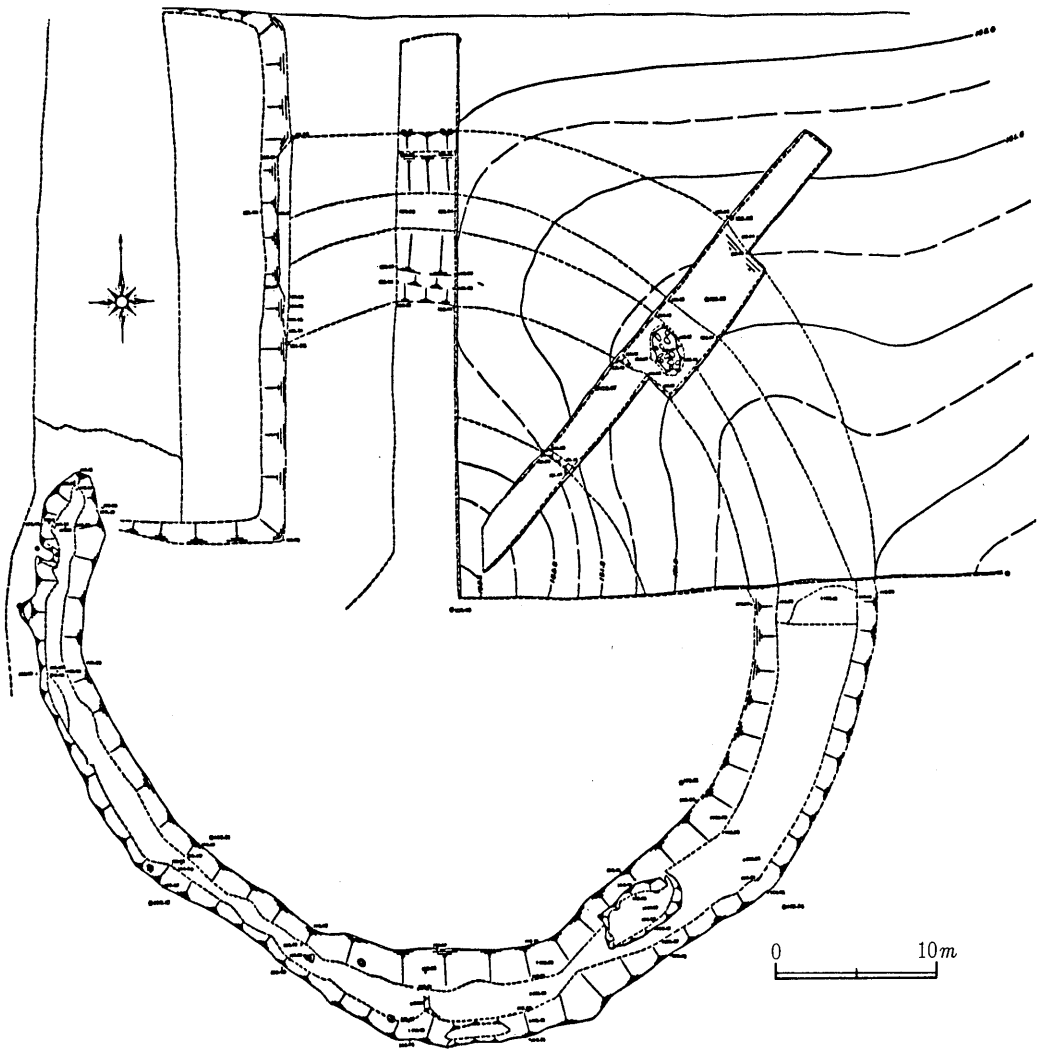
○住居の壁走向は南北線を基準とした。　○壁高は遺構確認面からの最深値を計測した。
○規模は壁の下端を計測した。　○かまどの幅は袖部の内径を計測した

小　結

弥生式土器を伴う住居はC区に13軒，D区南丘陵裾野部分に15軒集中して検出された。この2つの分布の前後関係はいくつかの住居を除いてはD区の住居が若干後出するものと推定される。C区の住居の面積が14㎡～20㎡前後におさまるのに対してD区の住居は20㎡以上のものが約半数と多く柱穴もしっかりした住居が多い。また，火災住居が多く，28軒中6軒が床面に多量の炭化物を堆積させていた。後出の古墳時代の住居が108軒中3軒ということから見ればかなりの被災率であると言えよう。古墳時代の住居はD区，G区，F区にかけて西斜面を除いたほとんど丘陵全域にわたる108軒を検出した。この時期の住居の特徴としては後出の奈良，平安時代の住居のほとんどが東壁に竈を設置している（35例中1例だけ南壁竈）のに対して東壁竈60%，北壁竈21.5%，西壁竈15.9%とまちまちであること，竈の構造については壁面を凸形に掘り込み，袖部に長胴甕を使ったり（29例），白色粘土等で固めたり（42例）して，丁寧に構築していることなどが挙げられる。又，貯蔵穴が竈の左側に在るものは14例あるがいずれもこの時期の住居である。他に手に握るのに丁度良い形，大きさの長形の河原石が住居内の1ヵ所に集中して出土したものが6例あった。奈良時代後半から平安時代にかけての住居はD区東斜面，G区，F区に全部で40軒検出された。このうち13軒が石組みの竈を持ち，竈が壊されてその形態の不明の9軒を除けば40%強の割合となる。

4. 古墳

(1) 第62号墳（上毛古墳綜覧荒砥村第62号墳）



挿図31 第62号墳墳丘実測図

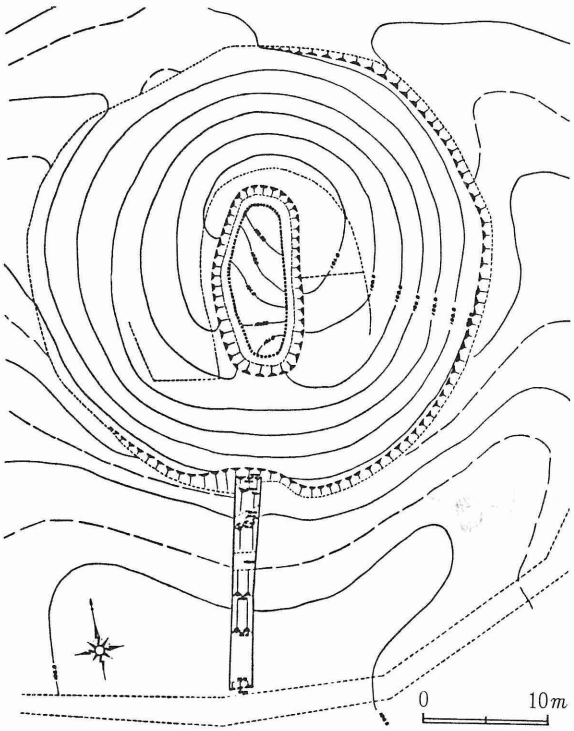
本古墳は，第64号墳の南約100m程の所に位置し，北東4半分の墳丘と墳丘西側の周堀断面とによって以前から確認されていた。周囲は桑畑として耕作されており，残っていた4半分の墳丘も相当にかく乱を受けていた。発掘調査の結果，二ツ岳軽石を含む黒色土層の上に黒色土を主体とする混土とロームブロックを主体とする混土の互層で盛土して構築されている事が分った。周堀は北から南へかけての東側半周が広く深く掘られ，南から西へかけて狭く浅くなっており，断面は平らな鍋底状を呈している。北西4半分は土取りのため地山から削り取られて確認できなかったが，一周していたものと思われる。周堀外周規模は東西で52m，南北で56.5m。墳丘は上毛古墳綜覧には大サ132尺，高サ13尺とあるが，地層断面から直径約24mと推定される。周堀幅及び深さは北側で12.8mと80cm。東側で11.9mと95cm。主体部は既に完全に破壊されており，石室に使用されたもの

と思われる大きな石が1石残っていたのみであった。周堀北東部の埋土上部に人頭大以上の大きさの河原石が十数個まとまって廃棄されていたが，直接この古墳と結び付くかどうかは不明で，墳丘盛土上には葺石は特に認められなかった。埴輪は周堀から破片が出土したのみである。大正用水以北で乾谷沼を望む台地上には，今回調査した本古墳及び第64号墳，C区の北50m程の所にある石室の一部を露出している円墳，昭和54年度調査において発掘調査された第68号墳，第70号墳，第72号墳などがある。

図版21　第62号墳　墳丘及び周堀

墳丘地層断面

(2) 第64号墳（上毛古墳綜覧荒砥村第64号墳）



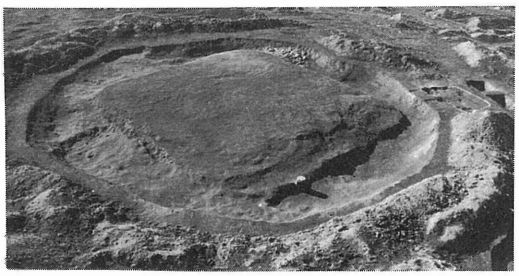
挿図32　第64号墳墳丘実測図

本古墳は，南に乾谷沼を望む台地上に在り，南に緩く下る斜面に構築されている。墳頂付近は松と篠が生えており，回りを削土されている。墳丘の傾斜は急で円周は桑畑となっている。上毛古墳綜覧には大サ132尺，高サ18尺とあり，周堀は南側1カ所のみのトレンチによる調査であるため一周するかどうかは確認できなかったが，規模は古墳の想定中心点から周堀外周まで約28m，幅は10.5m～11m，深さは墳丘際直下で155cm～165cmと深く掘られ，底は平らで南に行くに従って浅くなっている。墳丘及び主体部については，今回未調査のため詳細は不明であるが，現状で径約36mの墳丘規模を持つ。葺石は特に認められなかった。埴輪は周堀から破片が出土したのみである。

5. 周 溝 墓

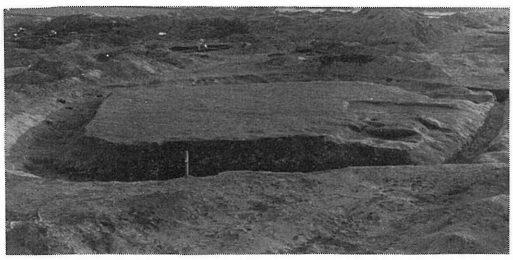
周　溝　墓　一　覧　表

番号	規模 径(m)	規模 周溝幅(m)	渡り 方向	渡り 幅(m)	
1号	南北 7.8 東西 8.2	上幅0.9～1.3 (下幅0.3～0.7)			F区北端に位置し，北周溝の一部をH—85に切られる方形の周溝墓。周溝は鍋底状を呈し，深さは遺構確認面から約30～45cm。周溝より土器破片が少量出土。
2号	14～15	1.3～3.6 (0.4～3)			周溝外周は円形で，内周は隅丸方形を呈する。周溝は鍋底状を呈し，深さは約45～80cm。周溝南半部より遺物出土。（挿図33—1，2，3，4，5，6）
3号	南北 14 東西 13.5	1.5～3 (0.7～2)			南周溝の一部をH—91に切られる方形の周溝墓。周溝は東辺，南辺が逆台形を呈し，深さ約65～70cmと深く掘削されていた。北辺，西辺は鍋底状で約85～105cmと深く掘削されていた。周溝より土器破片を出土。南へ約5°で下る斜面に構築。
4号	南北 13.2 東西 11.9	1～1.7 (0.6～1.1)			北辺に対して南辺が長く，南方に向かってやや広がった不整方形の周溝墓。周溝は逆台形を呈し，底部は平らに掘削されている。深さ約60～70cm。北側周溝東寄り底部から遺物出土。（挿図33—7，8，9）南へ約7°で下る斜面に構築。
5号	南北 17.8 東西 17.2?	25～4 (0.6～1.8)	S—86°—W	3.4	今回調査した周溝墓の中では最大規模の方形の周溝墓。周溝は鍋底状を呈し，深さは約70～80cm。南に下る傾斜のため南側周溝はなだらかに広がっている。西側周溝をW—2，W—17に，東側周溝をW—14にそれぞれ切られている。周溝より土器破片を出土。
6号	南北 11.6 東西 10.5	1～1.6 (0.3～0.9)	S—15°—W	2.2	円形の周溝墓。周溝の底部は比較的平らで深さは約35～55cm。出土遺物はなかった。
7号	南北 9.7 東西 10.3	0.8～1.6 (0.4～1)	N—80°—W	1.9～2	内側の周溝は直径約10mの円周を描く。外側の周溝は南東隅をH—129に切られているが「U」字型を呈し，遺構平面からはこの部分が円周溝に掘りたされた如くに見えるが，新旧を判断する積極的な資料は得られなかった。周溝はいずれも浅く，15～33cm。方形周溝部分の南東隅より遺物出土（挿図33—11）
8号	南北 11.7 東西 11	1～2.2 (0.4～0.8)	S—74°—W	2.4	円形の周溝墓。周溝は鍋底状で深さ約40～65cm。北側周溝を東流するW—18に切られる。出土遺物はなかった。

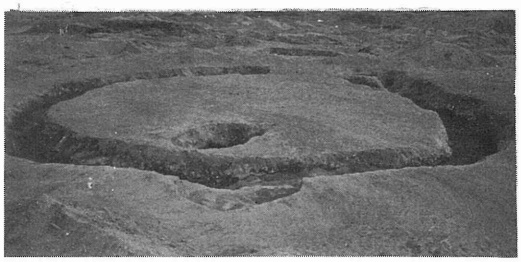


2号周溝墓遺構全景

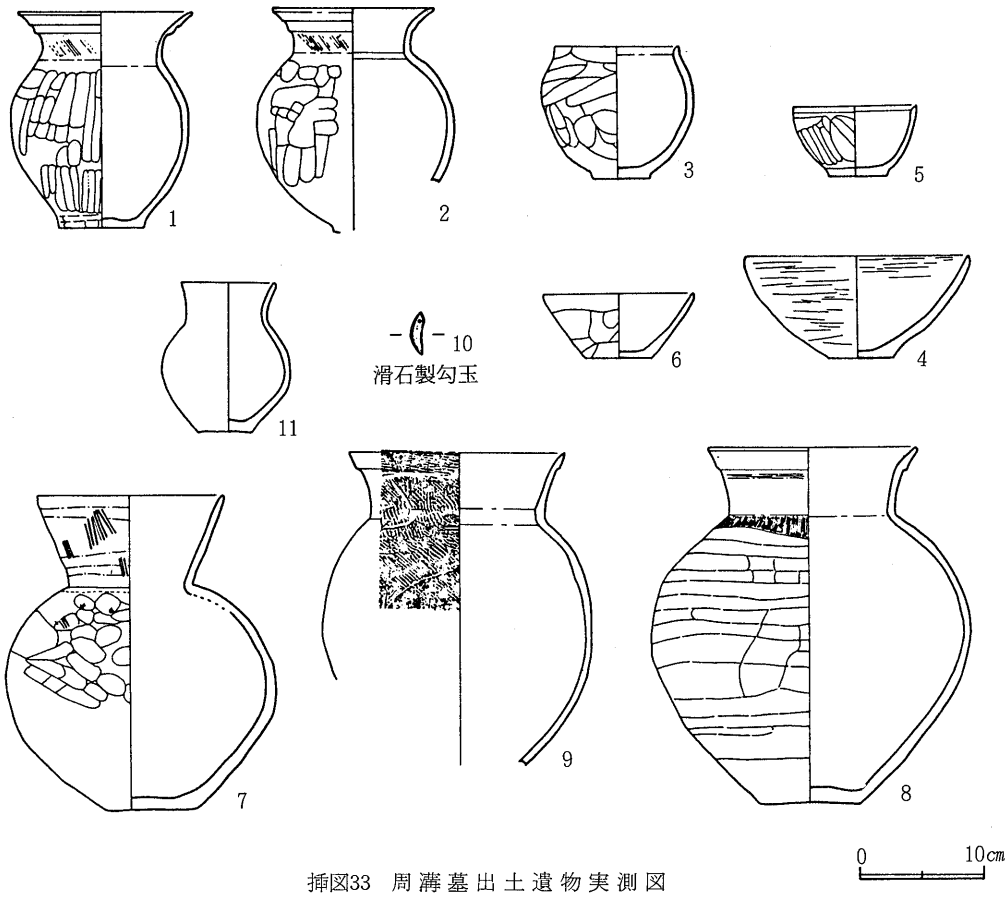
4号周溝墓遺物出土状況



図版22　5号周溝墓遺構全景



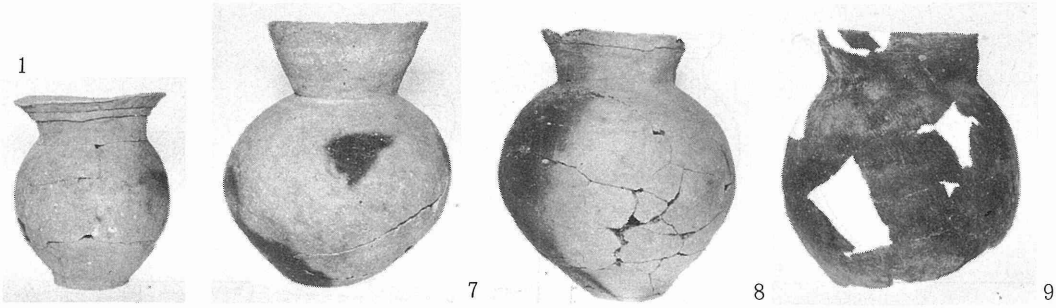
6号周溝墓遺構全景



挿図33　周溝墓出土遺物実測図

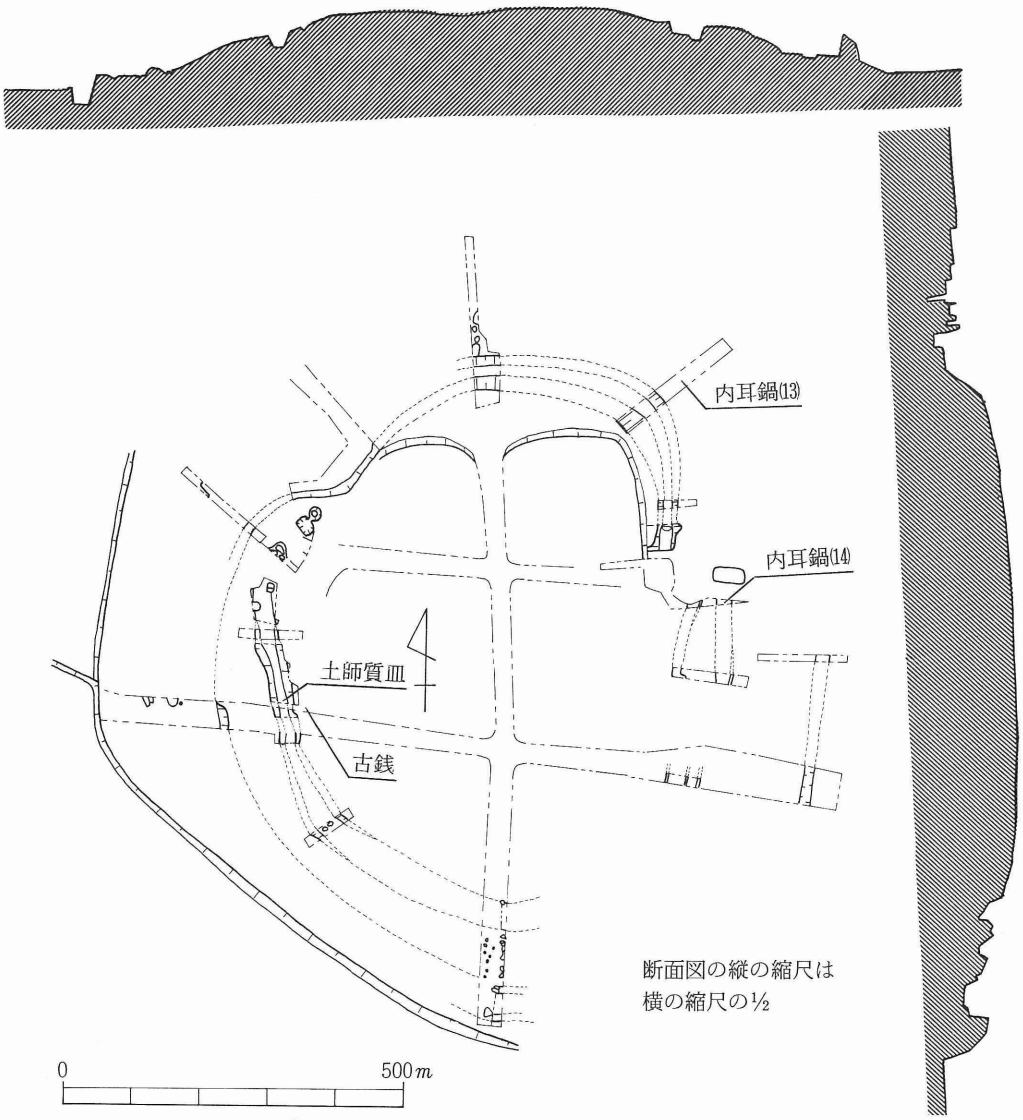
周溝墓出土遺物一覧表

番号	器種	法量（cm）	技法等	胎土	備考
1	小型甕	口径 13.2 底径 6.7 器高 17.3	口縁部粘土紐巻上後横ナデ，頸部ヘラ状工具の木口面を使った調整後ナデ，胴部底部同様に調整後荒いヘラ研磨（底部はヘラ削り），内面ヘラ状工具の木口面を使った調整，胴底部接合削り	若干の石英，小石含有	色調淡茶褐色，胴部一部黒斑有り，焼成良好，95％残，口縁部２段巻上，底部作り出し，全体に丁寧な作り，２号周溝墓
4	鉢	口径 17.9 底径 5.0 器高 8.2	体部全面に丁寧なヘラ研磨，光沢有り，内面もヘラ研磨か（器面が剝離し不明瞭）	多量の小石，砂粒含有	色調橙褐色，口唇付近若干黒ずむ，焼成良好，２号周溝墓周溝中出土
7	壺	口径 14.5 底径 6.3 器高 25.1	口縁部横ナデ，頸部上，中半にハケ目後荒いヘラ研磨で部分的にすり消す状態を呈す，下半ヘラ研磨，底部ヘラ研磨，内面口縁～頸部，粗いヘラ研磨，胴上半部分的にハケ目の痕跡残る	多量の小石，砂粒含有	色調淡褐色，底部付近黒斑及び茶褐色呈する 焼成良好，完形，器面が全体に荒れる ４号周溝墓周溝中出土
8	壺	口径 15.6 底径 8.0 器高 28.3	頸部～肩部にかけて木口状工具による細かい縦方向調整，胴部上半同様な工具で横方向の調整後，粗い研磨，胴部下半縦方向の調整後研磨，内面全体に木口状工具による調整，頸部は後研磨	多量の砂粒，石英含有	折り返し口縁，色調赤褐色，胴半分黒色，焼成良好，完形 ４号周溝墓周溝中出土
9	壺	口径 16.2	折り返し口縁部頸部胴部上半ハケ目，下半ハケ目後ヘラ研磨，内面口縁部ハケ目，他はヘラ研磨	石英及び小粒子含有	色調黒赤褐色，内面下半分炭化物の付着か黒色呈す，焼成良好，70％残，４号周溝墓周溝中出土



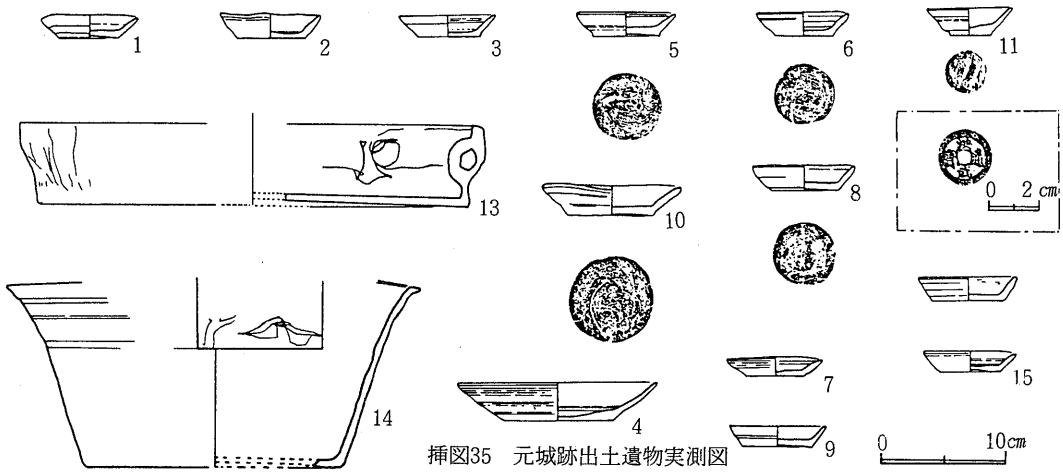
図版23　周溝墓出土遺物

6. 元　城　跡



挿図34

乾谷の谷東丘陵末端部に位置する大室元城跡は，単郭の城跡として，明治末年まで遺構が保存されていたと言われるが，地山の赤城起源の安山岩が石材としてぬかれ，相当削平されて，南側で水田との比高5m，北側畑との比高1.6mのやや南北に長い楕円の丘で桑畑になっていた。トレンチ調査の結果，丘陵の南北および東西で90m前後の距離を置いて丘陵の外に向かう落ち込み，または掘り込みが検出され，この丘陵をほぼ円形に断続して囲んでいることが把握された。特に北西隅の落ち込みは八崎層を切り込んで内弯し西側へ15mほど張り出してテラス状の地形を形成している。このテラスの北端部は井戸と長方形ピット，さらに南に巾がほぼ1.2mで平底の堀が張り出しに平行し丘陵南側まで続くと想定される。この堀中西側から土師質皿が完形で11個，またその付近表土中から洪武通寶1枚が出土した。内弯部落ち込みは，丘陵北側で幅3m程の平底の堀に続き丘陵最高地点の北東部でほぼ直角に曲がり，南へ12m程の地点で終る。この北東部の堀より外側の方形ピット内から平底内耳鍋断片出土。丘陵東側では，南側の二重の堀に続くと想定される堀が一部検出されたが，北東部との段差が大きいことと調査以前の削平によりはっきりしたことはつかめなかっ



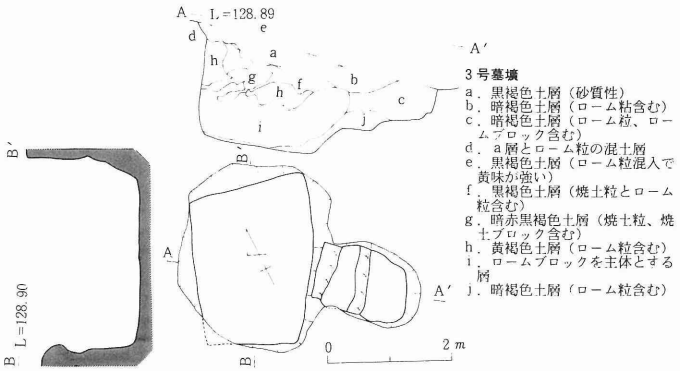
挿図35　元城跡出土遺物実測図

元城跡出土遺物一覧表

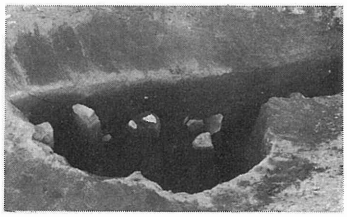
番号	器種	法量（cm）	技法等	胎土	備考
1	土師質皿	口径 7.8 底径 4.7 器高 1.9	外面ロクロ回転ナデ 底部回転糸切り	金雲母含有 器面ザラつく	色調赤茶色，焼成良好，全体が軽い，完形
4	土師質皿	口径 15.9 底径 8.7 器高 3.0	外面ロクロ回転ナデ 底部糸切り後あらいナデ 内面整形後ハケ状工具によるナデ	砂粒含有，器面ザラつく	色調桃褐色，底部の一部にスス付着，焼成良好，50%残
6	土師質皿	口径 7.4 底径 4.9 器高 1.9	外面ロクロ回転ナデ痕跡残る， 底部回転糸切り	若干の金雲母，長石含有	色調赤茶色，焼成良好，完形
8	土師質皿	口径 8.3 底径 5.0 器高 2.0	外面ロクロ回転ナデ 底部回転糸切り	若干の金雲母，長石含有	赤茶色，全面に斑点状にスス付着，焼成良好，70%残
10	土師質皿	口径 11.1 底径 6.9 器高 2.5	外面ロクロ回転ナデ 底部回転糸切り	微砂粒子，含有	黄茶色，焼成良好，60%残 歪み有，全体に雑な作り
13	内耳鍋	口径 36.5 底径 34.1 器高 6.5	外面回転ナデ後体部下半回転ヘラ削り，指頭圧痕有，内面回転ナデ後内耳貼付	若干の砂粒含有，均質	外面スス付着し紫黒褐色，内面底部白褐色，焼成良好，内耳40%残中17cm間隔2コ
14	内耳鍋	口径 32.6 底径 20.6 器高 15.0	外面回転ナデ 特に口唇部は丁寧，他は凹凸が目立つ，内面回転ナデ後内耳貼付	多量の砂粒小石含有	外面黒茶褐色，内面茶褐色，焼成不良，底部剝離大，40%残，内面に明瞭な稜線が残り，内耳がその上に貼付され，1コ残存

7. その他の遺構

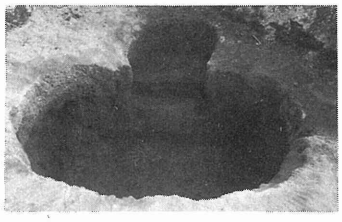
(1) 墓　　壙



図版24



3号墓壙地層断面

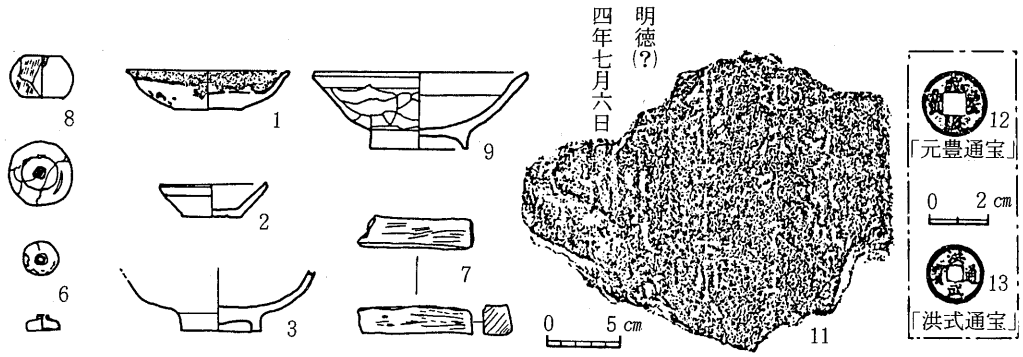


3号墓壙遺構全景

挿図36

墓　壙　一　覧　表

番号	埋葬形態	形　状	規　模 (　)内は深さcm	
1号	火　葬	隅丸方形	295×290 (160)	入口部を東側北寄りに持つ単室構造の墓壙で，東壁はかく乱が激しく，入口部の構造もはっきりしないが，主室への入口部分床面が凸状に掘り残されており間仕切りを意図しているようである。天井部は崩落しており，その崩落した土層の上層から地，水輪，青磁皿（挿図37—3）出土。床面中央部には焼土（100×90cm，厚さ約10cm）の堆積があり床面からは灰釉の皿，砥石（挿図37—1，7）が出土。床面から30cm程の所から頭骨が出ているがこの墓壙に直接関係するものかどうか（追葬の可能性も含めて）判断し難い。
2号	直葬？	方　形	215×210 (185)	入口部を南側に持つ単室構造の墓壙。入口部をまず円形に60cm(径1.9m)程掘り下げ，更に幅70cm程の竪穴を掘り，横に主室を掘り広げたもので床面は南東隅を除いてはほぼ直角に掘り込んである。主室の天井部は崩落していたが，壁面が上に行くにしたがって内傾していることからドーム状だったと思われる。伴出遺物がないため明確な時期は不明であるが，入口部と交差するW—10とそれを切り込むW—15の上部の埋土が墓壙を掘った際の排土であることからこれらの溝がある程度埋まった頃に構築されたものと思われる。
3号	直葬？	不整方形	270×190 (180)	階段状の入口部を南東側に持つ単室構造の墓壙。床面は特に踏み固められているといったようなことはなく，壁面はほぼ真直ぐに掘り下げられている。墓壙を埋めている土は床面から5cm程の間層をはさんでほとんど天井部の崩落したもので，この土層の上面から風輪（部分）板碑，銭（挿図37—11，12）等を出土。
4号	直葬？	隅丸方形	295×275 (240)	入口部を南東部に持つ単室構造の墓壙。主室への入口部分は西側3分の2程の所まで高さ5cmの凸状掘り残しがあり，間仕切りを意図しているようである。入口部床面は主室床面より35cm程高くなっていて共に平らに掘ってある。主室西隅の方に黒褐色の粘質土が検出されたが，性格は不明。壁面はほぼ真直ぐに掘り下げられている。墓壙埋土はほとんど天井部の崩れたもので，その上層から銭（挿図37—13）を出土。



挿図37 墓 壙 出 土 遺 物 実 測 図

墓 壙 出 土 遺 物 一 覧 表

番号	器 種	法量（cm）	技 法 等	胎 土	備 考
1	灰釉陶器 皿	口径 13.2 底径 6.8 器高 2.7	外，内面丁寧なロクロ回転ナデ，底部回転糸切り未調整 施釉はツケガケ	若干の小石含有 均質	色調施釉部分淡緑色，他は淡褐色，焼成良好，完形，1号墓壙出土
2	土師質 皿(灯明皿)	口径 7.6 底径 4.0 器高 2.1	外面ロクロ回転ナデ，底部糸切り後あらいナデ，内面ロクロ回転ナデ	若干の小粒子，石英含有	色調淡茶褐色，口唇部7ケ所スス付着，焼成良好，完形，1号墓壙出土
3	青磁 高台 塊	底径 5.4	カサネヤキの痕跡底部に残る 施釉は接地面 高台の内側，底部を除き全面	白色及び淡褐色粒子含有	1号墓壙出土

(2) ピ ッ ト

ピットと命名したものは25個検出された。ピット1はC区最北端に位置し，1.5m×1.2mのやや長円形のプランを持ち，上部がやや開き気味で掘り方は円筒状をしている。床面は平坦で樽系土器の破片が付着していた。C区で検出された住居と同じ時期のものと思われる。F区ピット10，11は長方形で2.2～2.5m×1～1.05m深さ約50cmの規模を持ち，長軸をほぼ南北にして平行して掘られていた。出土遺物はなかったが形態的には墓壙か。D区溝状遺構No.5南側とG区南半部に柱穴と思われるピット群を検出したが，G区南端部に掘立柱建物跡1軒を確認したのみに留まりまとまった遺構とはならなかった。

(3) 溝状遺構

C区に1条，D区に17条，F区に1条，G区に2条，計21条の溝状遺構を検出した。No.1はC区の住居（4号，13号）が完全に埋まりきってから掘られたもので乾谷沼へ向かって一直線に南流している。No.2はD区の北丘陵から南丘陵を縦断している長大なもので，場所によって異なるが大体において幅約2m，深さ約70～90cmで掘り方もしっかりしており断面は逆台形を呈する。この溝状遺構を境に東側に5本（No.4，5，12，13，18）がほぼ平行に斜面を走っている。南丘陵頂上部付近に特に水源が認められないこと，重複した住居はすべて切っていること，ほとんど水の流れた形跡がないことなどから区画のための堀ではないかとも思われる。特にNo.15は南北約85mで直角に曲がり，その内側に墓壙が集中して検出されていることからもその可能性が強い。（ただし墓壙の排土で一部堀を埋めている）G区No.9も前出ピット群を包み込んだ形で南流している。

(4) 掘立柱建物跡

本掘立柱建物跡はG区最南端に位置するが，遺構の東側が調査区域外にあたるため，その全容は

確認することができなかった。しかし，少なくとも東西２間（3.2m）南北２間（3.2m）以上の建物跡であろうと推定できる。柱穴は８個でローム層を掘り込んで作られ，径は0.5～0.6m，深さは確認面から0.5～0.7m，各柱穴の間隔は東西南北ほぼ1.6mを計測した。また南北の柱穴を結ぶと一直線になり，しかも互いに平行であり，その方向は磁北から西へ4°傾いている。尚，この掘立柱建物跡の時期については，他の住居跡や遺構との切り合い関係がないこと，柱穴からの出土遺物がないこと，柱穴を埋めている土に時代を判定する示標層がないこと等から，明らかではない。

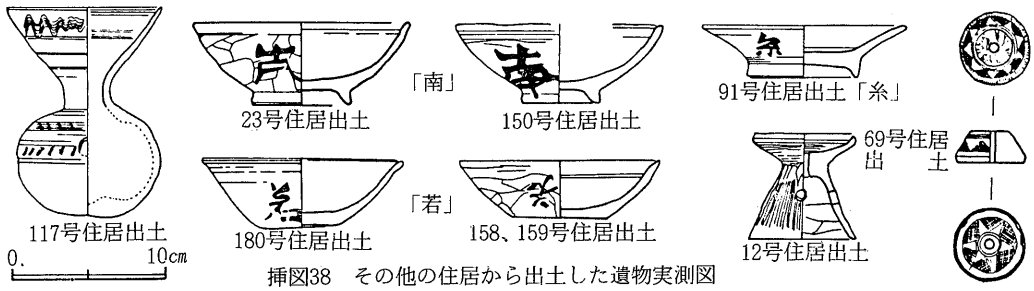
(5) 小鍛冶遺構（T－1，T－2，T－3）

T－1は，D区北丘陵東南斜面中腹に位置する38号住居（古墳後期）に，ほぼ４m×2.4mの範囲で乗っている状態で検出された。ピット状に住居床面より深い部分もあり，摺鉢状に鉄滓，フイゴ羽口断片，石，土師器坏，須恵器坏の流れ込みが検出でき，９世紀後半から10世紀と考えられる。

T－2は，D区北丘陵頂上付近西南斜面に位置する49号住居（古墳後期）の南壁上部から，住居内にかけて径７m程の範囲で乗った状態で，住居の中心部より北西に及ぶあたりは，床面より深い窪みになり，北西部が急斜面となる摺鉢状に検出された。窪み内は更に，３個のピットがあり，その１は住居中央部にあり，底部が40cm×80cmの東西に長い隅丸長方形で，床面から70cmの深さを持ち，上部では大ぶり，底近くでは小ぶりの安山岩が，周壁に刺さるように流れ込み，中から粘性のある黒色土土中に，鉄滓，炭化物，フイゴ羽口断片が検出された。その２は，窪みの北西寄りにあり，径30cmの摺鉢状で，上層が青灰色，深部が朱色に焼けた20cm程の厚さの粘土層を持つ。住居南壁からの斜面から，窪みを埋めている粘性のある黒色土中にかけ，多量の鉄滓，フイゴ羽口数個分，炭化物，10世紀後半から11世紀初頭と考えられる土器片が検出された。T－3は，F区南斜面頂上付近に位置する91号住居（10世紀後半から11世紀）に，径２mの範囲で乗り，住居西南壁寄りでピット状に床面より深い部分もあり，多量の鉄滓，フイゴ羽口断片，土器片が出土している。

(6) 井戸跡

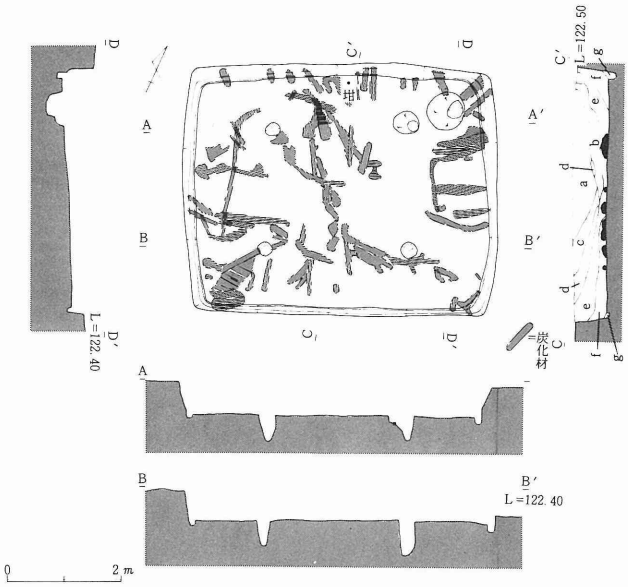
D区南丘陵南斜面裾野部分，181号住居竈を一部切って掘られている。平面形はほぼ円形で1.9m×1.5m。掘り方は上部がラッパ状に広がって，下に行く程ややすぼまる円筒状を呈している。深さは遺構確認面から2.2mの所で調査を断念しているために不明であるが，更に深く掘れる。ローム層を掘り抜いた壁面はしっかりしていた。出土遺物はなかった。



挿図38　その他の住居から出土した遺物実測図

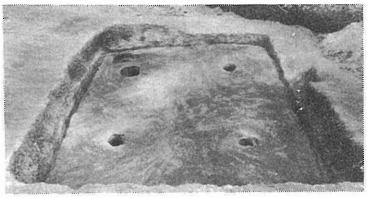
8. 梅の木地区

梅の木地区８号住居跡遺構図



（８号住居跡土層）

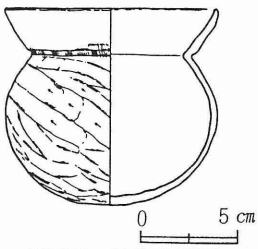
a　暗褐色土層，砂質で軟かく径５㎜大のＦＰを含む。
b　黒色土層，砂質であるがａ層より締りがあり，ＦＰと小礫を含む。
c　暗褐色土層，砂質で，ａ・ｂ層に較べて軽石はわずかであり軟かい。
d　淡灰褐色土層，砂質で極細粒子，径２～３㎜大の小礫を含む。
e　暗褐色土層，砂質で軟かく，径２㎝大の礫と凝灰質砂岩（橙色）のブロックを含む。
f　黒褐色土層，砂質であるがｅ層よりしまりがあり，凝灰質砂岩のブロックを含む。



上　８号住居跡炭化物出土状態
左　８号住居跡全景　　図版25

図版25

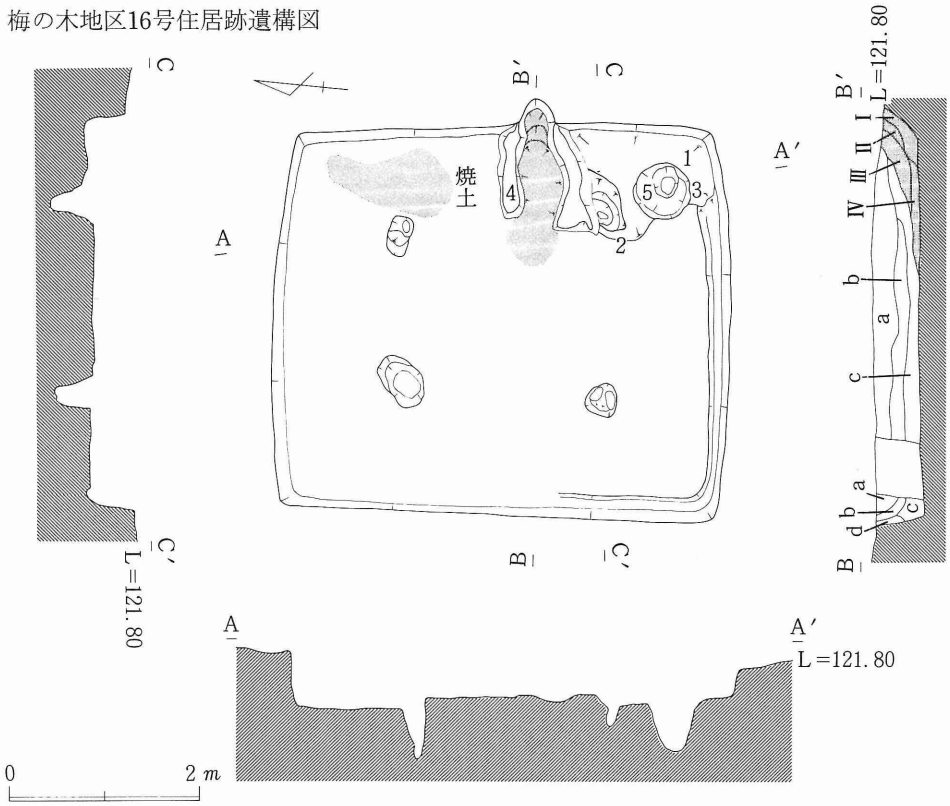
挿図39



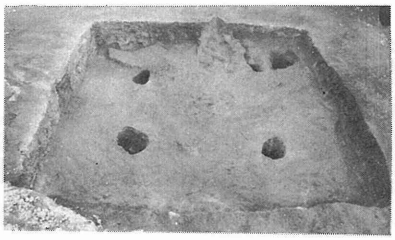
挿図40　遺物実測図

Ｂ区北端の沖積層に深く掘りこまれている住居群中に属する本住居は，火災住居としての特色をもつ。規模は5.2×4.1ｍと東西に長く，西壁の走方向はＮ―25°―Ｗを示す。床面までの深さは58㎝と深く，壁面の切りこみは直に落ちている。壁下にはしっかりとした周溝が巡っている。施設は，東隅に径70㎝・深さ47㎝内外の貯蔵穴がある。柱穴は４本とも対角線上にのり，深さ80～100㎝・径20～30㎝をはかる。かまどは見当らず，炉跡と思われる焼土が住居中央から北東柱穴寄りに，長さ30㎝・幅10㎝の川原石を伴って検出された。遺物は貯蔵穴内から甕，北壁下中央より坩，その他，高坏の脚部・台付甕の脚部の破片（形が確認可能な）が出土した。本住居は，火災住居にしては非常に土器出土量が少なく，完形に近いものは坩のみである。

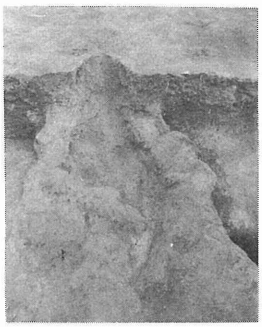
梅の木地区16号住居跡遺構図



挿図41



上　16号住居跡全景

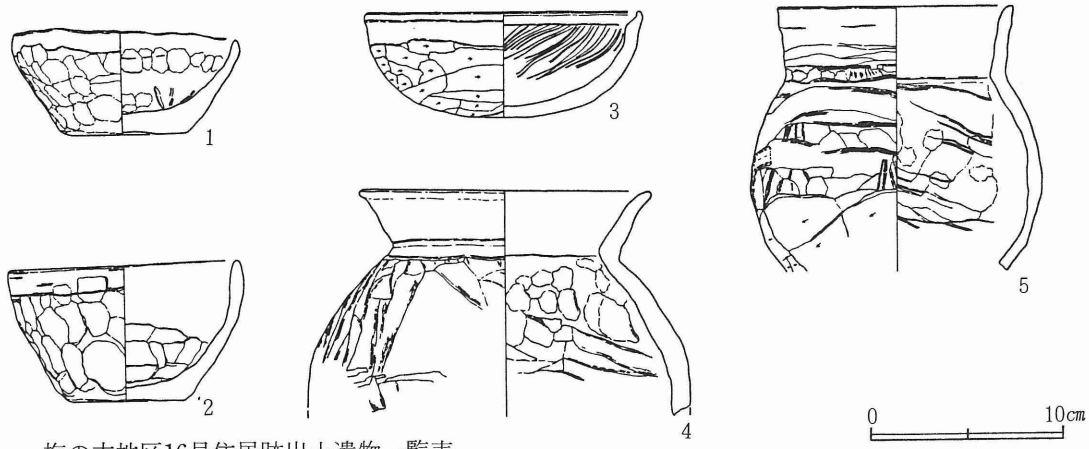


右　カマド拡大

図版26

B区中の南端部群に属する本住居は，桂川の氾濫による水性堆積砂礫層中に形成されている。規模は4.5×4.0mと南北に長く，西壁の走方向はN—5°—Wとほぼ磁北に近い。住居の掘りこみは51cmと割合深いが，床は南から北へ約15cmの差で傾斜している。床面は南壁付近では粘土質で締っているが，北壁に向うにしたがい砂礫質となり軟かい。壁は砂礫層で脆いが，壁下には南壁から西壁の$\frac{1}{3}$にかけて周溝が認められる。施設は，東壁中央わずか南寄りに住居内へ大きく張り出したかまどを設置している。焚口幅40cm・奥行130cmを超す長大なもので，わずかに壁を掘って煙出しとして低くだらっとした粘土袖をもつ。煙道部はかなり焼けており，使用頻度の高さを示している。かまど右側には，径50cm・深さ50cmの貯蔵穴があけられている。4本主柱穴は対角線上にあり，対角線の交点を中心として描いた円周上にものっている。柱穴の深さ40～50cm・径20～30cmである。東南の主柱穴はかまどの右袖の粘土に上をふさがれたような状態で検出された。遺物はかまど及び貯蔵穴周辺に甕・坏が出土し，北東隅部には焼土が確認された。特に本住居は，甕の破片（口縁部及び胴部片）の出土量が本遺跡地の中でも最高である。

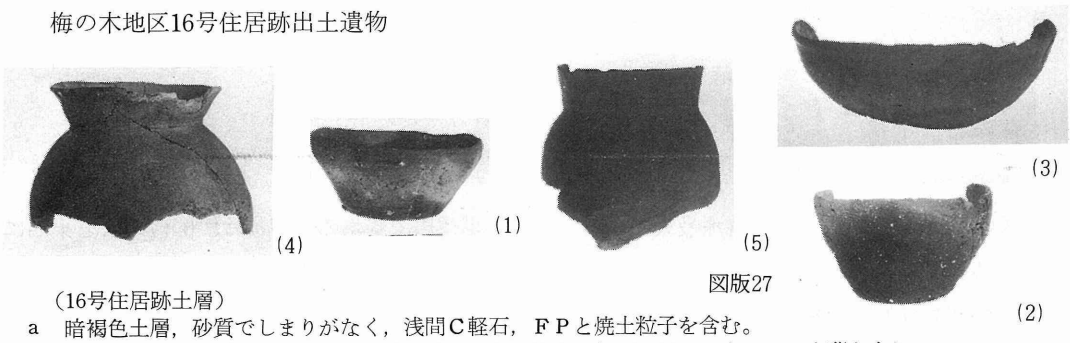
梅の木地区16号住居跡出土遺物実測図



梅の木地区16号住居跡出土遺物一覧表

遺物番号(写真番号)	器種	法量(cm)	成・整形の特徴	胎土	備考
1 (1)	坏	口径 11.3 底径 6.6 器高 5.4	・厚い平底が形成された，小型の手捏状土器。 ・口縁部横ナデ。体部外面指ナデ。体部内面ナデ，指頭圧痕，ヘラ痕が認められる。底部摩耗。	細礫・粗粒砂を多量に含有。	底部および内面は暗褐色。体部外面に淡い黄褐色。焼きの脆い土器。
2 (2)	坏	口径 11.1 底径 6.0 器高 7.1	・1に比較してやや深い手捏状土器。 ・口縁部横ナデ。体部外面指ナデ。体部内面ナデ，指頭圧痕，ヘラ痕が認められる。	細礫・極粗粒砂を多量に含有。	淡い暗褐色，茶褐色の焼きの脆い土器。
3 (3)	坏	口径 14.0 (推定) 器高 5.5	・口唇部はやや内彎し，玉縁状を形成する。 ・口縁部横ナデ，土器を手で持ち徐々に左方向に回しながら，底部右方向ヘラ削り。内面はナデの後，右斜め上にヘラ磨き。	粗粒砂・中粒砂を多量に含有。	暗茶褐色をおび，底部中央付近に黒斑が認められる。焼きは良好。
4 (4)	甕	口径 14.8 現高 11.8	・やや受け口状に広がり，口唇部付近でゆるやかに外反する口縁。 ・口縁部横ナデ，胴部外面縦ハケ。部分的に横ヘラ磨き。胴部内面指頭圧痕，指ナデ顕著。	少量の中礫・細礫多量の極粗粒砂・粗粒砂を含有。	明褐色を主とし，部分的に灰黒色を帯びる。二次焼成痕を認める。
5 (5)	小型甕	口径 12.0 (推定) 現高 13.9	・直立口縁，球形胴に近い形態の土器。 ・口縁部横ナデ，胴上半部外面縦ハケナデ後横および斜ハケ目。胴下半部外面左斜下方へのヘラ削り。胴部内面指頭痕および指ナデ顕著。	粗粒砂・中粒砂を多量に含有。	暗褐色をおび，胴部には黒斑が認められる。

梅の木地区16号住居跡出土遺物



図版27

(16号住居跡土層)

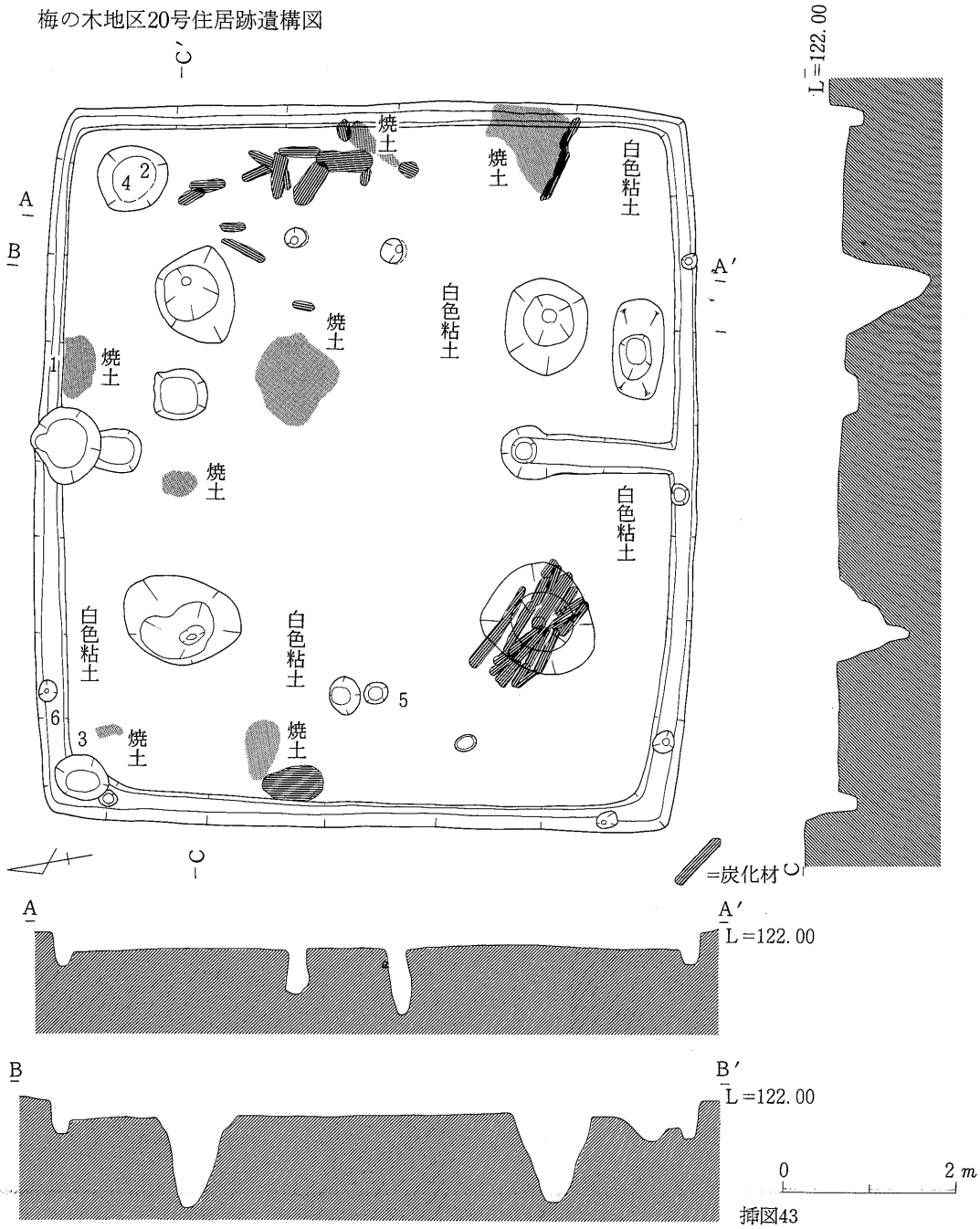
a　暗褐色土層，砂質でしまりがなく，浅間C軽石，FPと焼土粒子を含む。

b　黒褐色土層，砂質だがわずかに粘性も感じられ，浅間C軽石，FPを含みまた小礫も含む。

c　黒褐色土層，砂質で灰色の砂質土がブロック状に混入し，浅間C軽石，FPと焼土粒を含む。

d　暗灰色土層，砂質であるがわずかに粘性も感じられる。

梅の木地区20号住居跡遺構図



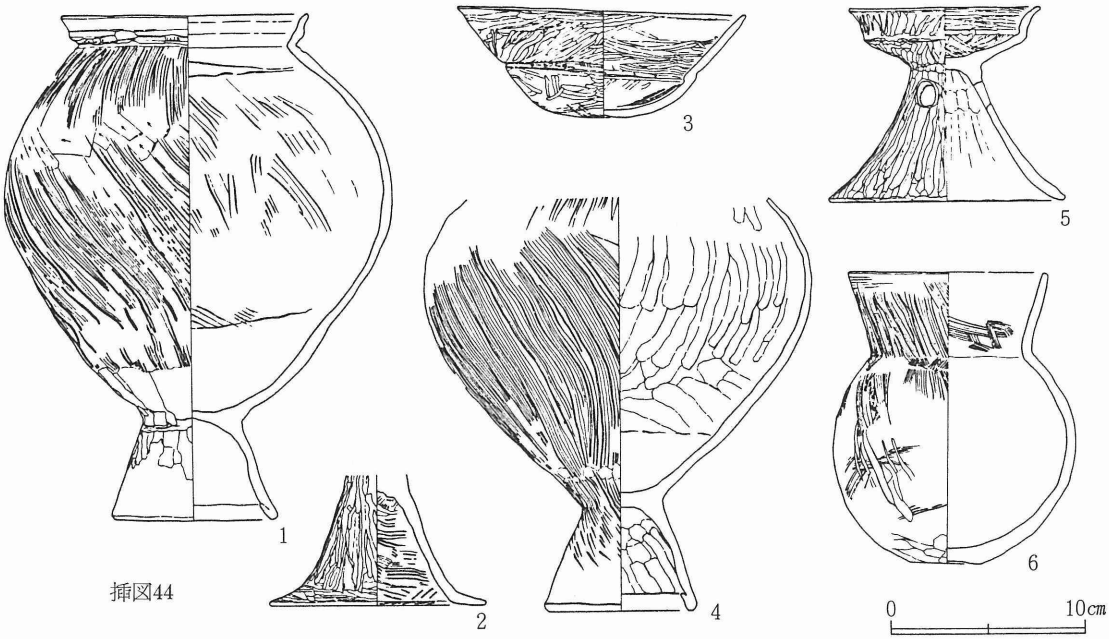
挿図43

C区の北端に位置し，本遺跡地最大の住居であり火災住居でもある。規模は8.0×7.3mと東西に長く，壁高は39cm内外で西壁の走方向はN—12°—Eを示す。床面は住居中央部が堅く締って粘土を貼った形跡がある。施設は貯蔵穴が北東隅と北西隅にあり，北東貯蔵穴は径80cm深さ75cm，北西貯蔵穴は径50cm深さ45cmで周溝を切っている。住居の周囲には，幅30cm深さ26cm内外の幅広の整った周溝が巡っている。南側周溝内には3個の小ピットがほとんど等間隔に存在し，西側周溝内北西・南西隅に2個の小ピット，北側周溝内北西隅近くに1個の小ピットが検出された。主柱穴は4本

図版28　20号住居跡全景

ともほぼ対角線上にのり，径1.1～1.3m 深さ40～100cmである。また，補助柱穴とみられる小ピットが主柱線わずか壁寄りで，東に2個，西に1個確認された。炉は住居中央わずかに北東寄りの良く焼けた床面が該当する。その他，南壁中央に直交して間仕切り状の小溝と小ピット，北壁下の周溝を切って段状の掘りこみを検出した。

梅の木地区20号住居跡出土遺物実測図



挿図44

梅の木地区20号住居跡出土遺物一覧表

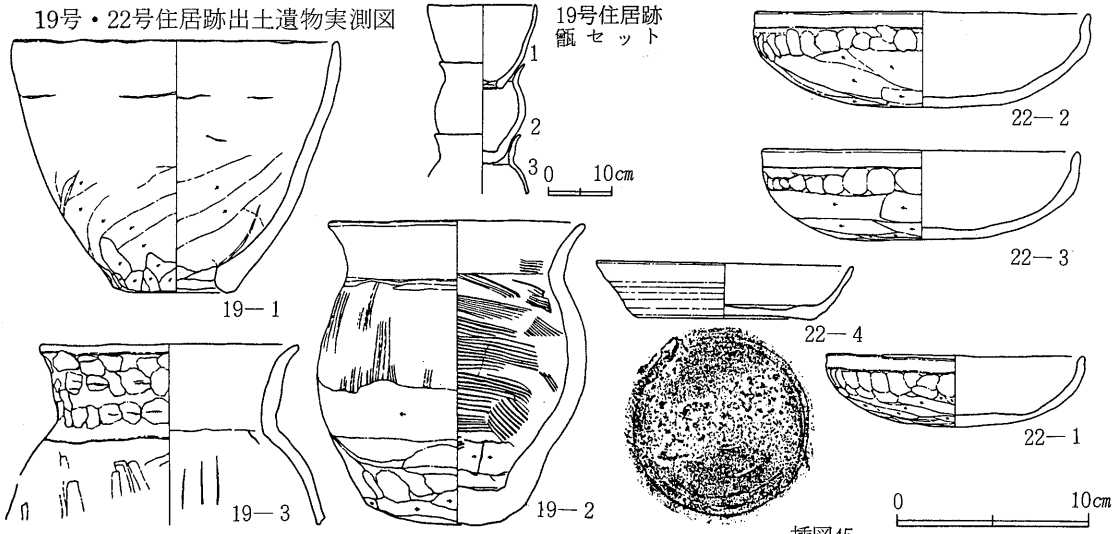
遺物番号(写真番号)	器種	法量(cm)	成・整形の特徴	胎土	備考
1 (20—1)	台付甕	口径 12.5 器高 26.3 底径 8.3	・ゆるやかなS字状口縁，肩の張り，脚部ハケ目の消滅，胴上半部ハケ目の間に認められるヘラ削りと新しい要素を示す台付甕。	粗粒砂含有。脚接合部に多量の粗粒砂。	胴上半部は淡褐色。胴下半部・内面茶褐色。脚部・胴中央部に黒斑。
2 (20—2)	高杯	底径 11.3 現高 6.8	・やや中膨みの脚部。脚部外面はハケによる整形後ヘラ磨き。脚面は粗いハケ目。	粗粒砂含有。精選。	淡褐色，裾部に黒斑。焼きは良好。
3 (20—3)	坩	口径 14.6 器高 5.6	・浅い底部，中央に円形の凹み。直線的に広がる口縁部。器面はハケ目後ヘラ磨き。	細礫・極粗粒砂を含有。	淡茶褐色。口縁部には対称的に黒斑。
4 (20—4)	台付甕	現高 21.5 底径 7.5	・口縁部および胴上半部欠失。1に比較してハケ目が密に施され，脚部にもハケ目が認められる。胴・脚部内面指による整形顕著。	少量の細礫と多量の粗粒砂を含有。	胴部内面淡褐色。胴部外面および脚部には二次焼成痕顕著。
5 (20—5)	器台	口径 9.6 器高 10.1 底径 12.0	・ゆるやかに外反する器受部。器受部・脚部との間に小孔は穿たれず，脚部のみ3孔。器面はハケ調整後ヘラ磨き。脚部内面指ナデ。	酸化鉄粒，極粗粒砂含有。	全体的に茶褐色。焼きは良好。
6 (20—6)	小型壺	口径 10.0 器高 15.1 底径 3.6	・直線的に広がる口縁部，球形の胴部，小さな底部。口縁部は細かなハケ目，胴部はハケ目の後粗いヘラ磨き，底部ヘラ磨き。	酸化鉄粒を少量含有。軟質。	全体的に淡い黄褐色。器面の剝離著しく，底部付近には黒斑。

梅の木地区19・22号住居跡

19号住居跡出土の甑セット及び22号住居跡出土の坏類

19号住居跡の甑＋甕＋甕の状態で出土した甑セットは，かまどの左袖に日常そこに置かれたかのようで，甑と甕の接する部分が著しく摩耗し使用頻度の高さを示す。22号住居跡出土の大中小三枚組土師坏は，同成整形で三枚が重なった状態で出土した。他に，全面ヘラ調整須恵器坏が出土した。

19号・22号住居跡出土遺物実測図



挿図45

梅の木地区19号住居跡出土遺物一覧表

遺物番号	器種	法量（cm）	成・整形の特徴	胎土	備考
19—1	甑	口径 16.6 器高 13.1 孔径 4.0	・口縁部の成形痕をとどめる鉢形甑。焼成後に穿孔。口縁部横ナデ。体部外面斜め上方ヘラ削り。底部付近細かなヘラ調整。内面体部下半ヘラ削り一周。	少量の細礫と，多量の粗粒砂や中粒砂を含有。	淡い暗褐色。対称的位置に黒斑を認める。器面は著しく剝離。焼きは脆い。
19—2	甕	口径 13.1 器高 15.9 底径 8.2	・口縁部はゆるやかに外反。胴下半部には屈曲が見られ，不定形な底部に接合する。 ・口縁部横ナデ。胴上半部には縦ハケ目。下半部および底部は横ヘラ削り。胴部内面粗いハケ目顕著	中礫や細礫は少量含有し，粗粒砂は多量に含有。	全体的に赤味を帯びた淡褐色。口縁部は著しく摩耗し，胴部表面は薄く剝離している。
19—3	甕	口径 13.1 現高 9.4	・直線的に立ち上り，口唇部でゆるやかに外反する口縁。横ナデを施すが成形時の痕跡明瞭。胴部外面ハケナデの上に粗いヘラ磨き。内面横ハケナデ。	中礫・細礫・粗粒砂等を多量に含有。	淡い茶褐色。口縁部周辺に二次焼成痕を認める。

梅の木地区22号住居跡出土遺物一覧表

遺物番号（写真番号）	器種	法量（cm）	成・整形の特徴	胎土	備考
22—1 （22—1）	坏	口径 13.1 器高 3.7	・底部中央は厚く，指頭圧痕が残る浅い坏。口縁部は横ナデ，底部は左方向にヘラ削り。	粗粒砂・中粒砂を含有。	全体的に淡褐色で，内面は摩耗している。
22—2 （22—2）	坏	口径 17.2 器高 4.9	・内弯し，口唇部でやや外反する口縁。口縁部横ナデ，底部ヘラ削りを施した大型の坏。	細粒砂を多量に含有。	淡褐色で，口縁部内面に著しい摩耗。
22—3 （22—3）	坏	口径 16.3 器高 4.6	・口縁部がやや直線的に広がる大型坏。口縁部横ナデ，底部左方向ヘラ削り。指頭圧痕。	細粒砂を多量に含有。	全体的に淡褐色。焼きは良好。
22—4 （22—4）	須恵坏	口径 13.1 器高 2.9 底径 8.8	・ロクロ右回転に用い成形。底部切り離し後底部全面ヘラ調整。体部の半周に自然釉がかかる。	含有鉱物の溶出，黒色斑点状に存在。	淡い暗灰色で，焼きは堅緻である。

竪穴住居跡遺構一覧表（梅の木地区）

住居番号	形状 壁走向	規模（m） （長壁×短壁） 壁高（cm）	床面積（㎡）	かまど 位置	かまど つくり幅（cm）	周溝	柱穴	貯蔵穴	備考 （数字の単位はcm）	重複関係
1	方形 N—35°—W(東)	4.00×3.80 25	15.2			○	○ (5)	○ (2,円)	火災住居。焼土が厚く堆積しその下から大量の土師器。焼土は火の子よけか。	1→2
2	方形 N—22°—W(西)	3.60×3.52 28	12.67	東壁中央	粘土・支脚に高坏 35	○	○ (4)	○ (円)	黒色土上に粘土でカマドを作る。 (除湿用か)壁，床ともしっかりしたローム層。	1→2
3	? カマドの中心縦を主軸 N—25°—W(西)	?	?	北壁	粘土・袖甕 支脚小壺 50	?	○ (4)	?	H—1に切り込んでいる部分は貼床。 壁は直に掘り込まれている。	1→3
4	方形or長方形 N—2°—W(西)	3.50×? 35	?	?	?	○	○ (3＋α)	○ (円)	間仕切りあり。貯蔵穴脇に壁に沿って白色粘土塊と土器散乱，カマドは未掘部か。	
5	長方形 N—1°—W(西)	4.10×3.00 28	12.30			○	×	○ (円)	栗の木の攪乱で床面がデコボコ。 南壁はほとんどない。	5→6
6	長方形 N—26°—W(西)	4.00×2.60 41	10.40	北壁中央	粘土40 カマド内土師坏	○	×	○ (隅丸)	東壁一部未掘，床面は堅くしまっている。 カマドは北壁からだと焼土の塊が流れた様子。	5→6
7	隅丸方形 N—37°—W(西)	5.00×4.80 39	24.0			×	○ (4)	×	砂地に掘り込んであるため床がわかりにくい。 壁も砂礫層。中央北壁寄りに焼土（炉跡か）。	
8	長方形 N—25°—W(西)	5.20×4.10 58	21.32			○	○ (4)	○ (円)	火災住居。床面は堅くしまっているが砂質。 遺物出土量が非常に少。ほぼ中央に炉跡。	
9	長方形 N—25.5°—W(西)	4.40×3.80 28	16.72			×	○ (4)	○ (円)	黒色土層（沖積層）に掘りこまれて床も黒色土で炉跡は北東の柱穴脇。かたくしまっている。	
10	方形 N—37.5°—W(西)	3.50×3.30 23	11.55	東壁中央	粘土50 カマド内土師坏	×	○ (4)	○ (円)	カマドは壁を掘らずに粘土を壁につけて作る。 貼床（黒色土）の可能性あり，壁は砂質でもろい。	
11	方形 N—0°—W(西)	4.60×4.30 44	19.78	東壁わずかに 南寄	粘土40 石製支脚 （川原石）	○	○ (4)	○ (円)	カマドの作りはH—10と同様。壁は砂質でもろい。貼床（黒色土）であろう。貯蔵穴中に甕（完形に近い。）	
12	隅丸方形or隅丸長方形 N—11.5°—W(東)	4.30×? 32	?			×	×	×	H—13に半分以上を切られているためプランは定かでない。	12→13
13	方形 N—23°—W(西)	4.10×4.00 58	16.4	東壁わずかに 南寄	粘土50	○	○ (4)	○ (円)	間仕切りと考えられるものあり。カマドはH—10，11と同様の作り。白色粘土塊が南壁寄りに。貼床（黒褐色土）	12→13
14	方形 N—21.5°—W(西)	6.10×5.80 60	35.38	北壁中央	粘土60	○ (一部)	○ (4)	×	壁は砂礫。床はしまりがない。カマドの粘土袖がダラッと長くのび焼土が広く散乱。	19→14
15	方形or長方形 N—13.5°—W(西)	3.90×? 45	?	?	?	×	○ (2＋α)	?	東側は調査区外のため約½部分を調査。 破片が多く，流れ込みの遺物も多量。	
16	長方形 N—5°—W(西)	4.50×4.00 51	18	東壁わずかに 南寄り	粘土40	○ (一部)	○ (4)	○ (円)	壁は砂礫層。カマドは壁をわずかに掘って粘土で作る。貼床。	

住居番号	形状 壁走向	規模（m） （長壁×短壁） 壁高（cm）	床面積（㎡）	かまど 位置	かまど つくり 幅（cm）	周溝	柱穴	貯蔵穴	備考 （数字の単位はcm）	重複関係
17	方形 N—17°—E(西)	5.60×5.30 40	29.68	東壁南寄	粘土50 支脚・坩・坏	○	○ (4)	○ (円)	火災住居。カマドは粘土を多量に使って堅固に作られている。壁は砂礫層。	17→18
18	?	?	?	?	粘土 (黒色土の上)	?	○ (3＋α)	×	H—17にスッポリ入り込んでいるためか壁が確認できず，カマドは黒色土上に作られる。	17→18
19	?	?	?	?	粘土50	?	?	?	調査区外のためプランが確認できず，カマド周辺のみ調査。カマド周辺の土器出土量が多い。	19→14
20	長方形 N—12.5°—E(西)	8.00×7.30 39	58.4			○	○ (大4 小8)	○ (2,円)	焼失住居。幅約25cm～30cmの周溝が全周している。北東柱穴の脇に炉跡あり。	
21	? N—5°—E (カマドの中心線)	?	?	北壁	粘土	?	?	?	壁の立ち上がりが不明確。カマドのみ把握可能，遺物出土なし。	
22	方形 N—20.5°—E(西)	3.10×3.00 20	9.3	東壁南寄	粘土40 袖・砂質凝灰岩	×	×	○ (円)	黄灰色の砂質土に掘りこまれているため壁が非常に脆い。壁を切り込んでカマドを作る。	
23	長方形 N—10°—E(東)	4.80×3.90 20	18.72	東壁南寄	粘土80 カマド内に甕	×	○ (2＋α)	○ (円)	住居址の西側部分½程井戸状ピットに切られている。焼失住居。全面に焼土散布。	23→井戸状ピット
24	方形 N—5°—E(西)	5.90×5.90 33	34.81	東壁南寄	粘土60 石製支脚	○	○ (4)	○ (長方形)	壁は直に立つが砂礫層。床はしまりがない。貼床・カマドは袖が長くよく焼けている，遺物は南壁に多い。	
25	長方形 N—6.5°—W(東)	4.40×3.80 46	16.72	東壁南寄	粘土48 カマド内土師坏	×	○ (4)	○ (楕円)	北壁は後世の攪乱を受けている。壁・床とも砂礫で脆い。カマドの袖長く，カマド先端に甕・貼床。	
26	方形 N—6.5°—W(西)	3.90×3.80 40	14.82	東壁南寄	粘土30 カマド内大型埦	×	○ (4)	○ (円)	砂礫層に掘り込まれる。南壁に張り出し。貼床の可能性。	
27	? N—19°—W(東)	?	?	東壁	粘土 支脚高坏	?	?	○ (円)	東壁周辺部のみ調査可。カマド周辺に焼土多し。	
28	長方形 N—4.5°—E(東)	2.30×? 30	?	東壁南寄	壁を切り込む 40	×	×	○ (円)	トレンチにかかったのは全体の½。浅間Bの軽石と灰層下約30cmのところに掘り込まれる。壁・床とも砂質土。	28→29
29	長方形 N—25°—E(東)	3.90×? 26	?	東壁南寄	粘土30 袖・円筒埴輪	×	×	○ (円)		28→29
30	?	?	?	?	?				カマド断面のみ確認。	

遺物一覧表（梅の木地区）

住居跡番号	土師坏類														煮沸用土器			壺	高坏	坩	器台	その他
	平底タイプ				丸底タイプ					須恵器タイプ			埦	坏類合計	脚付甕	甕	甑					
	a_1	a_2	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k										
			(a_1の丸底タイプ)																			
1			1	1		1	2		4					7		大1 7(18)	3		1(5)	2		土器量多
2										2				2		4	1		1			砥石1
3					1			1		1		1		4		4(2)		1		1		砥石1 坩はカマド内
4		2											(1)	2(1)			1					土製品1 （北壁西側に沿う）
5							1	1	2				3	7		5(3) 小(1)	1		1			甕は埴輪状のハケ目がついて粗雑
6	1				2				1	1	1	2		8		3(1)	2	短1 (1)	1			
7															3				3	3	1	
8															3				3	1		
9															4	大4 小2				(1)		
10					1			1		1	1	1		5		大1 2(3)	1(？)		(1)			坏に鬼高Ⅱの様相（カマド内）
11				1		1	1	(1)	(1)		(1)		2	6(3)		4		2 (瓦塔タイプ)				
12															2	1						
13		1	1	1					1	1			大1 1	7		特大2 中 2 小 4	3		2			
14							1					1	1	3		3(3)	大2 小1	小(1)				砥石1 石製品1
15									1	1	2			4		2(1)			1			
16				2	1			3	1				2	9		9(2)		短1	(1)			
17								1	3	3	3	2		12		4(9)		大1 中1 小2	1	(2)		

住居跡番号	土師坏類														煮沸用土器			壺	高坏	坩	器台	その他
	平底タイプ				丸底タイプ					須恵器タイプ			埦	坏類合計	脚付甕	甕	甑					
	a_1	a_2 (a_1の丸底タイプ)	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k										
18																						
19	1		1	1					2	1			大1 2	9		6(3) 小2	1	小1	1			甑が甕とセットで重なって出土
20															9			小1	5	4	1	砥石3 鉄製品3
21																						
22							1									1						須恵坏 土師坏，大，中，小
23										1	1					大1 中6 小1						皇宋通宝，喜祐元宝 治平元宝，熙寧元宝 元豊通宝，元祐通宝
24		2			1		1	2		3	3	1	3	16		9(1) 小1	3		15			
25					3			1	1	1	1		大1	8		大2 中10(7)			(1)			覆土上層より 須恵坏2
26	1	1												2		7(3) 小1	2					
27			1		2								1	4		2	1(2)		3			
28																						羽釜1
29																						灯明皿2 高台埦，円筒埴輪
30																						カマド断面のみ

遺物の数は，住居跡につくものの個数。（　　）は小片。

a_1＝平底，内斜口縁　a_2＝a_1の丸底タイプ　b＝平底，外反口縁（椀型）　c＝平底，内わん口縁（鉢型）　d＝丸底，外反（長）口縁
e＝丸底，内側に稜有口縁　f＝丸底，内斜口縁　g＝丸底外反（短）口縁　h＝丸底，内わん口縁　i＝須恵器タイプ，直立口縁
j＝須恵器タイプ，外斜口縁　k＝須恵器タイプ，内斜口縁

9. ま と め

昭和56年度の調査では以下のことが確かめられた。

○荒砥村第62号，64号墳を確認，調査しえた。第62号墳は残っていた墳丘4分の1と周堀を調査した。主体部は完全に消失していたが墳丘盛土の基盤層が二ツ岳系軽石を含む黒色土層であったこと，墳丘に葺石がなく，埴輪片を少量出土したことなどから6世紀後半から7世紀前半あたりに築造時期を比定しえようか。墳丘規模は推定で直径約24m。第64号墳は取り付け道路部分にかかる34㎡のトレンチ調査をしたのみであったが上幅約11mの周堀を確認。墳丘規模は直径約36m。

○C区は埋土中に浅間C軽石を含み，弥生式土器を伴う住居13軒を検出した。赤井戸系，樽系の土器が共伴し，また，石田川系の影響もみられ，各々の住居間には多少の時期差があるものの全体としてはC軽石降下以降，4世紀後半あたりの古墳時代移行期に比定しえようか。D区は15軒の弥生式土器を伴う住居を検出した。C軽石純層が埋土中に検出された住居（172号，179号住居）を除いては樽系の櫛描文土器がC区に比べて多く，石田川系の土器も混在していて全体としてはC区とほぼ同じ時期と推定される。

○集落の主体をなすものは古墳時代後期鬼高Ⅱ～Ⅲの時期の住居で108軒を検出した。6世紀後半以降7世紀代が中心になると思われる。

○奈良時代後半から平安時代にかけての住居は40軒検出した。下限は生活用品が土師器だけに限定され，土釜が出現する11世紀代以降と思われる。

○周溝墓はD区南丘陵に渡りのあるもの4基，F区に渡りのないもの4基を検出した。いずれも埋土中にC軽石を含み，出土した土器からはほとんど時期差が認められず4世紀後半に比定されよう。

○昭和55年度調査に引き続きD区丘陵東側縁部分に中世の墓壙4基を検出した。板碑（明徳4年？—1393年），銭（元豊通宝—1251年以降，洪武通宝—1368年以降）を出土した。

○大室元城跡は，径90mのほぼ円形に設定され，プランにそって内側に部分的に断続しながら堀が造られ，遺物はその中から集中して出土した。

梅の木地区

○竪穴住居跡は古墳時代前半から在り，鬼高Ⅱの時期から真間期にかけての遺構が検出されなかったが国分期になると再び検出されるようになる。全部で30軒を調査。

○集落の主体をなすものは古墳時代後期鬼高Ⅰの時期の住居で16軒を検出した。

○鬼高Ⅰの時期の住居は柱穴が住居の対角線上に乗り，かつ対角線の交点を中心にした円周上にも乗る例が多く，貯蔵穴の位置とともに極めて企画性が強い。また，梅の木地区ではこの時期から煙道部が壁外にほとんど出ず長い粘土袖を住居内に張り出した竈が多く付設されている。

○古墳時代前期から中期（石田川期～和泉期）にかけての住居は6軒中3軒が火災住居であった。

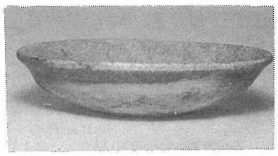
図版29

69号住居出土

117号住居出土

154号住居出土

9号住居出土


第1号墓壙出土

第1号墓壙出土

12号住居出土

48号住居出土

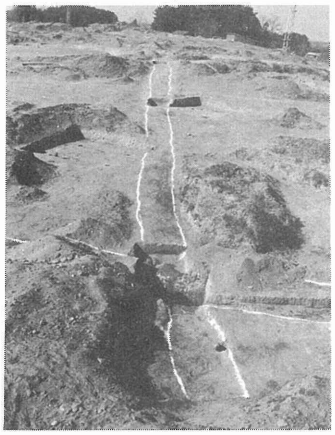
E区　トレンチ5

C区　遠　　景

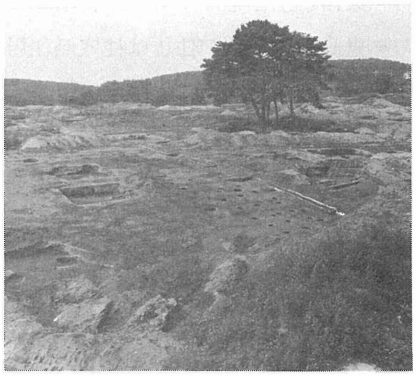
A区　全　　景

D区　遠　　景

E区　遠　　景


D区　遠　　景

G区　全　　景

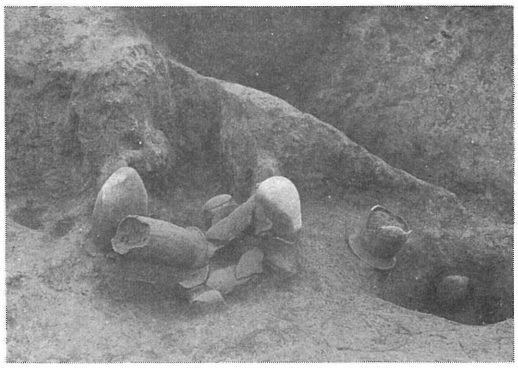

D区　遠　　景

図版30

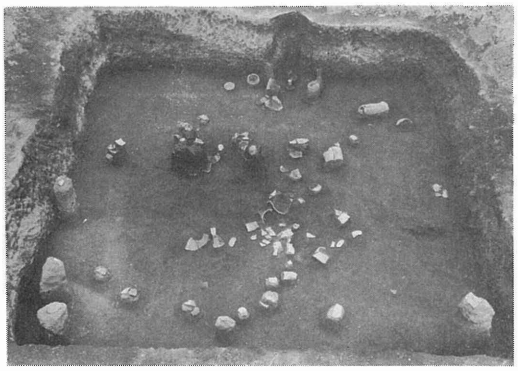
6号住居跡遺物出土状態

12号住居跡及び自然石堆積状態

52号住居跡遺物出土状態

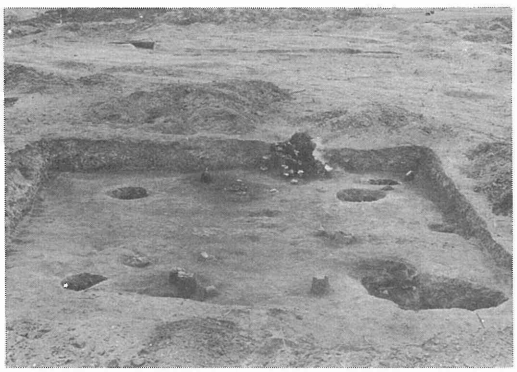


52号住居跡カマド遺物出土状態



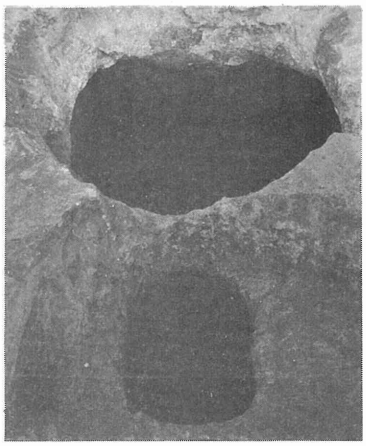
44号住居跡遺物出土状態

44号住居跡カマド遺物出土状態

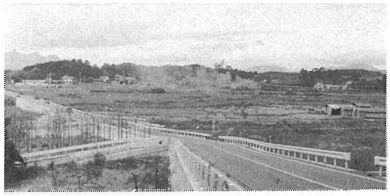


126号住居跡遺物出土状態

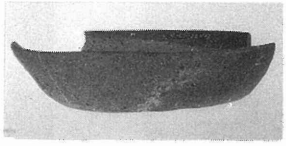
2号墓壙



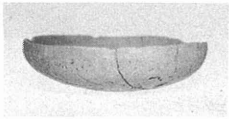
図版31



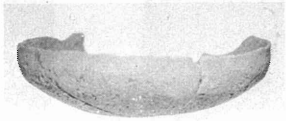
梅の木地区遠景（東より西を望む）



22―4

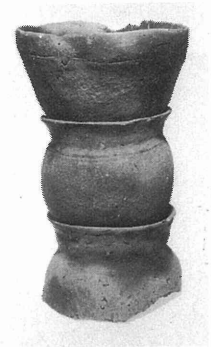


22―1



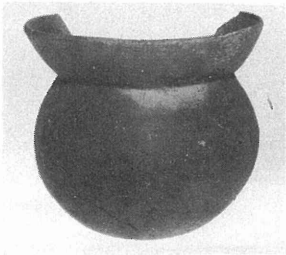
22―2

22―3

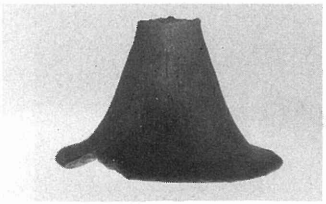


19号住居跡甑セット

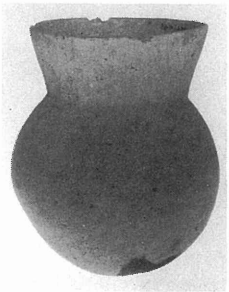
甑セット出土状態



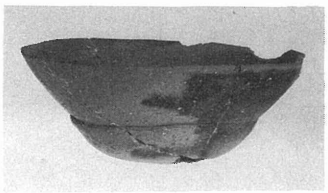
8号住居跡出土遺物



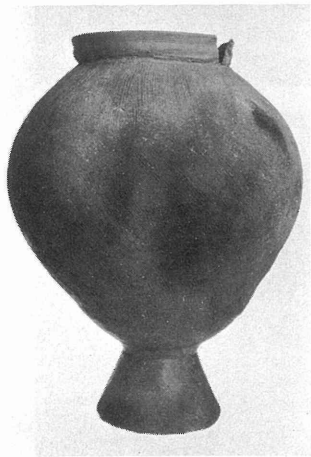
20―2



20―6

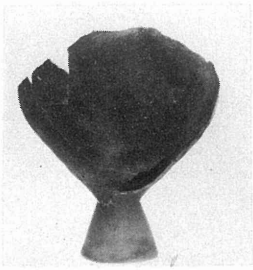


20―3



20―1

20―5



20―4

整理作業員　金井　君江　亀井　弘美　柴崎まさ子　鷹巣　大城　中束　彰子
洞口恵美子
発掘作業員　久保千代子　根岸　いく　小保方静子　入沢　やい　天沼キヨノ
橋本　タキ　内藤美代子　牧野せつよ　吉田　寿代　小林　初子　星野　辰男
天沼福太郎　小屋　政雄　高橋　省三　石井長太郎　大沢くに子　吉田かほる
吉田美智子　棚橋きぬ子　高橋やすの　星野ちか江　山田　記子　松本　保
萩原　信幸　吉田婦志子　根岸うめの　滝沢　靖　萩原　英子　梅沢　晋
吉田　節也　上原今朝雄　吉田　節子　下山　良雄　阿久沢岩吉　羽鳥　馨
細谷　文雄　登山　健一　木村はる子　岡　好江　内田　こう　阿部　ふく
内田　マツ　内田みつ代　茂木　光子　岡　たけ　伏島　栄子　関根　勝美
吉田アツ子　関根　汀　吉田　静江　須藤東亜子　石井　春枝　久保　ヒデ
久保もり子　棚橋うし子　萩原　操　森田はるゑ　萩原チエ子　内藤　たか
萩原　和子　山田　きみ　木村かく乃　内藤きん子　藤原サト子　浜岡　きく
浜岡　秋伸　星野　さと　古松英太郎　横沢　信子　荒木　安治　細谷　重子
（順不同）他，多数の方々に御協力いただきました。

富田遺跡群
西大室遺跡群

昭和57年3月31日　印刷
昭和57年3月31日　発行

発行　前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目12番1号
印刷　有限会社　原　田　印　刷　所

社会教育課